

平成4年度

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ) 35

- I 成法寺遺跡 (第5次調査)
- II 中田遺跡 (第3・4次調査)
- III 竹渕遺跡 (第2次調査)

1992年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



平成4年度

八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)

I 成法寺遺跡 (第5次調査)

II 中田遺跡 (第3・4次調査)

III 竹渕遺跡 (第2次調査)

1992年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守り、保護・保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

今回、平成元年度に実施しました成法寺遺跡(第5次調査)・中田遺跡(第3・4次調査)・竹渕遺跡(第2次調査)の調査が完了し、報告書を刊行する運びとなりました。本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、これらの発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成4年10月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 福島 孝

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成元年度に実施した発掘調査成果の報告を集録したもので、内業整理及び本書作成業務は各現地調査終了後に着手し、平成4年10月をもって終了した。
1. 本書に集録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書の構成・編集は坪田真一が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1(昭和61年8月発行)・10,000分の1(昭和57年11月発行)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、磁北を示している。
1. 遺構は下記の略号で表した。

土坑—SK 溝—SD 落ち込み—SO ピット—SP
方形周溝墓—SX

1. 実測図の縮尺は、遺物は4分の1を基調としたが、遺構に関しては統一していない。
1. 遺物実測図の断面は須恵器を黒とし、他は白とした。
1. 各調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

はしがき

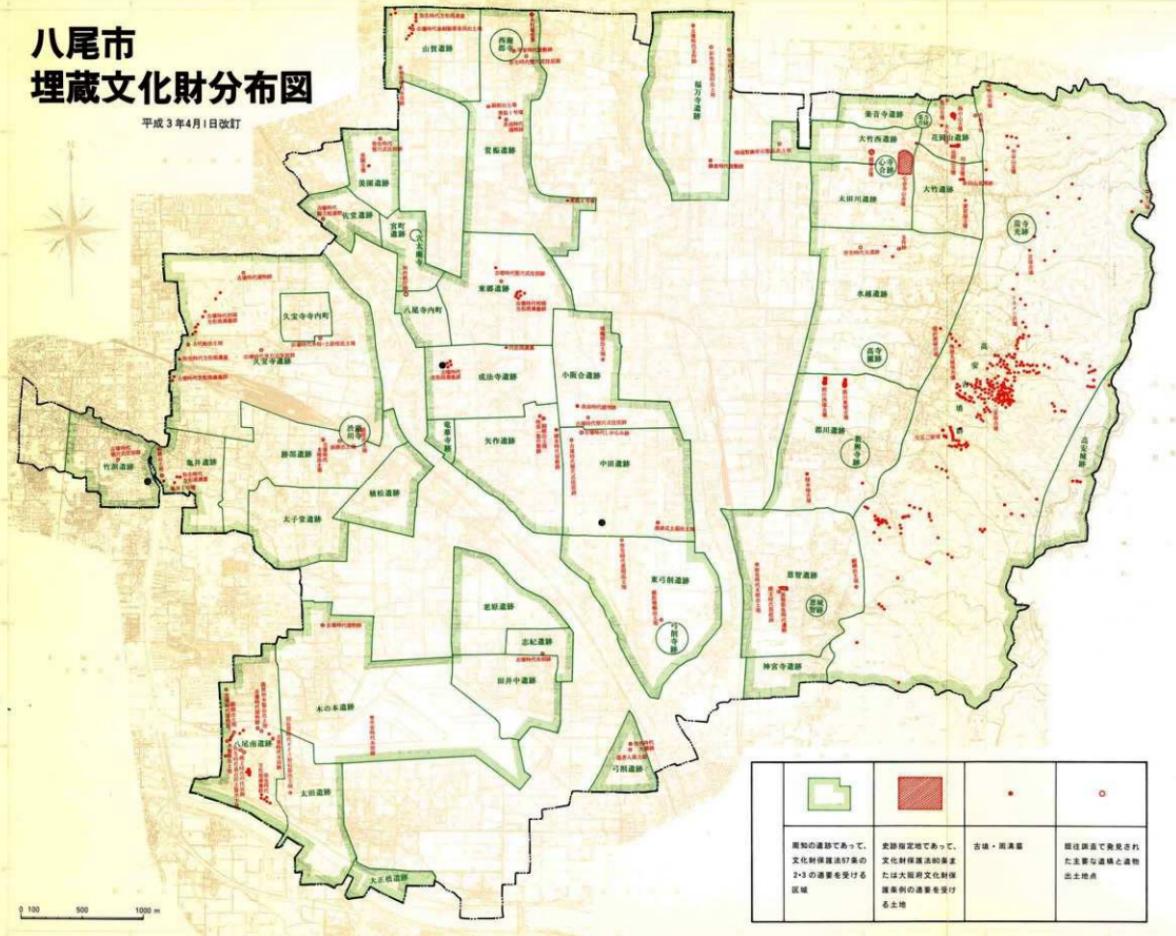
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 成法寺遺跡(第5次調査).....	1
II 中田遺跡(第3・4次調査).....	48
III 竹洞遺跡(第2次調査).....	81
IV 指示書.....	94

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成3年4月1日改訂



I 成法寺遺跡(S H89-5)

例　　言

1. 本書は、八尾市光南町1丁目46・47-1で行った共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、株式会社ビーバーハウスの委託をうけて実施したものである。
1. 本調査は、当調査研究会が成法寺遺跡内で実施した第5次調査である。
1. 本調査は、当調査研究会 坪田真一を担当者として、平成元年10月9日に着手し、同年11月16日に終了した。調査面積は400m²である。
1. 現地調査には、岡田聖一・今西隆行・佐藤隆史・並河聰也・松浦明美・森本浩一が参加し、また岡田清一（現当調査研究会）・横山妙子の協力を得た。
1. 内業整理には上記の他、市森千恵子・岩本順子・坂下 学・田島和恵・都築聰子・永里とよ子・濱田千年・宮崎寛子・村井俊子・山内千恵子・若竹慶弘の参加を得た。
1. 本書の執筆・遺物写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表を田島・山内が作成した。

本 文 目 次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 周辺の地理的・歴史的環境.....	1
第3章 調査概要.....	3
第1節 調査方法.....	3
第2節 基本層序.....	4
第3節 検出遺構と出土遺物.....	7
第4章 まとめ.....	32
第5章 遺物観察表.....	40

挿図目次

第1図 調査区位置図(S=1/5000)	2
第2図 地区割図(S=1/400)	3
第3図 基本層序(S=1/40)	4
第4図 平面図(S=1/200)	5 ~ 6
第5図 II区 S D231断面図(S=1/40)	8
第6図 II区 墓輪円筒棺平・断面図(S=1/20)	8
第7図 II区 S D231出土遺物(S=1/4)	9
第8図 II区 墓輪円筒棺出土遺物(S=1/6)	10
第9図 III区 包含層出土遺物(S=1/4)	11
第10図 I区 S X301平面図(S=1/80)	12
第11図 I区 S X302平面図(S=1/80)	12
第12図 I区 S X301出土遺物(S=1/4)	13
第13図 I区 S X302・S K301出土遺物(S=1/4)	13
第14図 I区 S K303遺物出土状況平面図(S=1/20)	14
第15図 I区 S K303出土遺物(S=1/4)	14
第16図 III区 S K310出土遺物(S=1/4)	14
第17図 II区 S K311平・立面図(S=1/30)	15
第18図 II区 S K311出土遺物①(S=1/4)	16
第19図 II区 S K311出土遺物②(S=1/4)	17
第20図 III区 S D301出土遺物(S=1/4)	18
第21図 II区 S D303遺物出土状況平面図(S=1/30)	19~20
第22図 III区 S D303遺物出土状況平面図(S=1/30)	21
第23図 II区 S D303上層出土遺物①(S=1/4)	22
第24図 II区 S D303上層出土遺物②(S=1/4)	23
第25図 II区 S D303上層出土遺物③(S=1/4)	24
第26図 II区 S D303下層出土遺物①(S=1/4)	25
第27図 II区 S D303下層出土遺物②(S=1/4)	26
第28図 II区 S D303下層出土遺物③(S=1/4)	27
第29図 II区 S D303下層出土遺物④(S=1/4)	28

第30図	II 区	S D 303下層出土遺物⑤(S=1/4)	29
第31図	II 区	S D 303下層出土遺物⑥(S=1/4)	30
第32図	II 区	S D 303下層出土遺物⑦(S=1/4)	31
第33図	II 区	S D 303下層出土遺物⑧(S=1/4)	32
第34図	II 区	S D 303下層出土遺物⑨(S=1/4)	33
第35図	II 区	S D 303下層出土遺物⑩(S=1/4)	34
第36図	III 区	S D 303出土遺物①(S=1/4)	35
第37図	III 区	S D 303出土遺物②(S=1/4)	36
第38図	III 区	S D 303出土遺物③(S=1/4)	37
第39図	III 区	S D 303出土遺物④(S=1/4)	38
第40図	市教委調査区	遺構平面図(S=1/600)	39

表 目 次

表1	I 区第1次面 溝 (S D 101~107)法量表	7
表2	I 区第2次面 溝 (S D 201~230)法量表	8
表3	第3次面 土坑 (S K 304~309・312~318)法量表	18
表4	第3次面 ピット (S P 301~304)法量表	18

図 版 目 次

図版1	I 区 第1次面 全景 (西から)	
	I 区 第2次面 全景 (西から)	
図版2	II 区 第2次面 S D 231 (東から)	
	II 区 第2次面 塗輪円筒棺 (南から)	
図版3	I 区 第3次面 全景 (西から) II 区 第3次面 全景 (西から)	
	I 区 第3次面 S X 301遺物出土状況 (南から)	
図版4	I 区 第3次面 S X 302遺物出土状況 (南から)	
	I 区 第3次面 S K 303遺物出土状況 (南から)	
図版5	II 区 第3次面 S K 311遺物出土状況 (南から)	

- II区 第3次面 S D303遺物出土状況（西から） （東から）
- 図版6 II区 第3次面 S D303遺物出土状況（南から）
- II区 第3次面 S D303遺物出土状況（南から）
- 図版7 II区 第3次面 S D303遺物出土状況（北から）
- II区 第3次面 S D303遺物出土状況（北から）
- 図版8 III区 第3次面 全景（北から）
- III区 第3次面 全景（南から）
- 図版9 III区 第3次面 S D303遺物出土状況（西から）
- III区 第3次面 S D303東壁遺物出土状況（西から）
- 図版10 出土遺物 II区埴輪円筒棺
- 図版11 出土遺物 III区包含層 I区S X301
- 図版12 出土遺物 I区S K301 S X302 S K303 III区S K310 II区S K311
- 図版13 出土遺物 II区S K311
- 図版14 出土遺物 II区S K311 III区S D301 II区S D303上層
- 図版15 出土遺物 II区S D303上層
- 図版16 出土遺物 II区S D303下層
- 図版17 出土遺物 II区S D303下層
- 図版18 出土遺物 II区S D303下層
- 図版19 出土遺物 II区S D303下層
- 図版20 出土遺物 II区S D303下層
- 図版21 出土遺物 II区S D303下層
- 図版22 出土遺物 II区S D303下層 III区S D303
- 図版23 出土遺物 III区S D303下層

第1章 調査に至る経過

成法寺遺跡は、八尾市の中央部西に位置し、現在の行政区画では光南町・清水町・南本町・高美町・松山町・明美町・陽光園一帯がその範囲となっている。

当遺跡は、昭和56年5月、八尾市教育委員会が光南町1丁目29番で実施した試掘調査により確認されたもので、以後八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期から続く複合遺跡であることが確認されている。

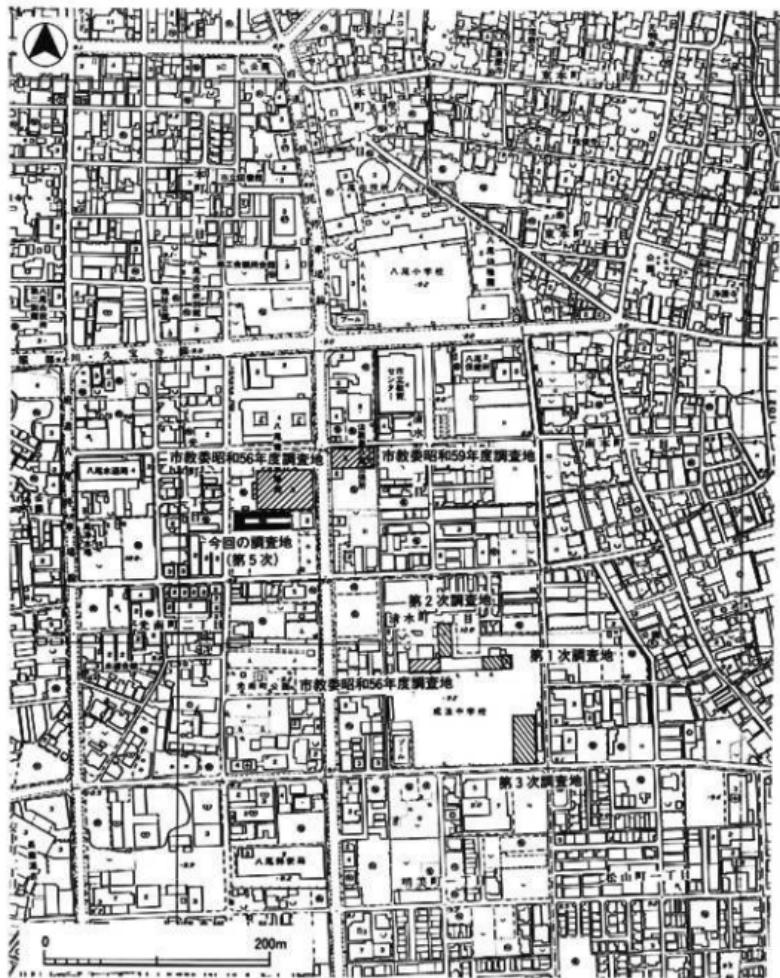
このような情勢下、㈱ビーバーハウスより、八尾市光南町1丁目46・47-1番において共同住宅を建設する旨の届出が、八尾市教育委員会文化財室に提出された。申請地は成法寺遺跡の周知の範囲内であり、また昭和56年度の八尾市教育委員会による調査（以下、市教委調査）で古墳時代前期初頭の方形周溝墓・後期の掘立柱建物等が確認された調査地の南側に連続する部分でもある。当然、遺構等埋蔵文化財の存在が予測され、建物の基礎工事でそれが破壊されることが明らかであった。このため同文化財室と施主との間で協議が行われたが、設計変更が不可能なため、発掘調査の必要があると判断するに至った。八尾市教育委員会・施主・当調査研究会の三者で協議した結果、建物基礎部分について当調査研究会が発掘調査を行うことが決定した。

第2章 周辺の地理的・歴史的環境

成法寺遺跡は、八尾市の中央部西に位置し、北流する旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。この南北方向に形成された沖積地上には南から東弓削・中田・矢作・小阪合・成法寺・東郷・萱振・美園・山賀と、連綿と遺跡が連なっている。成法寺遺跡は北側で東郷遺跡、東側で小阪合遺跡、南側で矢作遺跡と接しており、長瀬川を挟んで西側には久宝寺遺跡が位置している。

成法寺遺跡周辺で確認されている遺構で、最古の例は弥生時代中期に遡り、当遺跡の北東部で検出された方形周溝墓・土坑、東郷遺跡西部の土坑・小阪合遺跡北部の集落があげられる。弥生時代後期には各地で集落が拡大していると考えられ、検出遺構は増加している。この時期の墓域は確認されていない。古墳時代前期は、各遺跡での遺構・遺物の検出増加が顕著にみられ、この地域の集落の最盛期であったといえる。成法寺遺跡・東郷遺跡においては、居住域と墓域が確認されており、当時の集落構成が解明されつつある。古墳時代中期では各遺跡で集落遺構・遺物が検出されているが、断片的なものにとどまっている。また各遺跡で埴輪の出土が

認められ、小阪合遺跡の北部では埴輪円筒棺が検出されている。古墳時代後期では成法寺遺跡で掘立柱建物群が検出されている。奈良時代では成法寺遺跡中央部で掘立柱建物等の居住域が確認されている。中世では東郷遺跡において居住域が東部に広がってゆき、西部から中央部が生産域に移り変わる傾向が確認されている。



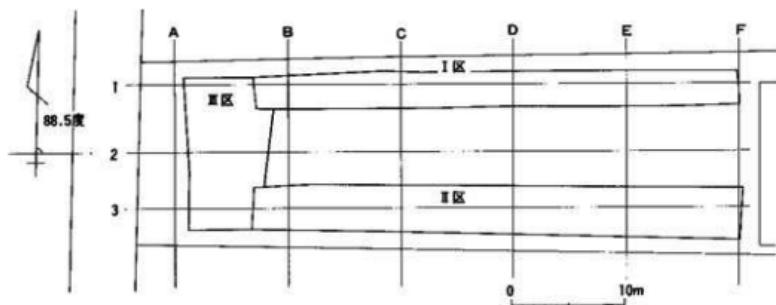
第3章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査は、建造物の基礎部分を対象としたため、調査区の平面形は東西に狭長な逆コの字形になっている。さらに掘削排土処理の都合上、調査区全体を一度に掘削することが困難であった。そのため調査区をⅠ～Ⅲ区に三分割し、Ⅰ区から調査を行い、順次埋め戻しながら調査を進めることになった。

掘削については、当調査区北側の市教委調査の順序を参考にして行った。Ⅰ・Ⅲ区では地表下約1.8m、Ⅱ区では約1.6mを機械掘削とし、以下を層理にしたがって人力掘削により調査を行った。

調査地の地区割については、Ⅰ・Ⅱ区が東西に細長いため、まずこの中間に南北方向の基準となるライン（2ライン）を任意に設けた。これに平行させて、北に6mの1ライン、南に5mの3ラインを設け、それぞれⅠ・Ⅲ区の基準ラインとした。狭長な調査区内にラインを通したため、中途半端な数値となっている。東西方向は、Ⅲ区西側に1～3ラインと直交するAラインを任意に設定し、ここから東へ10m間隔でB～Eラインを設けた。これらのラインの交点が、数字（1～3）+アルファベット（A～E）の杭番号となり、これがその東側10m間の地区番号となる。なお、当調査の南北ラインは、磁北から約1.5度西に振っている。



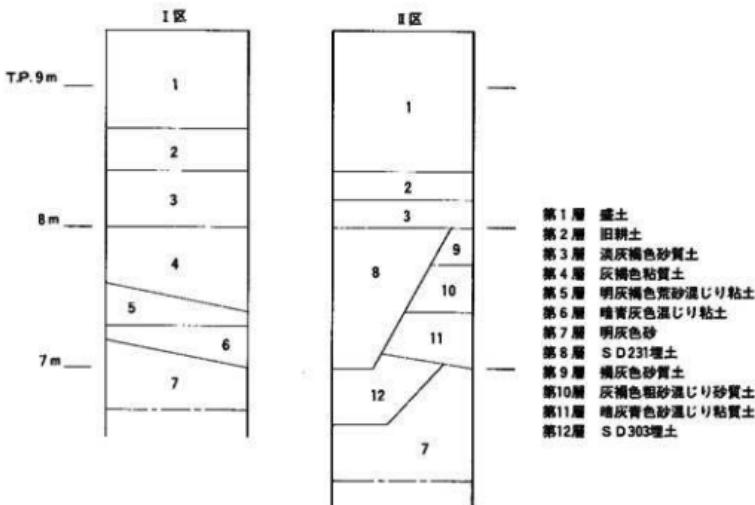
第2図 地区割図 ($S = 1/400$)

第2節 基本層序

当調査地の基本層序をみると、地表下約1.4m（標高8.0m）までについては、I・II・III区とも普通的なものである。第1層—盛土、第2層—旧耕土、第3層—淡灰褐色砂質土で、第3層は第2層に伴う整地層と思われ、近世以降のものであろう。以下の層序は、I区とII・III区とでは全く様相が異なる。

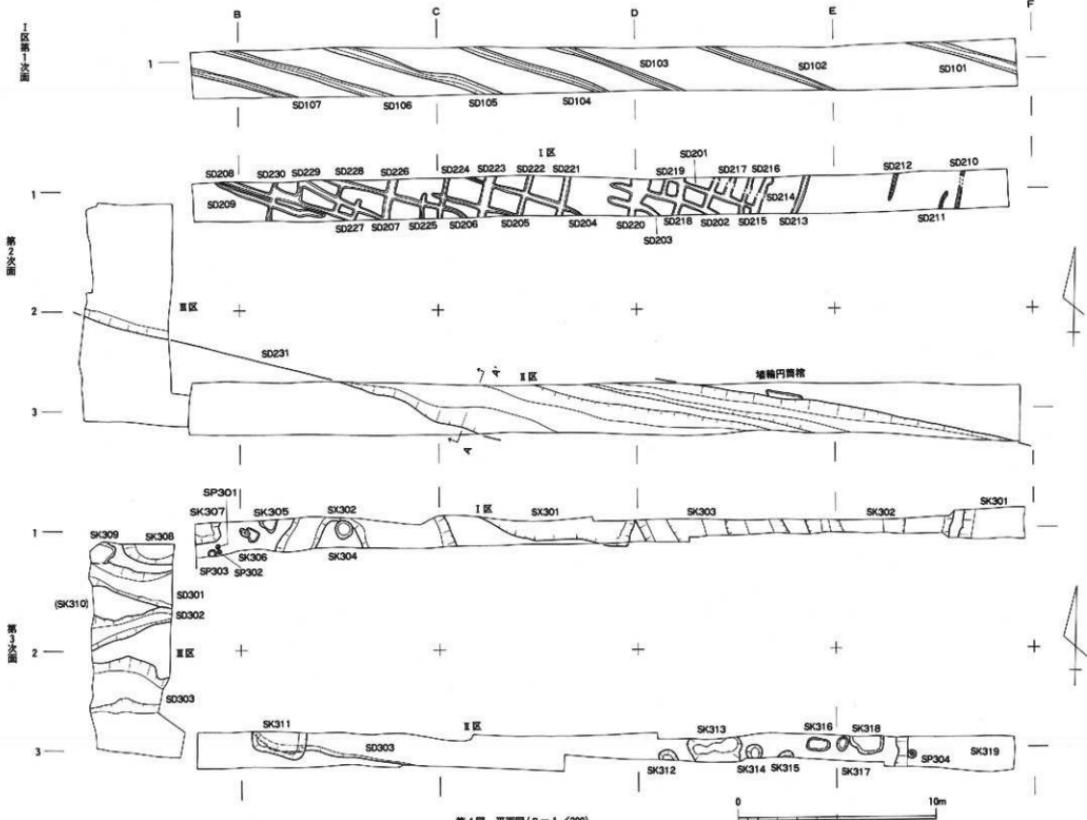
I区では、第4～6層が調査区全域にわたってほぼ水平に堆積している。第5層上面（標高7.5m）が第1次面、第6層上面（標高7.3m）が第2次面、第7層上面（標高7.1m）が第3次面となる。第4層には中世頃の遺物が若干認められ、第1次面は中世頃の生活面と考えられる。第5層は古墳時代後期の包含層で、わずかに奈良時代の遺物も含んでいる。第6層は弥生時代後期末～古墳時代初頭の包含層である。第7層の明灰色砂が地山層で、無遺物層である。

II・III区をみると、第3層以下は大部分が第8層のS D231埋土に占められている。II区西部とIII区南部にみられた第10層灰褐色粗砂混じり砂質土は、弥生時代後期の土器を多量に含む包含層である。地山層はI区同様第7層明灰色砂である。



第3図 基本層序 (S = 1/40)

I 成法寺遺跡



第4図 平面図 (S = 1/200)

第3節 検出遺構と出土遺物

I区では第1～3次面、II・III区ではこのうち第2・3次面を確認した。

<第1次面>

第1次面はI区のみで確認した。遺構面の標高は西部で約7.6m、東部で約7.4mを測り、東部が低くなっている。検出遺構は溝7条（SD 101～107）である。北西～南東方向に平行に掘られた溝で、方位は西から北へ約15度振っている。各溝とも断面形状は逆台形を呈し、底部は平坦になっている。埋土は①青灰色粘土、②淡黄灰色砂混じり粘土、③淡青灰色砂混じり粘土に分類される。出土遺物は細片のみで、図化しえるものは無かったが、時期は中世頃と考えられる。農耕に関する溝と考えられる。法量等は表1のとおりである。

SD	101	102	103	104	105	106	107
幅	46	35	32	40	50	40	30
深さ	15～22	10～20	10	10～15	5～10	15～30	5～10
間隔	340	230	110	135	125	105	105
埋土	①	②	③	③	③	②	②

表1 I区 第1次面溝(SD 101～107)法量表(cm)

<第2次面>

I区で溝30条（SD 201～230）、II・III区に連続する溝1条（SD 231）、II区で埴輪円筒棺1基を検出した。

• SD 201～230

I区の全域に広がる溝群で、北西～南東方向の溝9条（SD 201～209）と、これらにはほぼ直交する溝21条（SD 210～230）がある。検出面の標高は約7.3mを測る。前者の溝は第1次面の溝（SD 101～107）とはほぼ同一の方向に掘られている。両者ともに埋土は青灰色砂混じり粘土で、マンガンを含んでいる。明確な切り合い関係が認められなかったことから、これらの直交する溝は同時に存在したか、あるいは短期間に掘り直しが行われたものと考えられる。溝の性格については第1次面の溝と同様、農耕に関する溝と考えられる。出土遺物は細片のみで図化しえるものは無かったが、時期は主に古墳時代後期に比定されるものである。法量等は表2のとおりである。

• SD 231

II・III区で検出した東西方向に直線的に伸びる溝で、流路方向は西から北へ約11度振っている。検出面の標高は、南肩で約7.6m・北肩で約7.4m、規模は検出長約48.0m・幅約6.0m・深さ50～90cmを測る。断面形状はほぼ逆台形で、底部は平坦で部分的に中央やや凸状を呈しており、埋土は上層から淡橙色系砂混じり粘土～粘質シルト・明青灰色系粘土・暗青灰色系粘土となっている。出土遺物は弥生時代後期から奈良時代に比定されるもので、古墳時代後期末のものが多くを占めている。

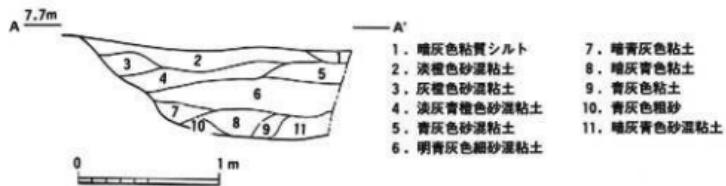
SD	201	202	203	204	205	206	207	208	209
幅	25	8	28	8	28	6	60	100	65
深さ	10	38	10	30	8	30	45	30	15
間隔	30	8	22	8	30	6	80	80	

溝(SD 201~209)法量表(cm)

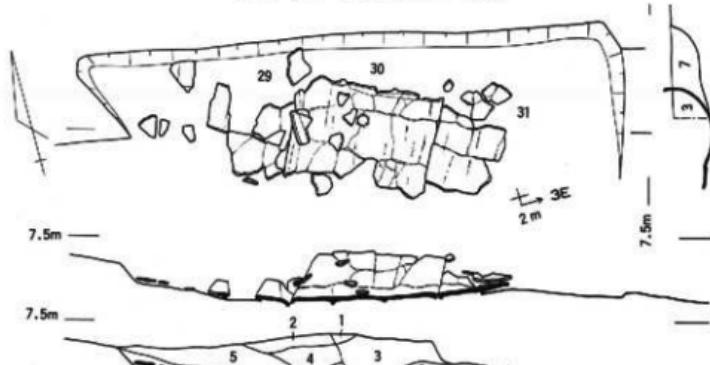
SD	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219
幅	16	3	30	10	30	10	25	240	40	100
深さ	8	18	8	25	8	36	8	400	55	50
間隔	15	7	35	7	32	8	60	155	40	65

SD	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230
幅	75	10	50	6	40	5	22	5	150	140	170
深さ	12	28	13	25	8	23	8	310	170	120	105
間隔	35	6	23	6	28	7	25	160	70	65	

表2 I区 第2次面溝(SD 201~230)法量表(cm)

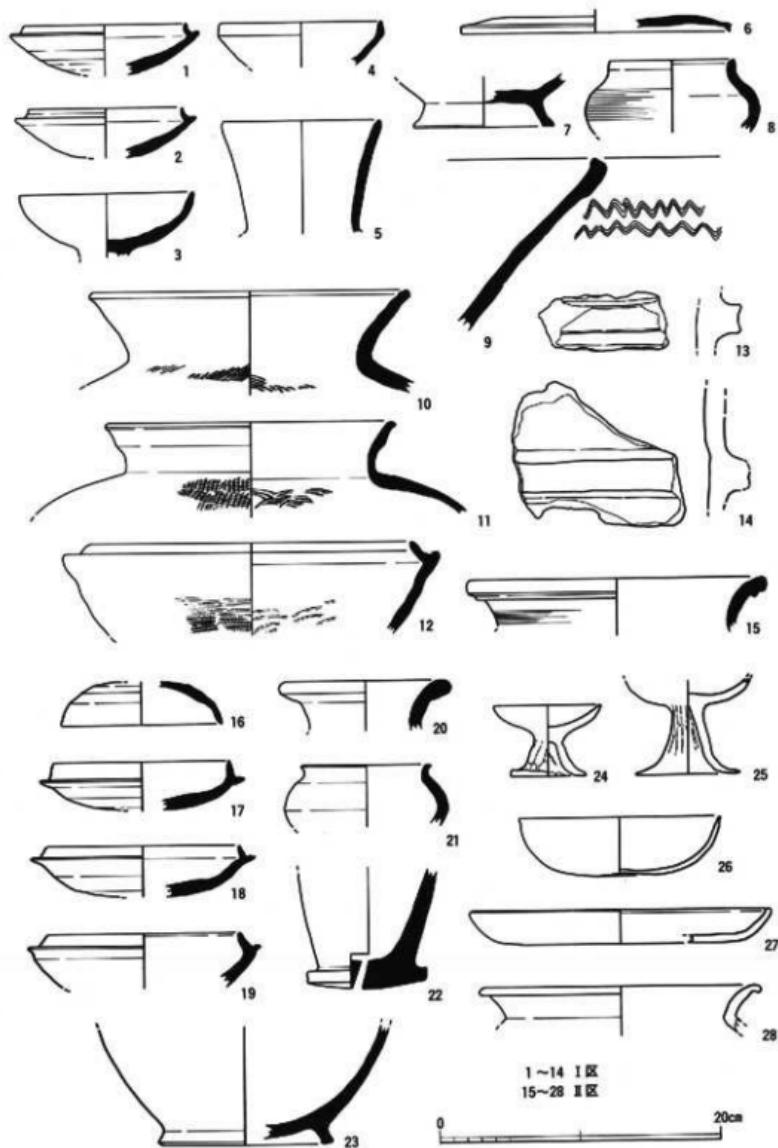


第5図 II区 SD 231断面図(S=1/40)

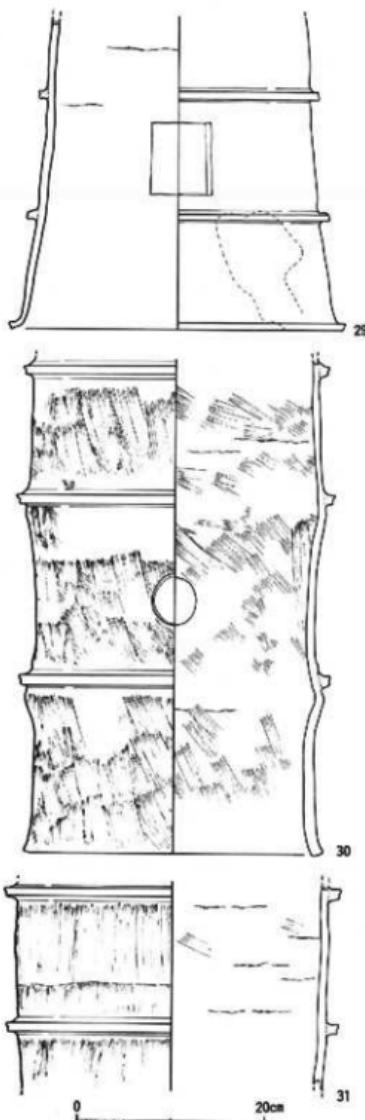


- | | |
|---------------|--------------|
| 1. 單褐色粗砂混粘質土 | 5. 黑灰色粗砂混砂質土 |
| 2. 單灰青色粗砂混砂質土 | 6. 暗灰色粗砂 |
| 3. 淡灰茶色砂混粘質土 | 7. 灰青色粘土混粗砂 |
| 4. 單灰青色砂混粘質土 | |

第6図 I区 塙輪円筒格子平・断面図(S=1/20)



第7図 II区 SD231出土遺物(S=1/4)



第8図 II区 塙輪円筒棺(S=1/6)

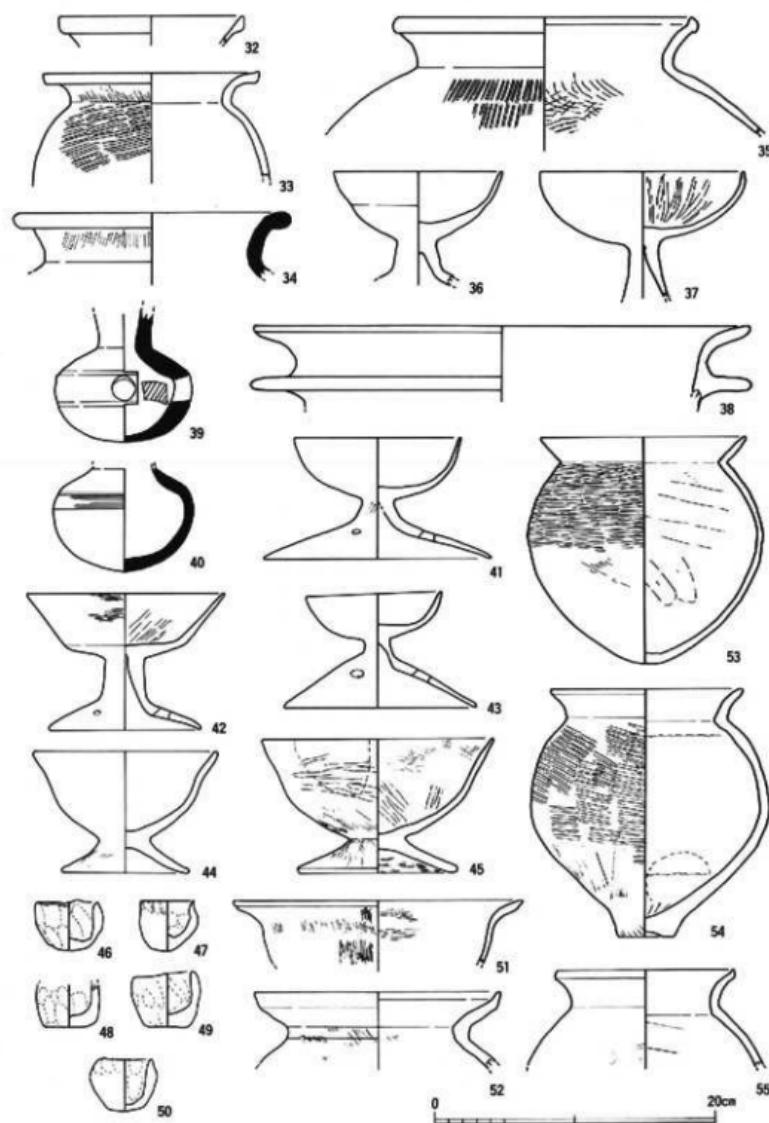
・埴輪円筒棺

II区3D区で検出した。SD231によって南部・上部を削平されており、底部・北部のみがSD231北肩に遺存している。主体部は東西方向に円筒埴輪3点を合せにして直列させたもので、平面長方形と考えられる掘形に埋納されている。主軸は西から北へ約25度振っており、検出面の標高は約7.4mを測る。掘形の規模は、検出部分で長辺約1.9m・短辺約56cm・深さ約15cmで、底部の標高は約7.3mを測る。主体部は全長約1.1mで、掘形底部にはほぼ水平に設置されている。円筒埴輪の復元値から、掘形の深さは36cm以上であることが推定できる。

掘形埋土は灰青色粘土混じり粗砂である。棺内埋土は、棺上部が削平される以前のものかどうかは不明である。

主体部の円筒埴輪3点はそれぞれ別個体のもので、西から上半部(29・口縁部が東)・下半部(30・底部が東)・体部(31・下方が東)の順に使用されており、いずれも完形品ではない。(29)は長方形スカシ、(30)は円形スカシを施すもので、外面の調整は(30)が斜めハケ、(31)が継ハケである。(29)(30)には黒斑が認められる。円筒埴輪の時期は5世紀前半に比定されるものであり、埴輪棺として転用されたものと考えられる。造墓の時期は、これを削平するSD231出土遺物から7世紀より以前と考えられる。

なお棺内および掘形内からは、副葬品・骨等は検出されなかった。



第9図 三区 包含層出土遺物(S=1/4)

<第3次面>

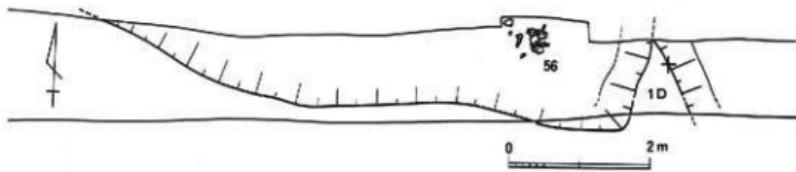
第3次面では方形周溝墓2基(S X 301・302)、土坑19基(S K 301~319)、溝3条(S D 301~303)、ピット4個(S P 301~304)を検出した。

• S X 301

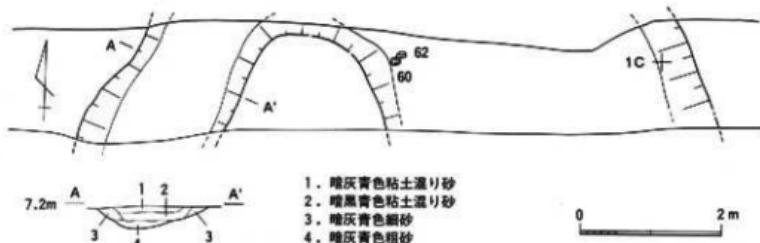
I区1C区で検出した。南部のみの検出で、調査区外に統くため全容は不明であるが、平面形は方形の角部分にあたり、北に落ち込む土坑状を呈している。検出面の標高は約7.0mを測り、規模は東西7.8m以上・南北1.5m以上・深さ約0.3mを測る。掘方はなだらかで埋土は暗黒青灰色細砂混じり粘土で固く締まっている。南東角の底部からは、土圧によって押しつぶされた状況で二重口縁壺(56)約半個体が出土している。上方に短く伸びる二重口縁をもつもので、時期は布留式期に比定される。

当遺構は、形状と位置関係から、市教委調査における方形周溝墓S X 2に連続するものと考えられ、周溝南辺および南東角部にあたるものと判断した。なお墳丘は完全に削平されている。

このS X 2は、主軸を北から約25度東に振り、西辺に陸橋部を有する方形周溝墓である。周溝幅は3.3m~4.3mで、周溝を含めた規模は一边約22mである。周溝からは弥生V様式系から布留式の土器が出土しているが、供獻土器と考えられる壺や手培り形土器は庄内式期に比定されるものである。



第10図 I区 S X 301平面図(S=1/80)

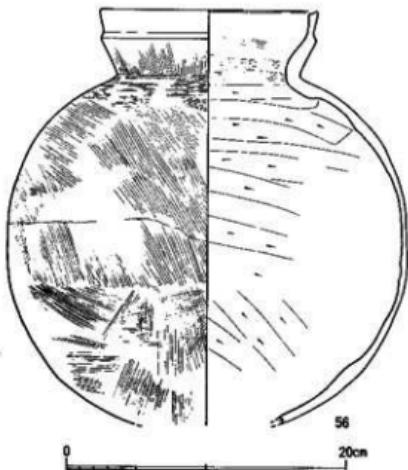


第11図 I区 S X 302平面図(S=1/80)

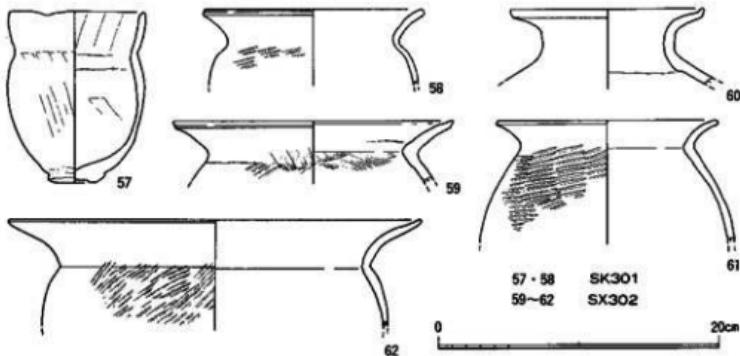
• S X 302

I区1B区で検出した。検出面の標高は約7.1mを測る。やや鋭角的に屈曲する溝で、方形周溝基の北角部分である可能性が高いと考えた。この場合墳丘盛土は完全に削平されている。周溝西辺は、幅約1.6m・深さ約0.3mを測り、断面皿状を呈する。北辺は幅約4.4mと広くなっている。埋土は上から暗灰青色粘土混じり砂・暗黒青色粘土混じり砂・暗灰青色細砂～粗砂である。

出土遺物には壺・甕・鉢(59～62)があり、時期は弥生時代後期末～庄内式期に比定されるものである。



第12図 I区 S X 301出土遺物(S=1/4)

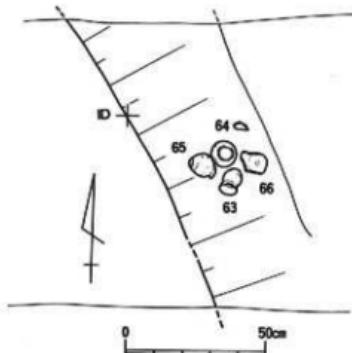


第13図 I区 S X 302・S K 301出土遺物(S=1/4)

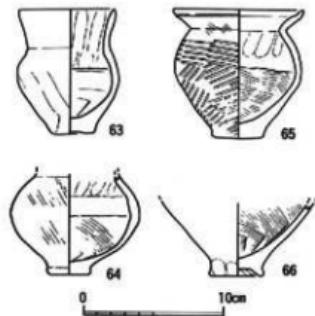
• S K 301～303

I区東部で検出した。灰色細砂をベースとし、検出面の標高は約7.0mを測る。埋土はいずれも暗黒青灰色砂混じり粘土である。規模はSK 301が1.4m以上×3.3m以上、SK 302が1.4m以上×7.45m、SK 303が1.4m以上×7.4mである。深さは20～30cmで平面形は不明であり、掘方はなだらかなものである。一応土坑としたが、自然の落ち込みあるいはベース面の起伏である可能性もある。またSK 302とSK 303の境は不明確なもので一つの遺構とも考えられる。

埋土の状況は S X 301・302と同様であり、周辺の状況からも、これらが方形周溝墓の周溝であった可能性もある。S K 303西肩部では、完形の小型壺・小型甕等(63～66)がまとまって出土している。出土遺物の時期から、これらの土坑の時期は弥生時代後期末～庄内式期と考えられる。



第14図 I区 S K 303遺物出土状況平面図(S=1/20)



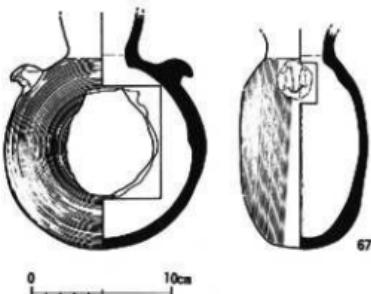
第15図 I区 S K 303出土遺物(S=1/4)

• S K 304～309

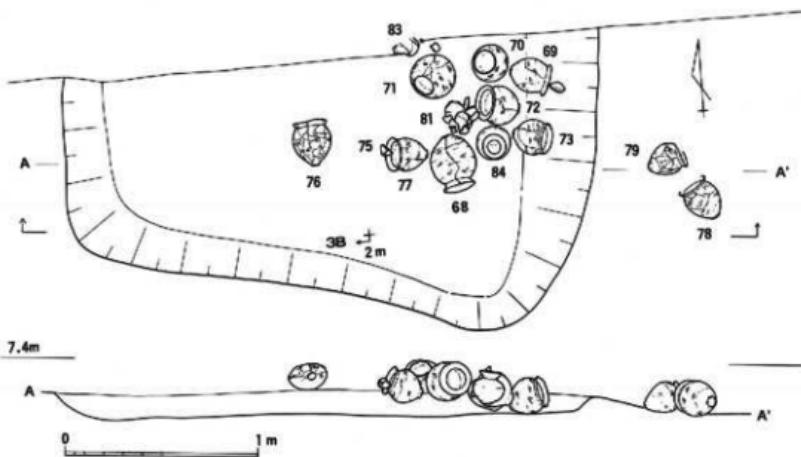
I・III区の1A～B区で検出した。検出面の標高は7.0m～7.1mを測る。S K 304はS X 302の周溝を切っている。出土遺物は細片のみで、固化しえるものはなかった。法量等は表3にまとめている。

• S K 310

III区1A区の調査区西壁で確認したが、平面的には検出しえなかった。第2次面のS D 231によって削平を受けている。掘り込み面の標高は約7.5mを測る。規模は、断面では幅96cm・深さ45cmを測り、断面形状は逆三角形を呈する。埋土は上から青灰色粘土混じり荒砂・暗灰茶色砂混じり粘土・暗褐色砂混じり粘質土である。口縁端部と体部の中央部を欠く須恵器提瓶(67)が最下層から出土している。



第16図 III区 S K 310出土遺物(S=1/4)



第17図 II区 SK311平・立面図 (S=1/30)

• SK311

II区3B区で検出した土坑である。土器検出面の標高は約7.4m、掘形検出面の標高は約7.2mを測る。土坑北部は調査区外に至り全容は不明であるが、掘形平面形は検出部分では隅九方形を呈し、規模は2.8m×1.5m以上、深さ約30cmを測る。断面皿状で、埋土は暗青灰色砂混じり粘質土である。

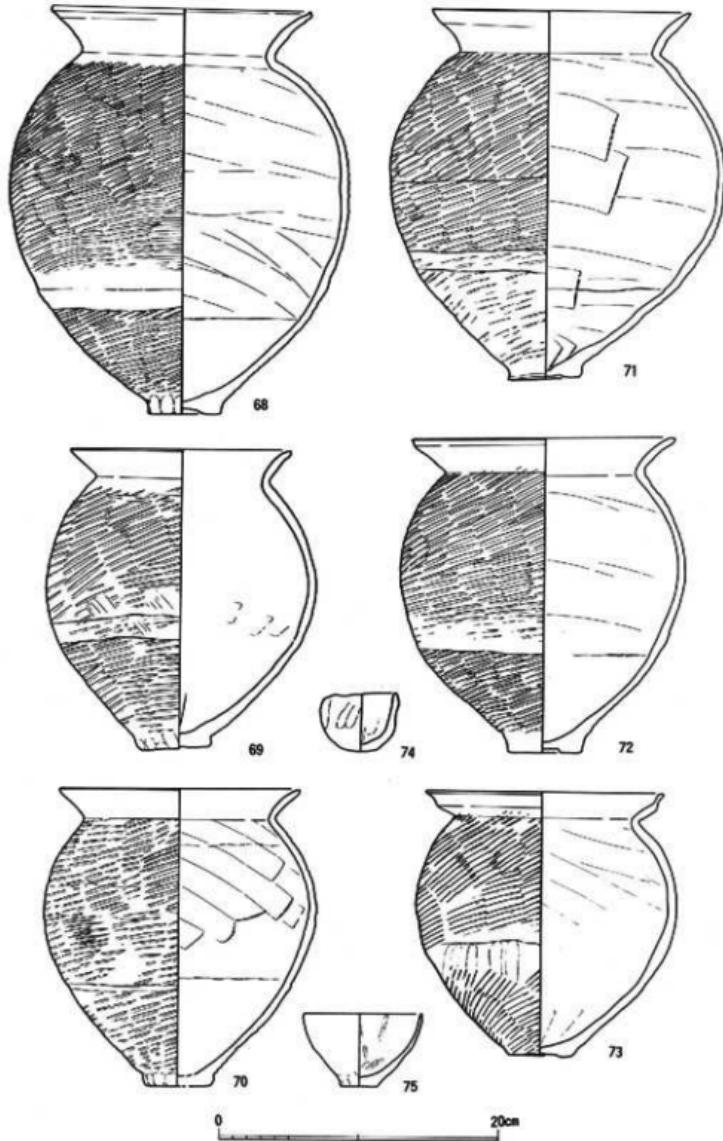
当初は土器集積として捉えていたが、周辺を約20cm掘り下げたところ、不明瞭ではあるが掘形が確認されたため一応土坑とした。しかしこれらの土器のうち、一部この掘形外におよぶものがあることから、SD303埋没過程において自然の窪み内に形成された土器集積である可能性もある。いずれにしても遺物の出土状況からは意図的なものが感じられる。

出土遺物には、ほぼ完形の壺11点・壺1点・小型鉢2点他(68~84)がある。壺(78・79)は掘形の外側で出土したものである。時期は弥生時代後期末~庄内式期初頭に比定される。

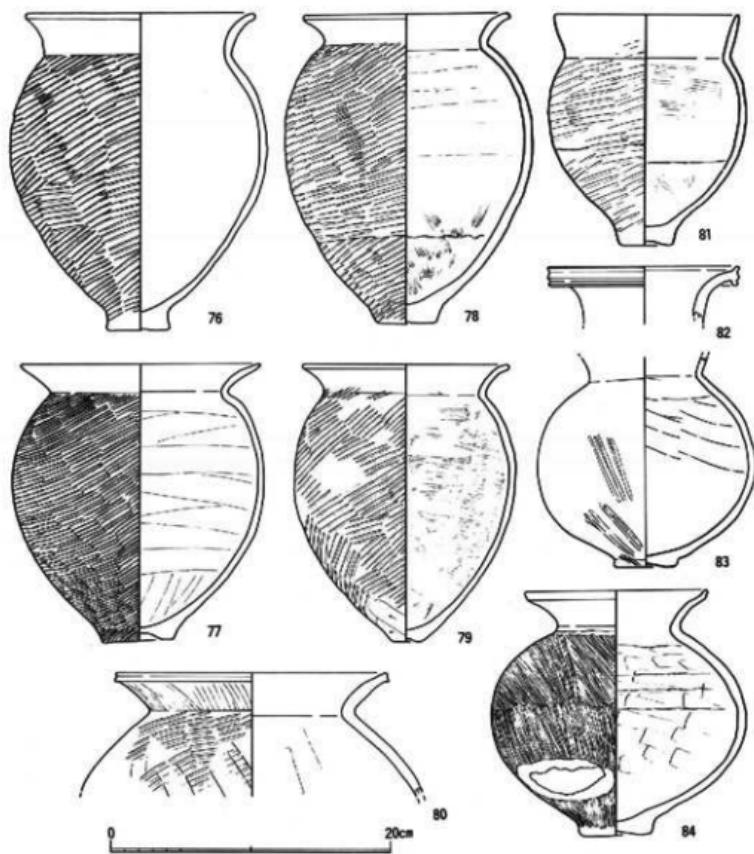
壺は、体部の球形化、および外面の平行タタキの細密化が進んでいるが、内面へラケズリを施すものはない。また外面にハケ調整を行うものは破片一点(80)のみである。(79)はその底部の形態と外面へラケズリ調整からやや新相といえる。壺(84)は体部の一部を欠いている。

• SK312~319

II区3D~E区で検出した。検出面の標高は約7.1mを測る。出土遺物は細片のみで、団化しえるものはなかった。法量等は表3にまとめている。



第18図 III区 SK311出土遺物①(S=1/4)



第19図 I区 SK 311出土遺物②(S=1/4)

• SP 301~304

SP 304はSK 319が埋没したのちに掘り込まれている。形状から、掘立柱建物を構成する柱穴である可能性がある。いずれのビットからも遺物は出土していない。法量等は表4にまとめている。

	区	平面形状	長辺×短辺×深さ(cm)	断面形状	埋土(上から)※
S K 304	I 1 B	円形	92×85×37	逆台形	①②
S K 305	I 1 B	不明	88×64以上×3	皿状	③
S K 306	I 1 B	不定形	93×42×20	皿状	③
S K 307	I 1 A	不明	128以上×98以上×15	皿状	③
S K 308	II 1 A	不明	260×109×21	皿状	④⑤
S K 309	II 1 A	不明	120以上×110以上×17	皿状	④
S K 312	II 3 D	不明	93以上×50以上×18	皿状	⑥
S K 313	II 3 D	不定形	266×123×17	皿状	⑥⑦⑧
S K 314	II 3 D	円形	84×70以上×14	皿状	⑥⑧
S K 315	II 3 D	不明	76以上×35以上×12	皿状	⑥
S K 316	II 3 D	楕円形	120×63×10	逆台形	⑥⑧
S K 317	II 3 E	不整円形	70×57×5	皿状	⑥
S K 318	II 3 E	不定形	167×87以上×10	皿状	⑥

※①黒灰色粘土混じり砂 ②暗灰色荒砂 ③暗灰青色粘土混じり砂 ④青黑色粘土混じり砂 ⑤明灰青色粘土混じり粗砂 ⑥青黑色砂混じり粘土 ⑦明褐色粗砂 ⑧暗灰青色粘土混じり荒砂

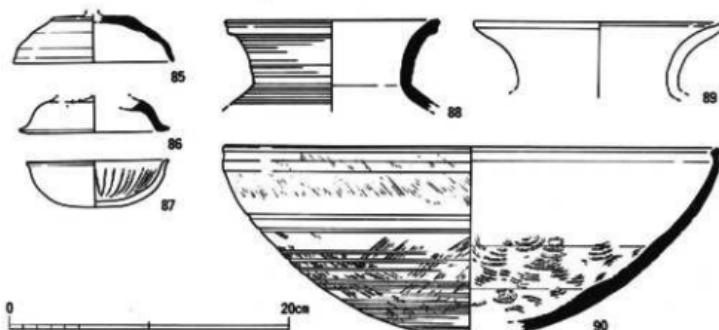
表3 第3次土坑(S K 304~309・312~318)法量表

	区	平面形状	長辺×短辺×深さ(cm)	埋土
S P 301	I 1 A	円形	23×22×5	暗灰青色粘土混じり砂
S P 302	I 1 A	楕円形	24×18×5	暗灰青色粘土混じり砂
S P 303	I 1 A	楕円形	33以上×38×10	暗灰青色粘土混じり砂
S P 304	II 3 E	楕円形	47×42×20	暗褐色砂混じり粘土質土

表4 第3次圓ピット(S P 301~304)法量表

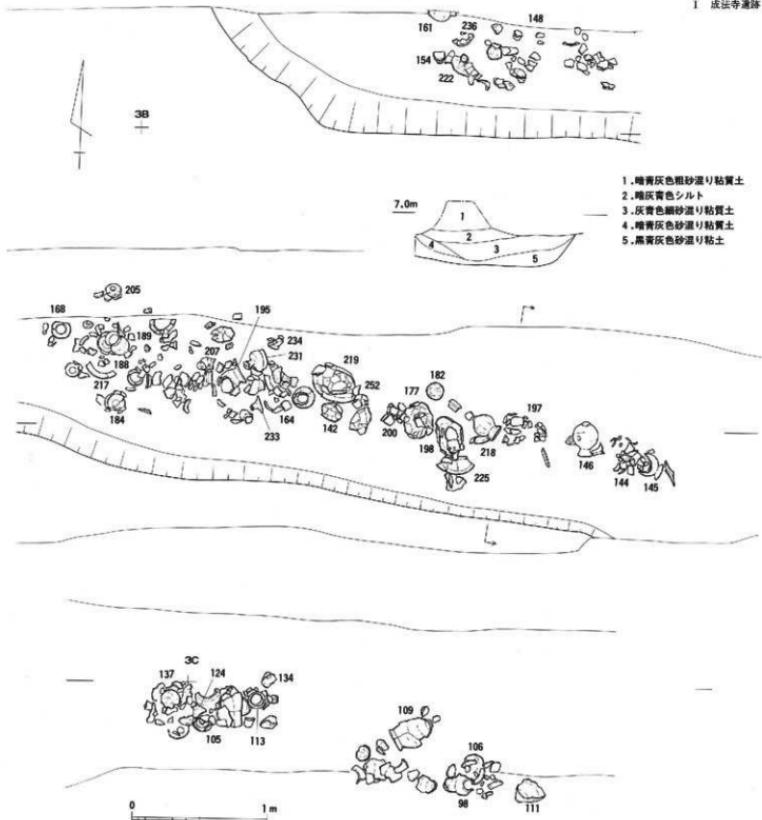
• S D 301

III区1A区で検出した東西方向の溝である。S D 231の底部で検出されたため、上部は削平されていると考えられ、検出面の標高は約7.3mを測る。規模は検出長4.2m・幅1.2m~1.9m・深さ約0.3mで、断面皿状を呈する。埋土は上から青黑色粘土混じり砂・明黄褐色細砂・青黑色粘土混じり粗砂である。出土遺物は6世紀後半に比定されるが、やや時期の下るものもある。須恵器(90)は器台の杯部とも考えられるが、脚部の痕跡が認められないことから鉢とした。



第20図 III区 S D 301出土遺物(S = 1/4)

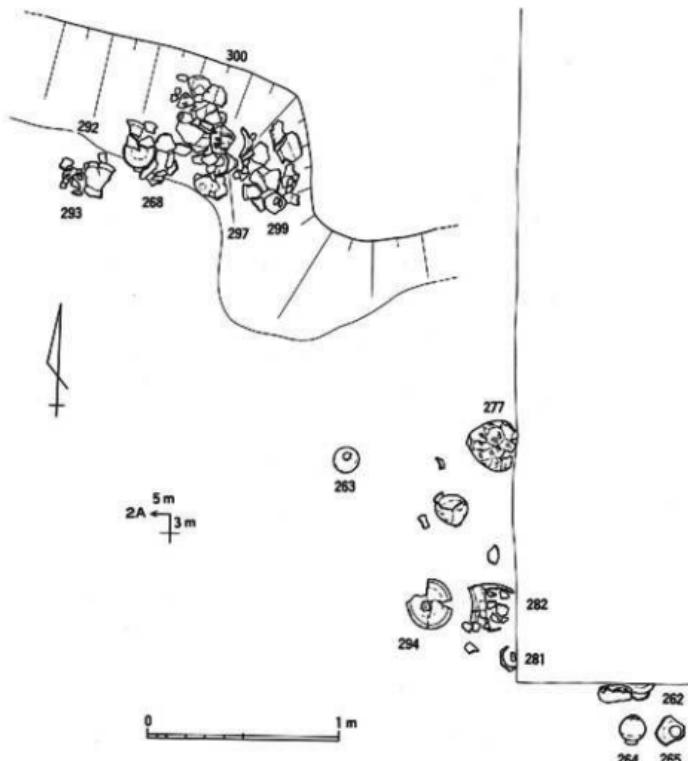
I 成仏寺遺跡



第21図 I区 SD 303遺物出土状況平面図 (S = 1/30)

• SD 302

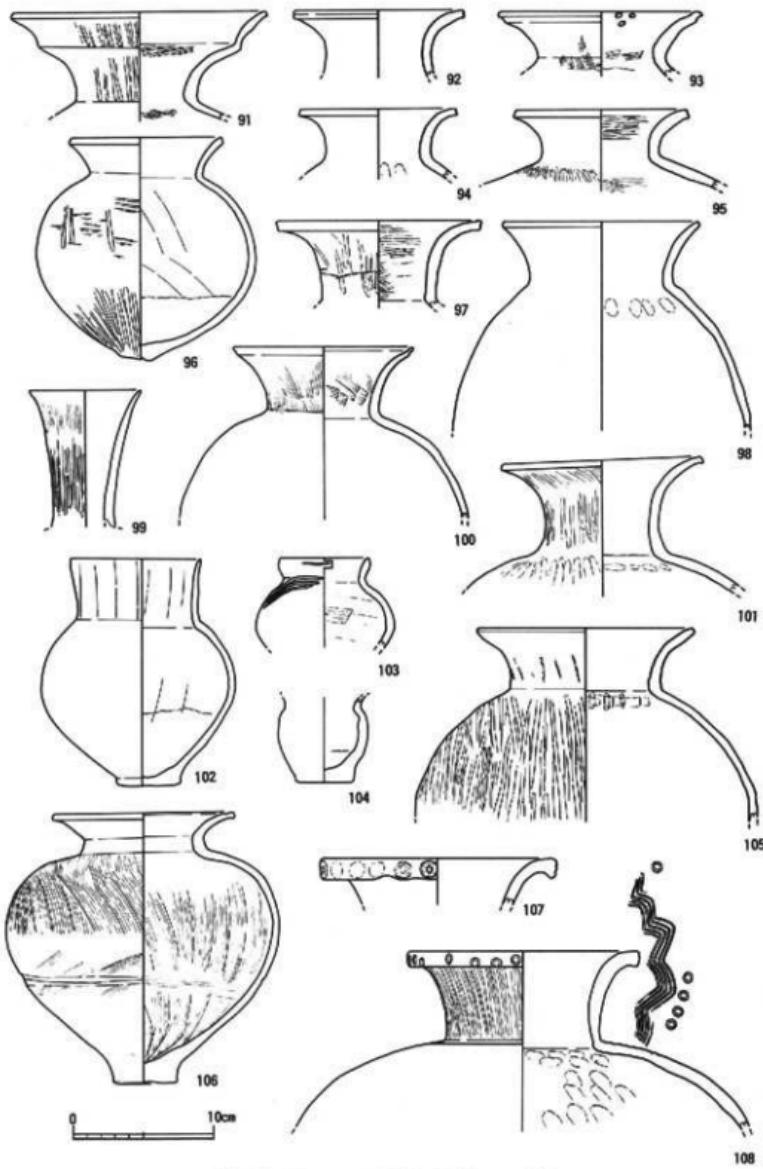
Ⅲ区1A区で検出した東西方向の溝である。東端でSD 301の南肩を切っている。規模は検出長4.1m・幅0.7m~1.6m・深さ約0.2mで、断面皿状を呈する。埋土は上から青灰色粘土・暗青灰色粗砂混じり粘土・褐色砂混じり粘土である。遺物は出土していない。



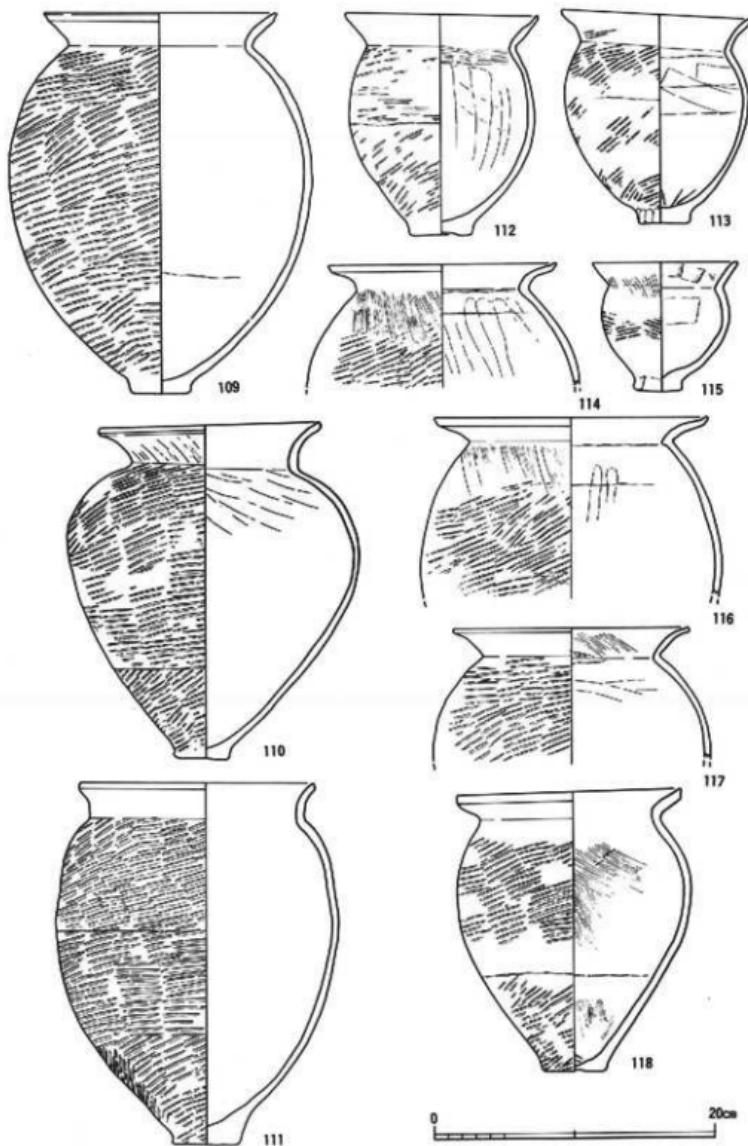
第22図 Ⅲ区 SD 303遺物出土状況平面図(S=1/30)

• SD 303

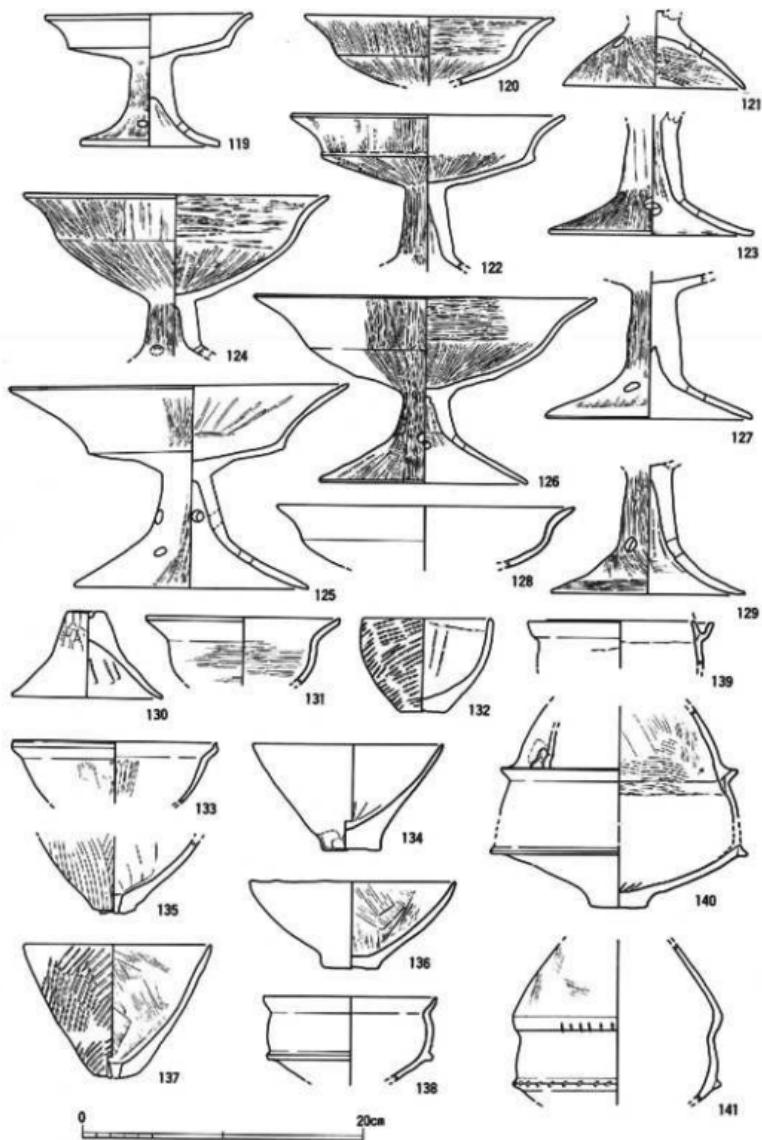
II・III区の3A~C区にわたって伸びる東西方向の溝である。II区では南肩のみを、III区では北肩のみを検出した。これは、II区では流路方向が東西方向よりやや北西~南東方向に振っており、II・III区间でやや屈曲し、さらにIII区では幅が広がっているためであろう。検出面の標高はII区で約7.0m、III区で約7.3mを測るが、これはII区では第2次面のSD 231によって削平されているためである。規模は、検出長約16.0m、幅はII区で1.7m以上、III区で4.8m以



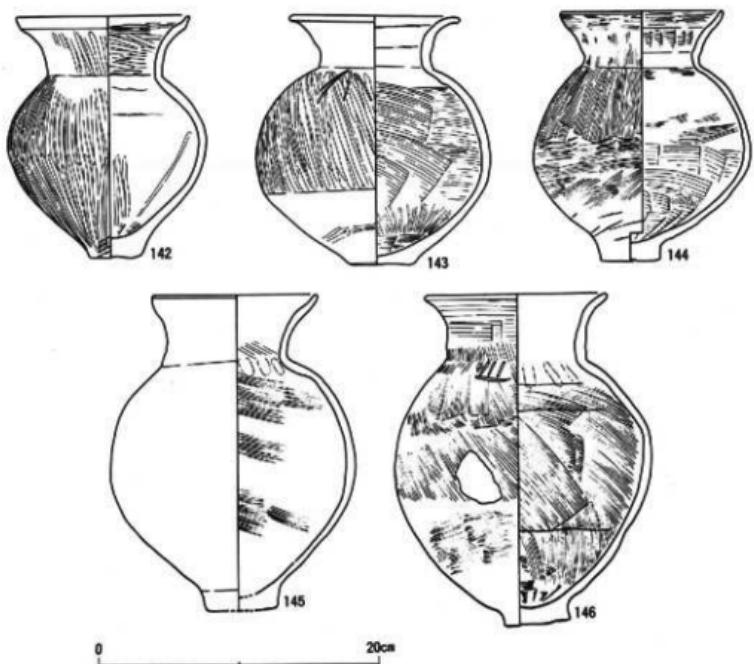
第23図 II区 SD 303上層出土遺物①(S=1/4)



第24图 II区 SD303上层出土遗物②(S=1/4)



第25図 I区 S D303上層出土遺物③(S=1/4)



第26図 I区 SD 303下層出土遺物①(S=1/4)

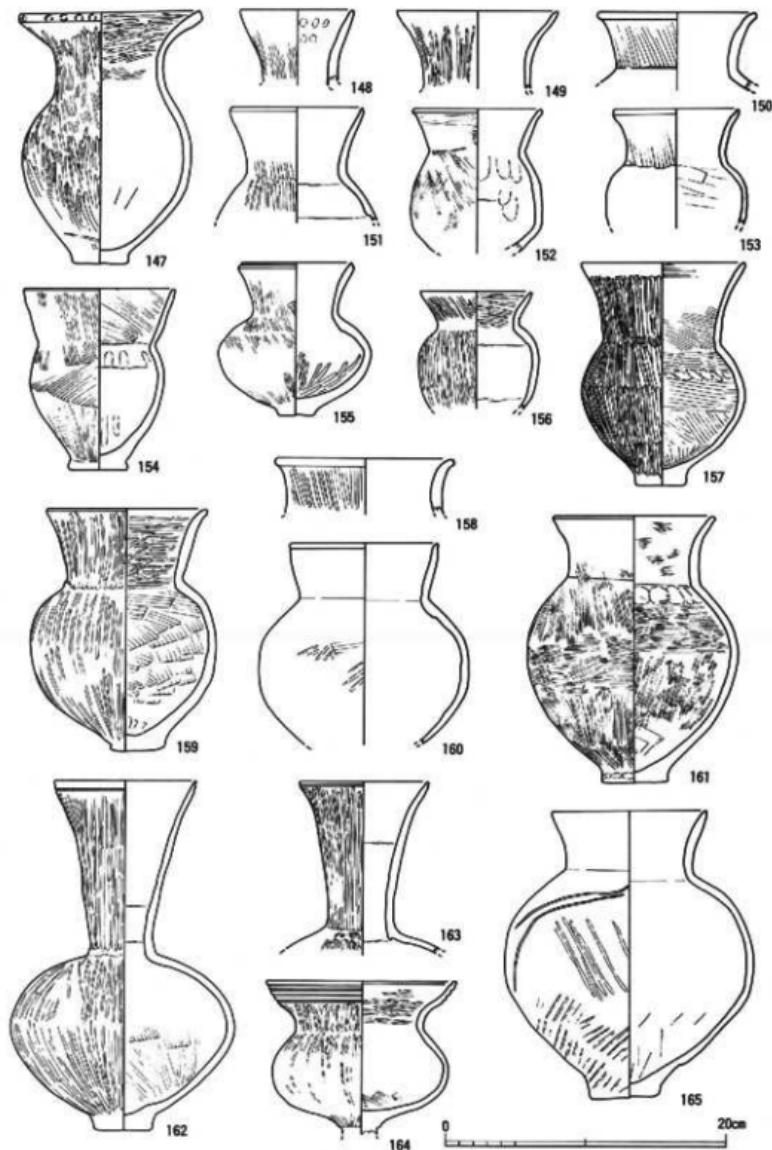
上、深さはⅡ区で約0.5m、Ⅲ区で約1.0mを測る。

断面形状はU字状から皿状を呈し、埋土はおおむね標高6.9m~7.1mの上層(暗青灰色粗砂混じり粘質土)・6.7m~6.9mの中層(暗青灰色シルト)・6.6m~6.7mの下層(黒青灰色砂混じり粘土)の3層に分けることができる。埋土の状況からは当溝がほぼ滲水状態にあった事が窺える。

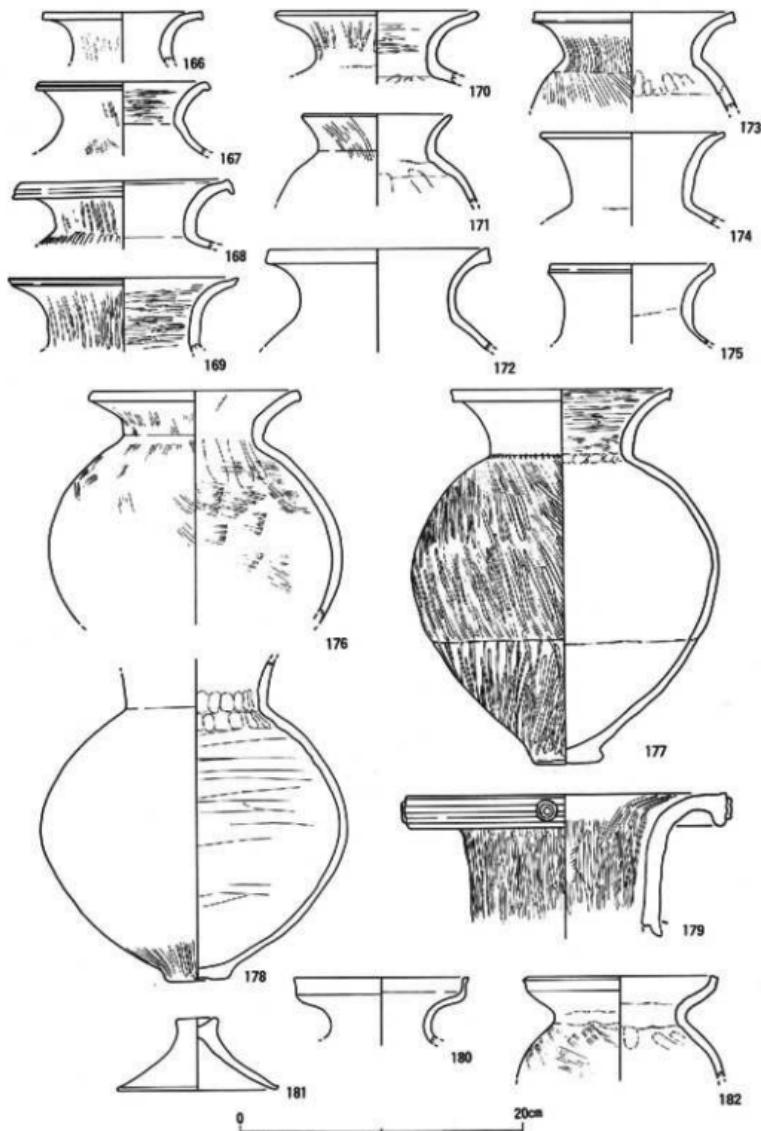
上層と下層からは多量の土器が出土しており、中層にはあまり含まれていない。土器は当溝が滲水状態にあったためか摩滅も少なく、完形品も多く含まれており、器種は多岐にわたっている。土器の時期は弥生時代後期末から庄内式傾向期に比定されよう。

上層と下層の土器構成には若干の違いが認められ、時期差を示すものと考えられる。上層出土の高杯には(124~126)のように口縁部の発達したものや、(119・127)のように脚柱部が中実のものがみられる。また下層出土のものには(218・223・225)のように、脚柱部と裾部との境が明瞭でない脚部をもつものがある。

下層のみに認められる土器としては、形態的に弥生第V様式におけるいわゆる長頸壺の系譜



第27図 II区 S D303下層出土遺物②(S=1/4)



第26図 III区 SD 303下層出土遺物③(S=1/4)

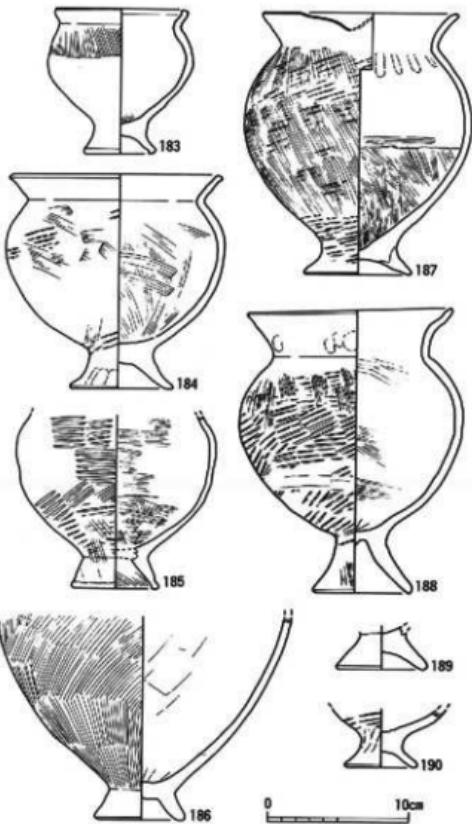
上に位置づけられる壺(147・157・

159) や器台(257・258)がある。また台付きの壺(183~190)が目立つ。(187)は片口を有する。口縁部が開く大型の鉢(237~241)も下層のみにみられる。口縁部が内側する鉢(255・256)は形態的には弥生時代中期に類例がみられるものである。また二重口縁の壺(91・273)や手焼り鉢(139~141)は上層のみに認められる。

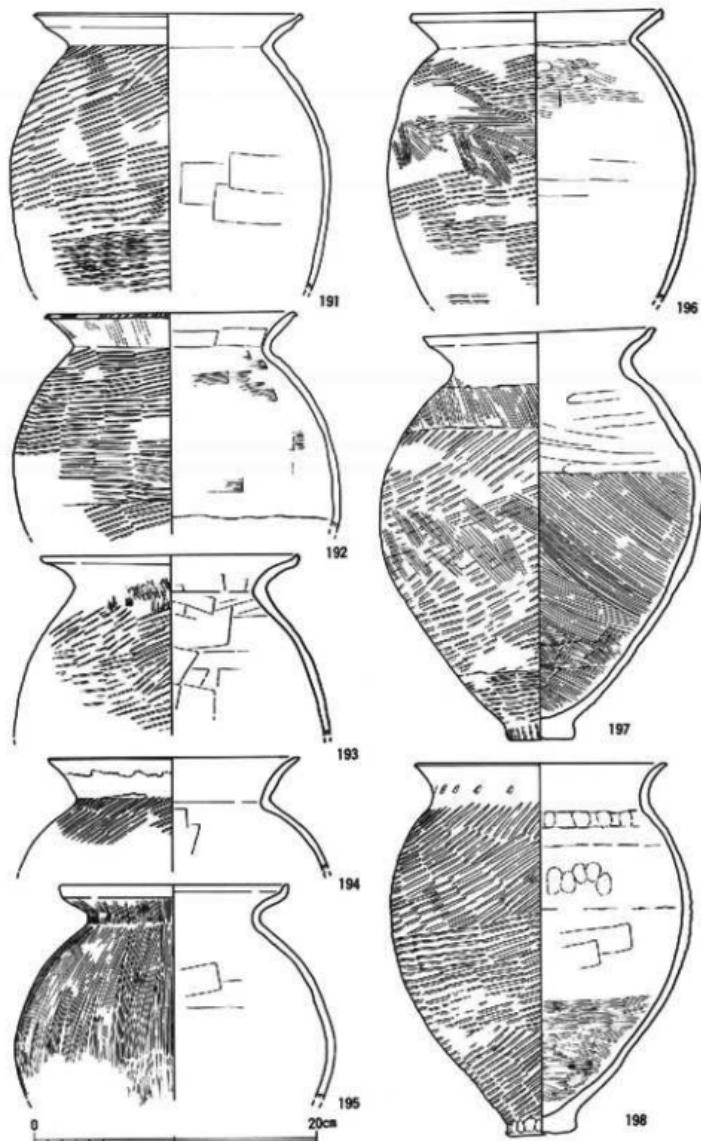
壺をみると、上層・下層ともにいわゆる庄内壺は一点も出土していない。肩部外面にハケ調整をおこなうものは上層(114~116)・下層(196・197)ともに認められるが数は少ない。体部内面調整はナデ・ハケ・板ナデに分類される。内面ハラケズリ調整の壺は下層出土の(204・210~214・284)のみであり、(284)を除いていずれも台付き壺と考えられ、口縁端部を内側につまみあげるもので、東海系の搬入品と思われるものである。

下層出土の広口壺(164)は脚台が付くと考えられ、口縁部外面に四線文を施し、胎土も精良な精製品で搬入品と考えられる。(260)は吉備系の壺口類部として固化したが、器台の底部である可能性もある。壺(201)は外面平行タタキの後、肩部に綾杉状のタタキを施しており、口縁端部の形態も特異なもので、搬入品と考えられる。他に壺(195)、台付き壺(183・186)も外面ハケ調整を行うもので搬入品と考えられる。

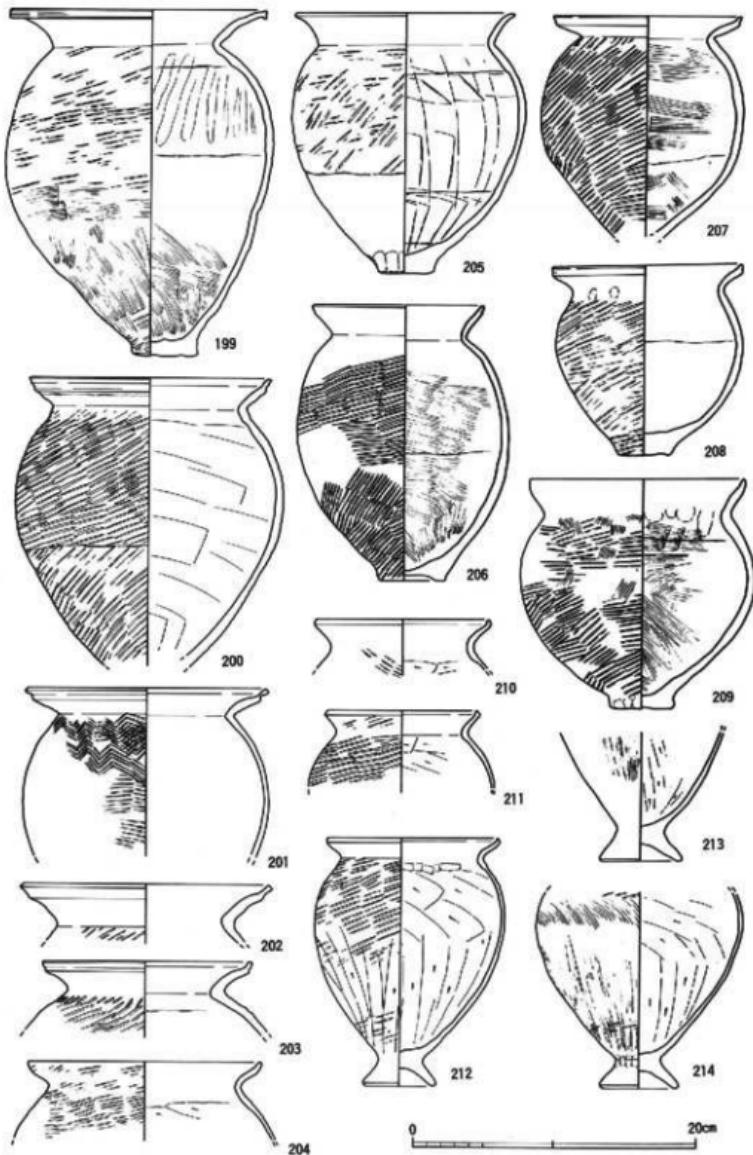
壺(90・146)は体部に穿孔が認められる。鉢(302)は口縁部が輪花状を呈する特異なものである。



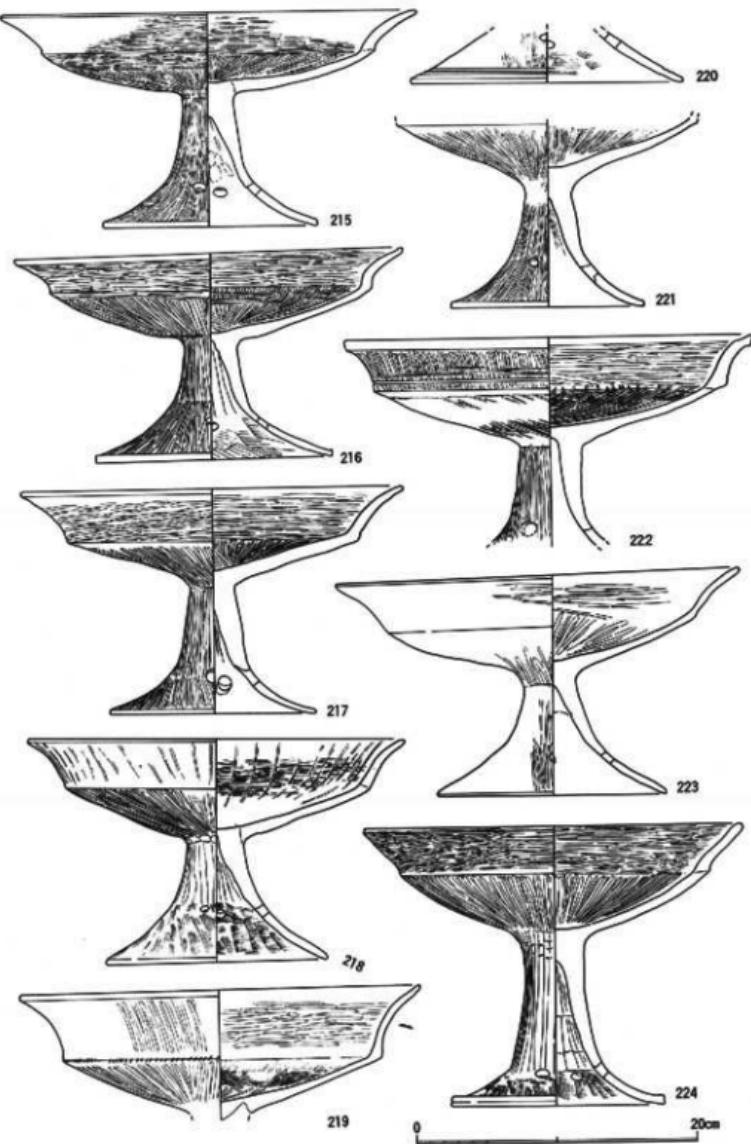
第29図 Ⅲ区 SD 303下層出土遺物④($S=1/4$)



第30図 II区 S D 303下層出土遺物⑤(S = 1/4)



第31図 II区 S D303下層出土遺物⑤(S=1/4)



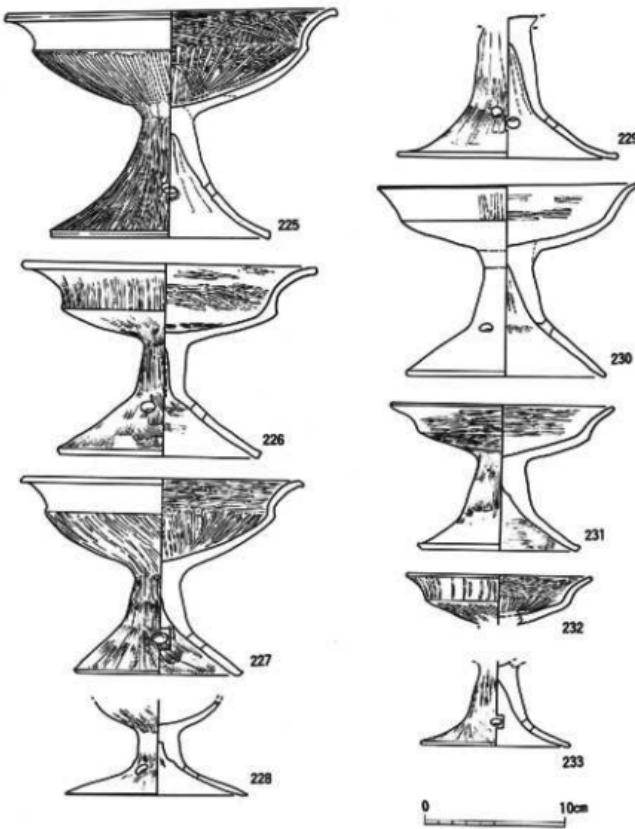
第32図 II区 SD 303下層出土遺物⑦(S=1/4)

第4章 まとめ

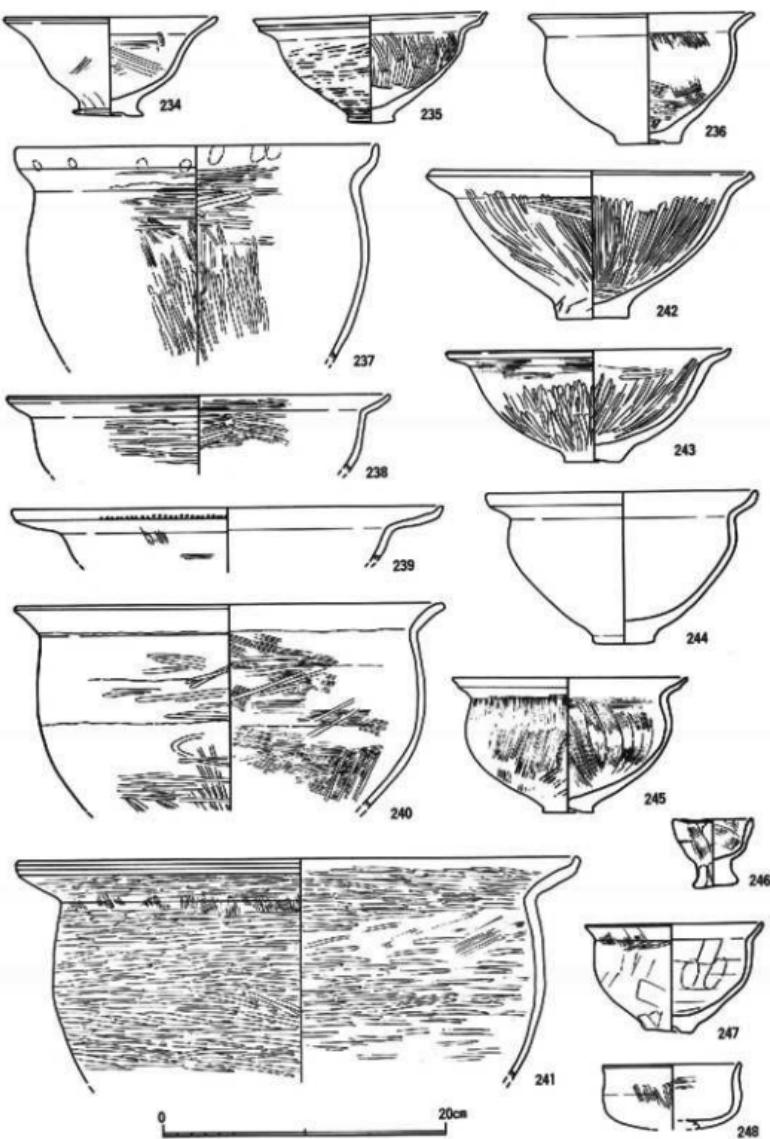
今回の調査では弥生時代後期から中世の遺構・遺物を検出した。以下、その成果について時代毎に述べる。

<弥生時代後期～古墳時代前期>

弥生時代後期末の遺構としては、Ⅲ区で検出した S D 303・S K 311がある。両遺構からは一括性の高い多量の土器が出土しているが、内面ヘラケズリ調整のいわゆる庄内壺を含まず、土器形式は上六万寺式から北鳥池式に比定されるものである。同時期の遺構は、市教委調査で土



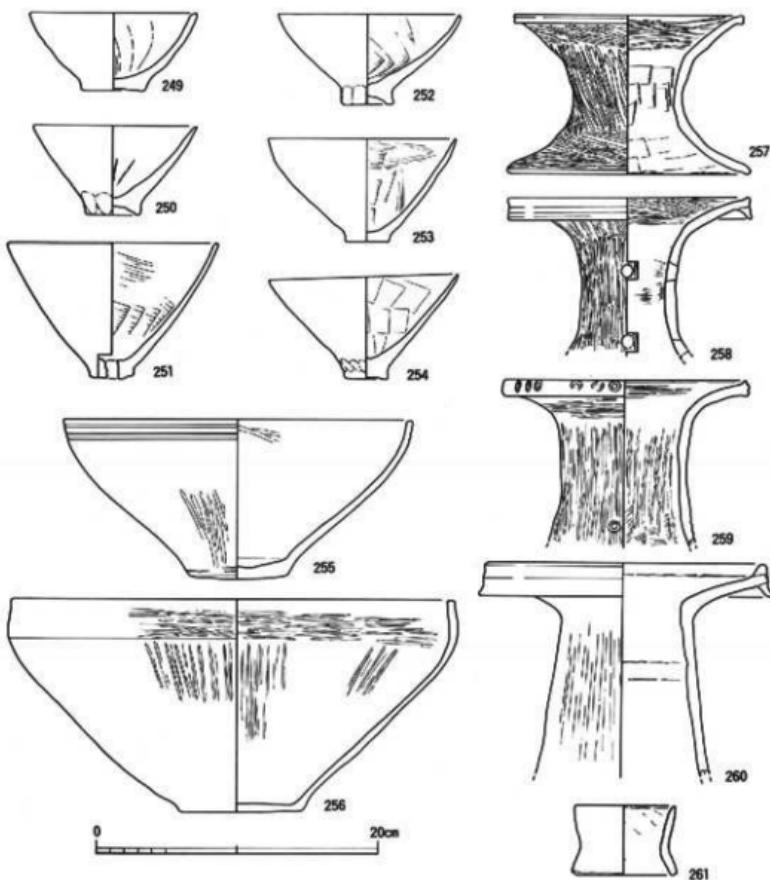
第33図 Ⅲ区 S D 303下層出土遺物③(S = 1/4)



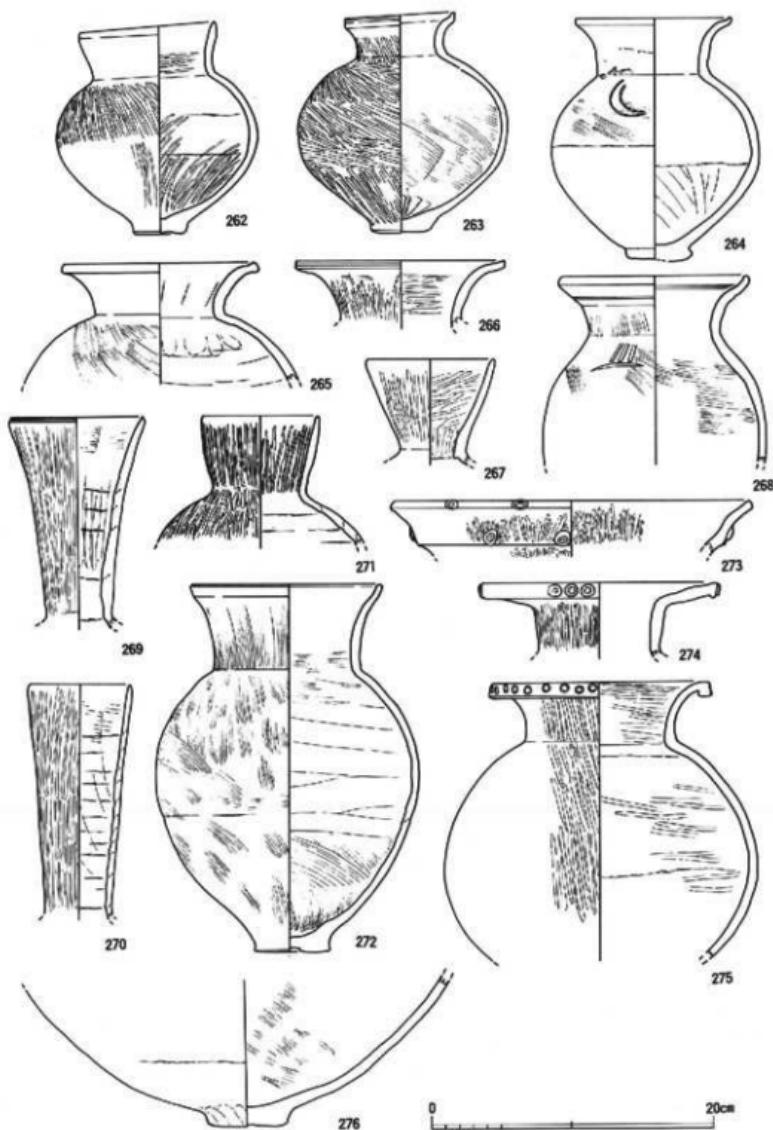
第34図 I区 S D 303下層出土遺物③(S = 1/4)

坑・土器集積等が検出されている。SK 311については、出土遺物に完形品が多いことや、体部穿孔の可能性のある壺の存在から、祭祀遺構としての性格も考えられる。なお市教委調査においても、同様に甕が並べられた土器集積SW 2が検出されており、両遺構間の直線距離は約45mを測る。

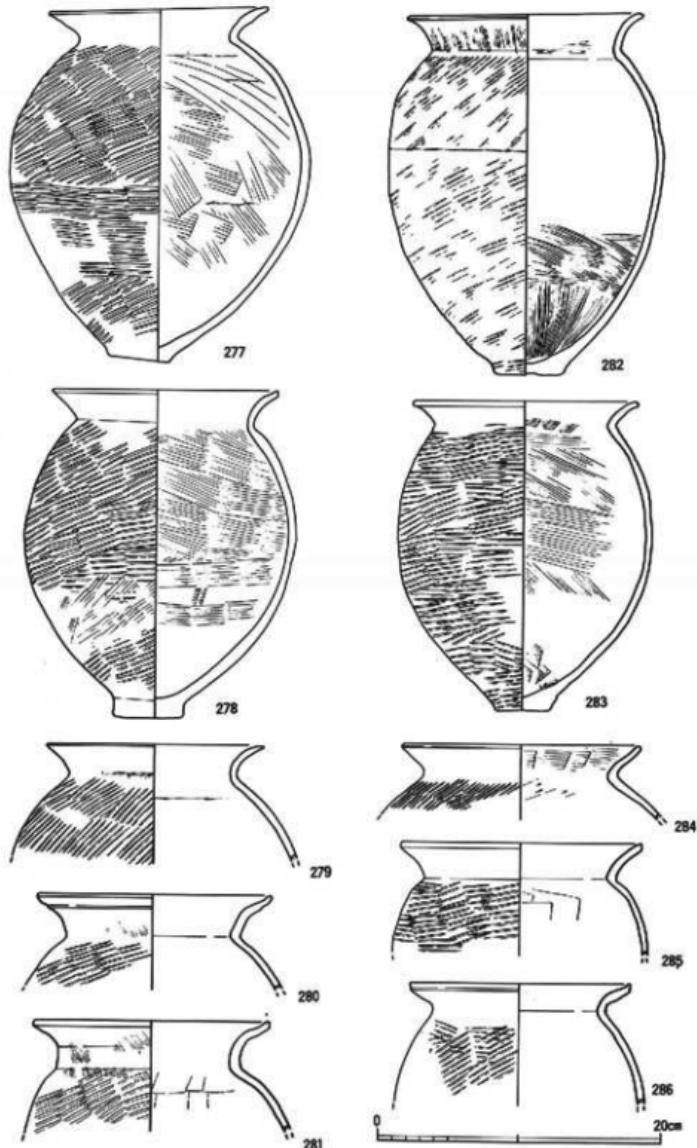
続く庄内式期には市教委調査で方形周溝墓4基が検出されており、当地周辺は墓域であることが確認されていた。今回の調査のI区でもそれに連続する部分が検出されたが、周溝内から



第35図 I区 SD 303下層出土遺物②(S=1/4)



第36図 Ⅲ区 SD 303出土遺物①(S=1/4)



第37圖 西区 SD303出土遺物② ($S = 1/4$)

は布留式期の土器が出土しており、方形周溝墓の時期がやや下る可能性がある。

S D 303から多量の遺物が出土したことにより、周辺に弥生時代後期末頃の集落が存在するのは確実であると考えられ、庄内式期に墓域に移り変わったとも考えられる。

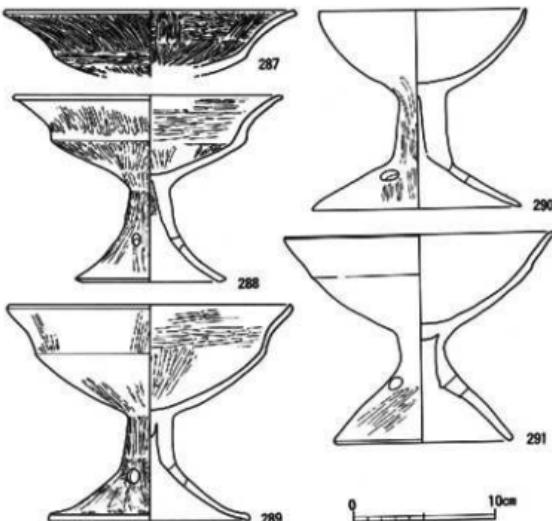
<古墳時代中期>

II区において当遺跡内で初めての埴輪円筒棺が検出された。このことから、当地は古墳時代中期～後期頃までは墓域としての時期が下ることが確認された。周辺の遺跡での出土例は東部の小阪合遺跡、南東部の東弓削遺跡の2例があり、いずれも朝顔形円筒埴輪と円筒埴輪の2個体で構成されるものである。またS D 231からも形象埴輪の破片が出土しており、付近に古墳の存在も想定される。

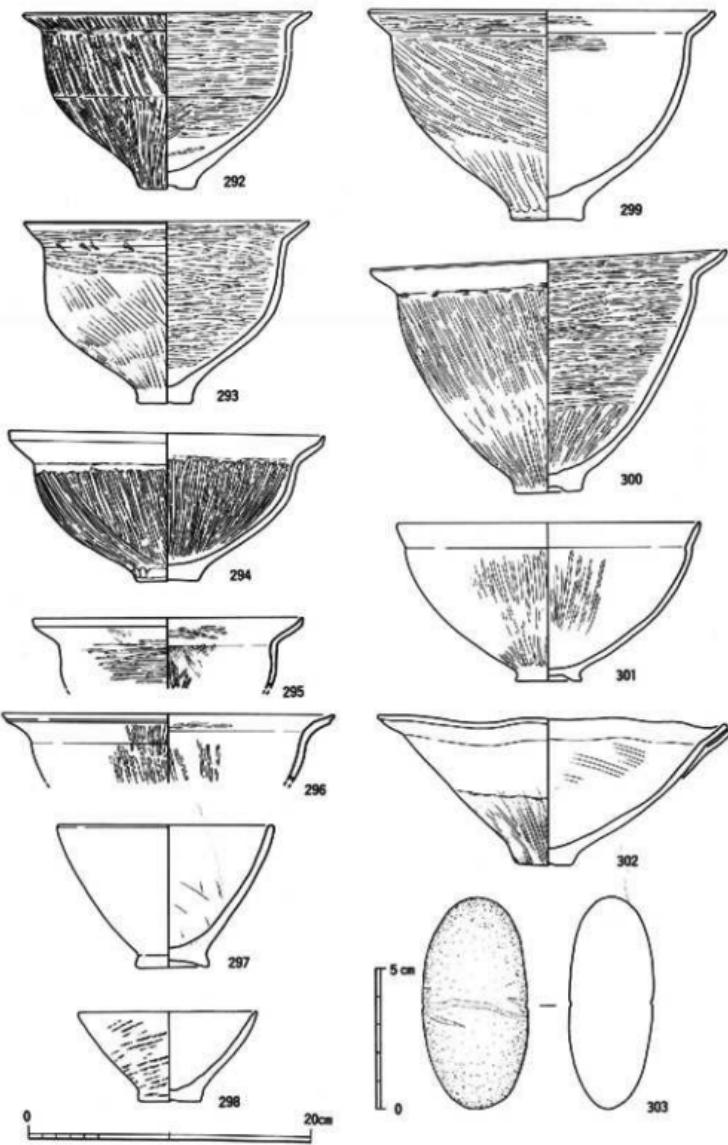
<古墳時代後期以降>

II・III区で検出されたS D 231は、市教委調査で検出された掘立柱建物群の方向とほぼ一致することから、この集落に伴う溝であると考えられる。掘立柱建物は8棟が検出されている。I区で検出した溝群は同時期のものとも考えられるが、市教委調査ではこれらに類する溝は検出されていないことから断定はできない。

S D 231の上層及びこれを覆う包含層からは、飛鳥～奈良時代に比定される遺物が少量ではあるが出土しており、この頃まで集落が存続していた可能性がある。同時期の集落は南東250m地点の調査で確認されている。



第38図 II区 S D 303出土遺物③(S=1/4)

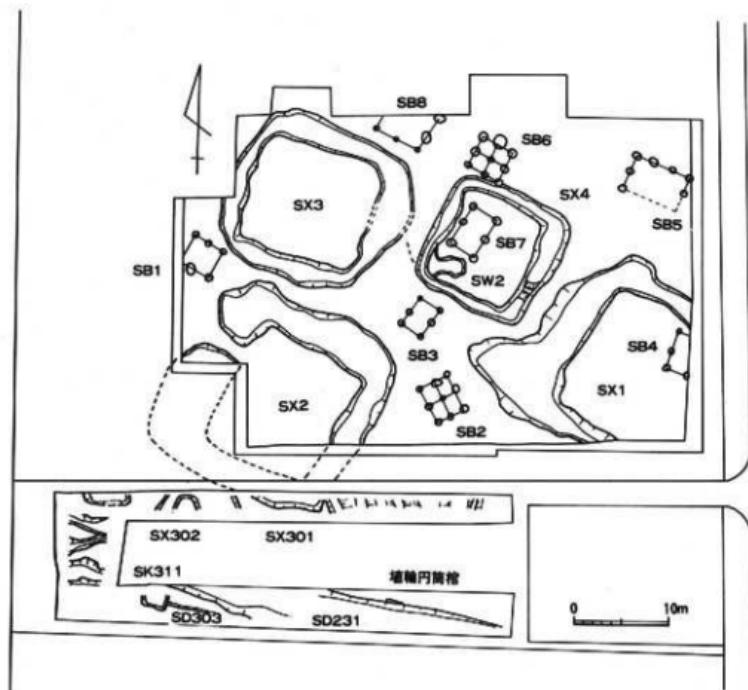


第39図 Ⅲ区 SD 303出土遺物①(S=1/4, 1/2)

以降は時期は不明であるがⅠ区で平行して並ぶ素掘り溝が検出されており、農耕に関する溝と考えられ、中世頃までは耕地としての土地利用が推測される。

参考文献

八尾市教育委員会「成法寺遺跡－八尾市光南町1丁目29番地の調査－」1983



第40図 市教委調査区遺構平図図 (S = 1/600)

第5章 遺物観察表

遺物番号 目次番号	器種	出土地点	測定値 (mm)	性別 年齢	色調	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考
12 灰陶器 器台	II区 SD231	全高 33.0 底面 3.7 凸面幅 2.0	(23.0)	灰色	密	良好	受部上位凹軸ナデ。受部下位外腹平行タキ。内面圓弧タキ。外面中位ハラミガキ。	反転 極小	
13 埴輪 形象埴輪	II区 SD231	長辺 9.3 短辺 3.7 凸面幅 2.0	9.3 3.7 2.0	淡乳茶色	やや粗	良好	ナデ。		極小
14 埴輪 形象埴輪	II区 SD231	長辺 12.3 短辺 9.0 凸面幅 2.6	12.3 9.0 2.6	淡乳茶色	やや粗	良好	ナデ。		極小
24 土師器 高杯	III区 SD231	(7.7) 底径 5.1 脚底径 5.5	7.7 5.1 5.5	淡茶色	やや粗	良好	斜部ナデ。脚部外腹ハラミガキ。内面ナデ。 脚部指サニエ。高脚部ナデ。 脚底2.4	一部反転 1/2	
26 土師器 杯	III区 SD231	(14.5) 4.2	14.5 4.2	明淡黄褐色	密	良好	口縁部・体部ナデ。	一部反転 2/5	
29 埴輪 円筒埴輪	IV区 円筒館・西	(35.6)	35.6	淡乳茶色	2mm以下の中粒を多量に含む	良好	調整不明。外正面黒斑。		反転
10 埴輪 円筒埴輪	IV区 円筒館・中央	底径(32.0)	32.0	淡乳茶色	2mm以下の中粒を多量に含む	良好	上から二段目に一対の長方形スカシ。		
30 埴輪 円筒埴輪	IV区 円筒館・中央	底径(32.0)	32.0	淡乳茶色	2mm以下の中粒を多量に含む	良好	外側タテおよび左一右のナナメハケ。 内側左上・右下のナナメハケ。 下から二段目・一対の円形スカシ。外側黒斑。最大径(34.2)		反転
31 埴輪 円筒埴輪	IV区 円筒館・東	底径(36.2)	36.2	淡乳茶色	2mm以下の中粒を多量に含む	良好	外側タテハケ。内面ナデ、部分的にハケ。		反転
32 白磁 碗	III区 1A 包含層	(13.4)	13.4	淡綠茶色	密	良好	口縁部凹軸ナデ。		反転 極小
39 須恵器 海螺	III区 3 A 包含層	部体最大径 9.8	9.8	灰色	密 1.5mm以下の砂粒を微量に含む	良好	回転ナデ。円孔部の器壁を内側に残す。		一部反転 口縁欠損
41 庄内式 高杯	III区 3 A 包含層	(11.9) 9.5 脚底径(8.2)	11.9 9.5 8.2	乳黃褐色	やや粗 1mmの砂粒を含む	良好	調査不明。 脚部3方向に円孔。 脚底4.1	一部反転 1/2	
42 庄内式 高杯	III区 包含層	(14.2) 9.7 脚底径(9.0)	14.2 9.7 9.0	白茶色	やや粗	良好	斜部ハラミガキ。脚部ナデ。3方向に円孔。 脚柱部内面シボリ目有り。 脚高5.4	一部反転 3/5	
43 庄内式 高杯	III区 包含層	(9.7) 8.1 脚底径(11.8)	9.7 8.1 11.8	茶褐色	1mm以下の砂粒を微量に含む	良好	調査不明。脚部3方向に円孔。	一部反転 4/1	
44 衆生 台付鉢	III区 包含層	(13.1) 8.6 脚底径 9.0	13.1 8.6 9.0	茶褐色	2.5mm以下の砂粒を多量に含む	良好	斜部ハラミガキ。脚部外腹ハケ、内面ヘラナデ。施部外腹ヨコナデ。	一部反転 脚高1.8	
45 衆生 台付鉢	III区 包含層	(16.6) 9.5 脚底径(11.2)	16.6 9.5 11.2	暗茶色	2.5mm以下の砂粒を少量含む	良好	口輪部外腹ハラミガキ。内面ハケ後ヘラミガキ。施部外腹ハケ、内面ヘラミガキ。脚部ハケ。外腹黒斑有り。脚高1.6	一部反転 ほぼ完形	
46 衆生 小型鉢	III区 包含層	4.4 3.6	4.4 3.6	淡乳茶色	やや粗	良好	手づくね成形。		完形
47 衆生 小型鉢	III区 包含層	3.8 3.6	3.8 3.6	白茶色	やや粗	良好	手づくね成形。		完形
48 衆生 小型鉢	III区 包含層			茶色	やや粗	良好	手づくね成形。	一部反転 4/5	
49 衆生 小型鉢	III区 包含層	6.5 4.0 2.5	6.5 4.0 2.5	明淡褐色	密	良好	手づくね成形。 底部内面すす材有。		完形
50 衆生 小型鉢	III区 包含層	3.9 3.7	3.9 3.7	淡基灰色	2mm以下の砂粒を少量含む	良好	手づくね成形。		完形
53 衆生 壺	III区 包含層	(14.7) 16.3	14.7 16.3	褐褐色	やや粗 0.2-1mmの砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ヘラケツリ。 体部外腹スカスカ有り。体部最大径(16.8)	一部反転 3/5	
54 庄内式 壺	III区 包含層	13.8 32.6 4.2	13.8 32.6 4.2	淡灰茶色	2mm以下の砂粒を少量含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面上部一中位タキ、下ナデハケ。 体部内面ナデナデ。 体部最大径(17.2)	一部反転 3/5	

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	長さ(幅) mm (幅×高)	径 高	色調	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考
56 11	布留式 壺	I区 SK301	15.4	淡茶褐色	4mm以下の砂粒を多量に含む	魚好	口縁部ヨコナダ、底部ハケ。体部外面ハケ、内面ハラケズリ。体部下位外側すす付着。体部最大径(26.6)	反転 2/5	
57 12	弥生 壺	I区 SK301	(9.6) 12.3	淡茶褐色 4.0	3.5mm以上の砂粒を多量に含む	やや粗 良好	口縁部・肩部ヨコナダ。体部外面タキ、内面ナデ。口縫接部一部体部外面すす付着。	一握反転 4/5	
58	弥生 壺	I区 SK301	(15.5)	淡乳白色	やや粗	魚好	口縫接部・肩部ヨコナダ。体部外面タキ、内面ナデ。口縫接部一部体部外面すす付着。	反転 極小	
59 60	弥生 壺	I区 SK302	(20.1)	淡黃茶色	やや粗	良好	口縫接部・肩部ヨコナダ後ハケ。口縫接部内面ヨコナダ。底部外面タキ、内面ハケ。口縫接部一部体部外面すす付着。	反転 極小	
12	弥生 壺	I区 SK302	(13.8)	淡茶色	やや粗	魚好	口縫接部ヨコナダ。	一握反転 1/5	
61	弥生 壺	I区 SK302	(15.8)	淡茶色	やや粗	良好	口縫接部外面・肩部外面ヨコナダ後ハケ。口縫接部内面ヨコナダ。体部外面タキ、内面ナデ。口縫接部一部体部外面すす付着。	反転 極小	
62	弥生 鉢	I区 SK302	(29.4)	淡茶色	やや粗 1~2mmの砂粒を含む	魚好	口縫接部ナデ。体部外面タキ、内面ナデ。	反転 1/5	
63 12	赤生 壺	I区 SK303	6.8 9.0 3.0	淡茶褐色 底径	3mm以下の砂粒を中量含む	魚好	口縫接部外面・肩部外面ヨコナダ。口縫接部内面指ナデ。口縫接部内面間隔オサエ。体部ヨラナダ。	ほぼ完形	
64 12	弥生 壺	I区 SK303	2.7	淡茶褐色	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	肩部外面ハミガキ、内面指オサエ。体部ハケ。底部内面ハラナダ。	3/5	
65 12	弥生 壺	I区 SK303	(9.5) 9.2 3.5	淡灰茶色 底径	3mm以下の砂粒を少額含む	良好	口縫接部外面ヨコナダ後ハケ。内面ヨコナダ。体部外面タキ、内面上面ト半指オサエ。下半ハケ。	一握反転 4/5	
66 12	弥生 体	I区 SK303	39.3	淡白茶色	やや粗	魚好	体部外面ナデ、内面ハケ。底部外面指ツミ。	一握反転 1/5	
67 12	須宝器 退版	II区 SK306		淡灰褐色	3mm以下の砂粒を少量含む	良好	腹部圓柱ナデ。体部外面圓柱ナデ後片面部カキ目。筋部外側ハケ。	一握反転 口縫欠損	
68 12	弥生 壺	II区 SK311	28.6 5.4	明茶褐色 底径	やや粗 0.5 2mmの砂粒を含む	魚好	口縫接部ヨコナダ。体部外面タキ、内面ナデ。内面下位ハケ。底部外側下すす付着。内面上面ト半指ツミ有り。底部外側指オサエ内面ナデ。体部最大径24.3	完形	
69 12	弥生 壺	II区 SK311	15.7 21.5 4.5	淡茶褐色 底径	1~2mmの砂粒を含む	良好	口縫接部ヨコナダ。体部外面タキですす付着。内面ナデで工具痕有り。底部ナデ。体部最大径19.4	ほぼ完形	
70	弥生 壺	II区 SK311	17.3 21.3 5.2	茶褐色 底径	3mm以下の砂粒を多量に含む	良好	口縫接部ヨコナダ。体部外面タキ、内面ハラナダ。底部ナデ。体部最大径19.4	4/5	
71 13	弥生 壺	II区 SK311	18.4 26.7 5.2	淡茶褐色 内 底灰褐色	0.2~2mmの砂粒を含む	良好	口縫接部ヨコナダ後外側ハケ。体部外面上半タキ。下部タキ後ナデ。内面板ナデ。底部削除ナデ。体部最大径24.0	ほぼ完形	
72 13	弥生 壺	II区 SK311	18.9 22.7 5.3	淡茶褐色 内 底茶褐色	やや粗 0.5 ~2mmの砂粒を含む	良好	口縫接部ヨコナダ。体部外面タキ、内面ナデ。底部ナデ。口縫接部~底部すす付着。体部最大径20.4	ほぼ完形	
73 13	弥生 壺	II区 SK311	(16.9) 16.9 4.5	茶褐色 底径	4.5mm以上の砂粒を多量に含む	良好	口縫接部ヨコナダ。体部外面タキで中位擦ナデ。体部内面ハラナデで下位擦運有り。	ほぼ完形	
74 14	弥生 小型鉢	II区 SK311	5.1 4.1	淡黄褐色 青		魚好	手づくね成形。	完形	
75 14	弥生 小型鉢	II区 SK311	6.6 5.5 2.7	赤褐色 青		良好	口縫接部外面一部体部外面ナデ、内面ナデ後ハミガキ有り。	3/5	
76 13	弥生 壺	II区 SK311	16.4 22.6 4.2	茶褐色	2mm以下の砂粒を多量に含む	良好	口縫接部ヨコナダ。内面ナデ。体部外面タキで下すす付着。体部内面ナデで下半黒運有り。底部ナデ。体部最大径18.6	完形	
77	弥生 壺	II区 SK311	17.1 20.0 5.1	茶褐色	0.5~2mmの砂粒を多量に含む	良好	口縫接部ヨコナダ。体部外面タキですす付着。体部内面ハラナデで下すす黒運有り。	完形	
78 13	弥生 壺	II区 SK311	14.8 22.2 4.4	茶褐色~ 褐色	やや青 0.5~3mmの砂粒を含む	良好	口縫接部ヨコナダ。体部外面タキ、内面と上半ナデ下ハケ。底部外面ナデ。体部最大径17.7	ほぼ完形	

遺物番号 出土地点	器種	出土地点	古墳(区) 時代	色	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考
79 先生 鏡	II区 SK311	(14.7) 底径 20.0 2.0	赤茶褐色~ 青灰色	1mm以下の砂 粒を少量含む	良好	口縁部ヨコナダ。体部外面タタキ後一部ハケ。内面 ハケ、底部外面ヘラケズリ。	一部反転 4/5	
80 先生 鏡	II区 SK311	(19.2)	青灰色	3mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部ヨコナダ。口縁部内面ヨコナダ。口縁部外側ハケ。 体部外側タタキ後ハケ。体部内面ナダ。	反転 極小	
81 先生 鏡	II区 SK311	13.1 16.5 底径 (3.4)	暗赤褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナダ。頭部外側~体部外側タタキ。体 部内面ハラナダ。底部外側ナダ。	一部反転 3/5	
82 先生 鏡	II区 SK311	(13.6)	暗茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナダ。 I排輪外周波形文(2条)。	反転 極小	
83 先生 鏡	II区 SK311	底径 4.1	茶褐色	3mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	体部外側ハケ~下位ハミガキ。内面ヘラナダ。 体部最大径15.7	一部反転 3/4	
84 先生 鏡	II区 SK311	13.0 17.6 底径 5.3	外:茶褐色 内:灰茶色	やや粗 0.5~1mmの砂粒 を含む	良好	口縁部ヨコナダ。体部外側ハラミガキ、内面ヘラ ナダ。外周ト位相尾有り。底部ナダ。 体部最大径18.2	ほぼ完形	
85 鏡裏 高杯	III区 SD301	底径(11.0)	深灰色	素	良好	脚部回旋ナダ。	反転 1/5	
87 土師器 杯	III区 SD301	10.2 3.3	淡乳茶色	やや粗	良好	I排輪~体部外側ナダ、内面ナダ後ハミガキ。	一部反転 4/8	
90 鏡裏 体	III区 SD301	(36.0) (13.2)	灰青色	素 0.2~2 mmの砂粒を含む	良好	口縁部外側回旋ナダ後ハケ。内面回転ナダ。体部 外側回転2~5条で、半打タタキ残る。底部外 側回転ナダ。底部体部同心円タタキ後ナダ。	反転 1/3	
93 先生 鏡	II区 SD303	(13.6)	明透褐色	やや粗	良好	I排輪ヨコナダ。頭部外裏ナダ。 口縁部内面ナダ。口縁部内面3箇一基の円形 突起突起文。	反転 1/5	
96 先生 鏡	II区 SD303 底径 2.0	10.8 15.8 2.0	外:茶褐色 内:灰茶色	1.5mm以下の 砂粒を少量含む	良好	口縁部ヨコナダ。体部上半外側タタキ後ハミガ キ。体部下半外側ハラミガキ、無底有り。 体部内面ハラゲ。	完形	
102 先生 鏡	II区 SD303	13.5 7.3 底径 3.0	淡茶褐色	2.5mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	口縁部外側~体部外側ナダ。底部外側指サエ。 内面ヘラナダ。	完形	
103 先生 鏡	II区 SD303	(6.4)	茶褐色	1.5mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	口縁部~体部外側ナダ。体部内面ハケ。口縁部お よび底部ハラ形有り。 体部最大径(11.1)	反転 1/5	
106 先生 鏡	II区 SD303上層	13.2 19.2 底径 4.7	淡褐色	素 0.2~1 mmの砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナダ。体部外側上半ハケ。下半ナダで 中位ハラ有り。内面ハケ。口縁部外側~体部上半 外側有り付着。体部最大径19.8	完形	
107 先生 鏡	II区 SD303	(16.4)	茶褐色	やや粗	良好	I排輪波形文。	反転 極小	
108 先生 鏡	II区 SD303上層	(16.6)	外:茶褐色 内:灰茶色	3.5mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	口縁部外側竹管文。肩部輪波状文及び竹管文。 口縁部外側ハラミガキ、内面ナダ。体部外側ナダ、 内面指サエ。	反転 1/5	
109 先生 鏡	II区 SD303上層	(16.6) 27.5 底径 (3.7)	茶褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナダ。体部外側タタキ、内面ナダ。底 部ナダ。	反転 1/2	
110 先生 鏡	II区 SD303上層	15.6 24.1 底径 3.8	外:茶褐色 内:灰茶色	2mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部ヨコナダ。口縁部外側ヨコナダ後ハケ。 内面ナダ。体部外側タタキ、内面上位ヘラナダ、 内面中位~下位ナダ。	3/5	
111 先生 鏡	II区 SD303上層	16.6 26.0 底径 4.9	茶色	やや粗	良好	口縁部ナダ。体部外側タタキです付着。	3/5	
112 先生 鏡	II区 SD303上層	13.9 15.8 底径 4.7	淡褐色	素 0.5~1.5 mmの砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナダ。体部外側タタキ、内面ヘラナダ。 内面指サエ付す。底部外側ナダ。	3/5	
113 先生 鏡	II区 SD303上層	13.6 15.0 底径 3.5	外:茶褐色 内:灰茶色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部ヨコナダ。体部外側タタキ、内面ヘラナダ、 内面指サエ付す。底部外側指サエ。	3/5	
114 先生 鏡	II区 SD303上層	(16.0) 内:灰茶色	素	良好	口縁部ヨコナダ。体部外側タタキ後ハケ、内面指 ナダ。	反転 極小		
115 先生 鏡	II区 SD303上層	10.4 9.2 底径 3.5	乳灰茶色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部外側~肩部外側ハケ。口縁部内面ハケ。体 部外側タタキ、内面上半ヘラナダ。下半指ナダ。 底部外側ヘラナダ。	3/4	

遺物番号 内板番号	器種	出土地点	計量(口 底深)	色調	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考
116 柔生 裏 裏	IIK SD303上層		(19.8)	乳褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。肩部外面ハケ。体部外側タキ。 内面ナダ。体部最大径(21.8)	反転 1/8
117 柔生 裏 裏	IIK SD303上層		(16.8)	乳褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。口縁部内面ハケ。 体部外側タキ、内面ナダ。	反転 1/5
118 柔生 裏 裏	IIK SD303上層	底径 4.6	15.6 20.1	黒褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タキ、内面ハケ。口 縁部一全体外側スス付着。体部最大径16.8	ほぼ完形
119 柔生 高杯 高杯	IIK SD303上層	底径 9.9	(14.7) 9.5	暗赤茶色	3.5mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナダ。脚部外面ハケ。脚部 内面ヨコナデ。脚部4方向に円孔。	4/5
120 柔生 高杯 高杯	IIK SD303上層	底径 (16.2)	24.2 14.6	淡灰褐色	やや粗	良好	杯部内外面と脚部外面ハミガキ。内面ナダ。脚 部二段3方向に円孔。	3/4
125 柔生 高杯 高杯	IIK SD303上層	底径(14.8)	(24.4) 13.3	淡茶灰色	2mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	杯部ハミガキ。脚部外面ハミガキ。内面ナダ。 脚柱部内面にシボリ有り。裾端部内面ヨコナデ。	1/3
130 柔生 裏 裏	IIK SD303上層	底径 2.8	(10.7) 6.2	黒褐色	やや粗	良好	つまみ部外側指痕痕、内面ナダ。口縁部ヨコナ デ。	3/5
132 柔生 体 体	IIK SD303上層	底径 3.2	9.0 6.7 3.2	淡茶茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タキ後ナダ、内面 板ナダ。 体部最大径 9.5	ほぼ完形
134 柔生 体 体	IIK SD303上層		(12.8)	明赤褐色	やや粗	良好	体部ナダ。底部指痕正側有り。	3/4
136 柔生 体 体	IIK SD303上層	底径 4.1	(14.8) 6.2	淡茶色	やや粗	良好	鏡口器。体部外側ナダ、内面ハケ。	1/2
137 柔生 穿孔体 穿孔体	IIK SD303上層	底径 2.6	(13.3) 9.5	灰茶褐色	やや粗 1~ 5mmの砂粒を 含む	良好	口縁部ナダ。体部外側タキ、内面ハケ。底部 穿孔。	ほぼ完形
138 柔生 体 体	IIK SD303上層		12.5	明茶色	やや粗	良好	調整不明。	1/3
139 柔生 手焼き体 手焼き体	IIK SD303下層	底径 3.7	10.4	灰茶褐色	密	良好	口縁部~体部ナダ。	反転 極小
140 柔生 手焼き体 手焼き体	IIK SD303下層	底径 4.1	(16.8)	淡褐色	密 0.2~1.0 mmの砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナダ。覆い部外側 面ナダ、内面ハケ。	3/4
141 柔生 手焼き体 手焼き体	IIK SD303下層		(14.3)	暗赤茶色	やや粗	良好	体部~底部外側ヨコナデ、内側ナダ。覆い部外側 ハケ、内面ナダ。底部スス付着。	反転 1/5
142 柔生 蜜 蜜	IIK SD303下層	底径 3.7	(12.4) 17.3 3.7	淡灰茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。口縁部ハミガキ。体部外側 ハミガキ。内面上半ナダ、下半ヘウミガキ。底部 外側タキ。スス・黒斑点有り。体部最大径14.3	3/4
143 柔生 蜜 蜜	IIK SD303下層	底径 4.9	12.3 17.9	淡茶茶色	やや粗 0.2~0.5 mmの砂粒少量 含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側ハミガキ。内面板ナ ダ。底部へウミガキ。内面三段有り。体部最大径16.8	ほぼ完形
144 柔生 蜜 蜜	IIK SD303下層	底径 4.2	11.7 17.8 4.2	赤褐色	密 0.2~1.0 mmの砂粒少量 含む	良好	口縁部ヨコナデ。内面ハケ残る。体部外側ハ ケ、タキ残る。内面上半ハケのらすナダ、下板ナダ。 体部外側スス付着。体部最大径(15.7)	一部反転 4/5
145 柔生 蜜 蜜	IIK SD303下層	底径 (5.0)	(11.7) 22.5	淡灰茶色	3.5mm以下の 砂粒多量に 含む	良好	口縁部外側~体部外側剥離の為不明。口縁部合 縫、内面撒サキ。体部内面ハケ。体部最大径(17.6)	一部反転 3/4
146 柔生 蜜 蜜	IIK SD303下層	底径 4.8	12.7 23.7 4.8	明茶褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ、外側ハケ残る。体部外側ハ ケ。内面ナダ後ハク剥離。体部外側下スス付着。 体部最大径(16.4)	完形
147 柔生 蜜 蜜	IIK SD303 FM	底径 4.0	13.0 18.1 4.0	淡茶褐色	密	良好	口縁部ハミガキ。体部外側ハケ後ハミガキ。 内面ナダ。口縁部竹管文。	ほぼ完形
154 柔生 蜜 蜜	IIK SD303 FM	底径 4.3	(10.7) 12.9 4.3	淡灰茶色	やや粗	良好	口縁部~体部外側ナダ後ハケ、体部内面滑ナ ダ。	1/2
155 柔生 蜜 蜜	IIK SD303 FM	底径 2.7	(7.6) 10.9 2.7	明茶褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデで外側ハケ残る。体部外側ハ ケ、内面ナダ後ハクヘウミガキ。体部外側下スス付 着。口縁部竹管文。体部最大径(11.1)	一部反転 3/4

遺物番号 (個別番号)	器種	出土地点	盤面(μm) (測定値)	目次番号	色調	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考
157 17	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	11.6 15.9 3.3		淡灰茶色	密	良好	口縁部一帯外部へラミガキ、内面ハケ。 体部外面上ス付着。外面部黒斑有り。	ほぼ完形
159 17	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	11.4 17.1 3.9		淡灰茶色	やや粗	良好	口縁部一帯外部へラミガキ、体部内面ハケ。内 面黒斑有り。	ほぼ完形
161 17	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	11.7 19.2 4.8		淡褐色	やや粗 0.5~ 1mmの砂粒を 多量に含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部内外側ハケ。外面部黒斑有り。	完形
162 17	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	10.2 24.9 4.2		淡青茶色	やや粗	良好	口縁部外側へラミガキ、内面指ナデ、雄部ヨコナ デ。体部外側へラミガキ、内面上半ナデ、下半ハ ケ。体部最大径16.2	一部反転 ほぼ完形
164 17	弥生 台付壺	E区 SD303T9 底径	13.8		明黄茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ(内面へラミガキ)。口縁部外側下 半一帯外部へラミガキ、内面ナデ、下辺ハケ残 る。口縁部外側凹窪文(4系)。	一部反転 1/2
165 17	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	11.0 20.4 4.5		茶灰色	やや粗	良好	口縁部ナデ。体部外面上半へラミガキ。下半タケ ナ、内面へラミナデ。肩部へラ配モリ有り。体部最大径17.9	ほぼ完形
177 17	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	15.8 27.0 5.1		淡黄褐色	密 0.2~1.0 mmの砂粒を含 む	良好	口縁部外側ヨコナデ、内面ハケ後へラミガキ。体 部外側上半ハケ後へラミガキ、内面ナデ。頭部、 肩部間へラ横列点文。体部最大径21.8	一部反転 4/5
182 18	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	11.4 5.1 5.2		暗茶褐色	密	良好	内外面ナデ。	完形
183 18	弥生 台付壺	E区 SD303T9 底径	9.1 10.4 5.2		淡黑茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。外側上半ハケ。内面 ナデ。口縁部一帯外部内外側、舞台部外側ス付 着。体部最大径10.4	4/5
184 18	弥生 台付壺	E区 SD303T9 底径	(14.4) 15.3 (5.9)		暗茶褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部タタキ後ハケ、内面板ナデ。 肩部ナデ。体部最大径15.6	3/4
187 18	弥生 台付壺	E区 SD303T9 底径	13.8 18.7 (7.6)		淡茶褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タタキのち肩部ハケ内 面ハケ。脚部外側ナデ。	一部反転 3/4
188 18	弥生 台付壺	E区 SD303T9 底径	14.3 20.6 6.6		暗茶褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タタキのち肩部ハケ内 面ハケ。脚部外側ナデ。	完形
195 18	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	(16.2)		灰茶色	やや粗 0.5~ 1mmの砂粒を 多量に含む	良好	口縁部外側ハケ、内面へラミヨコナデ。体部外側 ハケ、内面ナデ。体部外側ス付着。体部最大径(22.7)	反転 1/3
197 18	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	16.3 29.8 4.9		乳白色	密 0.5mm以下 の砂粒を多量 に含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側上位ハケ、中位~下位 タタキ後ハケ。内面上位ナデ、中位~下位ハケ。 体部最大径22.7	4/5
198 18	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	13.0 26.6 5.0		灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タタキ、内面へラミ ナデ。体部外側ス付着。口縁部外側 刺突文。体部最大径21.5	ほぼ完形
199 19	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	18.4 24.7 4.9		淡褐色	密 0.2~2.0 mmの砂粒を含 む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側上半タタキ後ナデ。下 半ハケ、内面ナデ。下ハケ。体部外側ス付 着。体部最大径19.2	一部反転 3/4
201 19	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	(17.0)		暗茶褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側平行タタキ後肩部面 状タタキ、内面ナデ。外側ス付着。体部最大径(17.7)	反転
205 19	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	15.5 18.8 3.9		淡茶色	やや粗 0.2~ 1mmの砂粒を 含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側上半タタキ後ナデ。下 半ナデ。内面ヨコタタキの板ナデ。外側下半黒斑 有り。体部最大径16.6	ほぼ完形
206 19	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	(12.1) 19.7 4.6		明黄褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タタキ、内面ハケ。外 側下辺ス付着。体部最大径(15.2)	3/4
208 19	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	14.0 13.7 3.4		黄灰褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タタキ、内面ナデ。体 部外側ス付着。頭部、肩部間指留痕有り。	4/5
209 19	弥生 壺	E区 SD303T9 底径	15.3 16.4 4.4		明黄褐色	密	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タタキ、内面ハケ。口 縁部合板面脂ナデ。体部最大径16.7	4/5
212 19	弥生 台付壺	E区 SD303T9 底径	(12.5) 17.7 5.3		褐灰褐色	密 0.2~2.0 mmの砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側上位タタキ、中位~下 位タタキ後ハケ。内面ハケ残る。体部内面へラケレ ズ。体部最大径(13.7)	3/5
214 19	弥生 台付壺	E区 SD303T9 底径	5.6 2.1 3.4		淡褐色	密 0.2~1.0 mmの砂粒含む	良好	体部外側ハケ、一部タタキ残る。内面上半ヘラケ ズ、下半ヘラケズ接ナデ。体部外側上半ス付 着。	1/2

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	出土年(西暦)	口部 形状	色調	胎土	焼成	特徴・形態の特徴	信者有
215 19	碗生 高杯	II区 SD301T層	(29.8) 15.4 脚底径(15.5)	茶褐色	青 の砂粒含む	良好	口縁端部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。脚部外腹ヘラミガキ。内面ナデ。脚部ヨコナデ。 脚高 9.4	反転 3/5	
216 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	27.7 14.7 脚底径(16.9)	茶褐色	青	良好	杯部ヘラミガキ。脚部外側ヘラミガキ、内面細部ハケ。脚部ヘラミガキ。脚部4方向に円孔。 脚高 8.8	4/5	
217 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	(27.4) 11.1 脚底径(14.8)	淡黄褐色	青 の砂粒含む	良好	脚部ヘラミガキ。口縁端部ヨコナデ。脚部外腹ヘラミガキ。内面ナデ。脚部ヨコナデ。 脚高 9.1	3/4	
218 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	26.9 16.5 脚底径(15.9)	淡褐茶色	やや青 の砂粒多量に含む	良好	杯部ヘラミガキ。脚部外腹ナデ、内面シボリ目有り。脚部ヘラミガキ。脚部ヨコナデ。脚部4方向に円孔。 脚高 9.0	ほぼ完形	
223 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	29.0 16.1 脚底径(16.3)	淡黄褐色	やや青	良好	杯部ヘラミガキ。脚部外腹ヘラミガキ、内面ナデ。 脚高 9.1	3/5	
224 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	26.8 19.9 脚底径(15.4)	淡茶色	青	良好	杯部外腹ヘラミガキ。脚部外腹ヘラミガキ、内面ナデ。脚部内腹ハケ。脚部4方向に円孔。 脚高 12.4	ほぼ完形	
225 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	23.4 16.2 脚底径(15.8)	淡茶褐色	青	良好	口縁端部ヨコナデ。内面ヘラミガキ。体部ヘラミガキ。脚部外腹ヘラミガキ、内面ナデ。脚部ヨコナデ。脚部外腹ヘラミガキ。内面ナデ。脚部ヨコナデ。 脚高 8.5	ほぼ完形	
226 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	(20.8) 13.9 脚底径(14.3)	茶褐色	青	良好	脚部ヘラミガキ。体部外腹ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。脚部外腹ヘラミガキ、内面シボリ目。脚部ハケ。脚部3方向に円孔。 脚高 8.2	一部反転 1/2	
227 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	19.8 14.0 脚底径(11.4)	淡褐茶色	やや青	良好	口縁端部ヨコナデ。体部外腹下半。内面ヘラミガキ。脚部外腹ヘラミガキ。脚部ハケ。脚部4方向に円孔。 脚高 7.7	一部反転 ほぼ完形	
230 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	18.6 13.6 脚底径(14.2)	暗灰色	やや青	良好	杯部ヘラミガキ。脚柱部内面ヨコナデ。脚部内腹ハケ。脚部3方向に円孔。	4/5	
231 20	碗生 高杯	II区 SD303T層	(15.8) 10.4 脚底径(11.1)	暗灰色	やや青	良好	杯部外腹ナデ後ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。脚柱部外腹ナデ、内面シボリ目。脚部内腹ハケ。脚部ヨコナデ。	3/5	
234 20	碗生 鉢	II区 SD303T層	(15.0) 7.2 底径 4.7	暗茶褐色	青	良好	口縁部ヨコナデ。体部内面ハケ。	一部反転 2/5	
235 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	16.7 7.7 底径 3.4	淡褐色	青 の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外腹タキ後ナデ、内面ナデ。体部内面ハケ。	ほぼ完形	
236 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	(15.8) 9.3 底径 4.6	白茶色	やや青	良好	口縁部ヨコナデ。体部内面ハケ。	一部反転 4/5	
239 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	(20.7)	明茶色	やや青	良好	口縁部ヨコナデ。体部外腹ヘラミガキ、内面ナデ。 口縁部に神文有り。	反転 極小	
242 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	22.7 10.6 底径 5.1	茶褐色	青 の砂粒	良好	口縁部ヨコナデ。体部内外部ヘラミガキ。底部ナデ。	ほぼ完形	
243 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	19.9 8.2 底径 3.8	明茶褐色	青	良好	口縁部ハケ。体部内外部ヘラミガキ。外面上半ス付青。	光形 一部削離	
244 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	(18.2) 10.9 底径 4.2	明褐色	青 の砂粒を含む	良好	不明。	一部反転 1/2	
245 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	16.6 9.6 底径 3.6	明茶褐色	やや青	良好	口縁部ヨコナデ。体部内外面ハケ。下位タキ。 体部上位、下位黒斑有り。	4/5	
246 21	碗生 台付鉢	II区 SD303T層	5.5 5.0 底径 2.7	黑褐色	やや青	良好	口縁部外腹一齊部ナデ、口縁部内面ハケ。脚部横オサエ有り。	4/5	
247 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	12.5 7.8 底径 3.2	暗灰褐色	やや青	良好	口縁部外腹ハケ、内面ヨコナデ。体部ナデ、外腹上位ヘラミガキ。体部外腹スス付青。	3/4	
248 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	(17.5)	淡黄褐色	やや青	良好	体部外腹ヘラミガキ、内面ナデ。	反転 1/3	
249 21	碗生 鉢	II区 SD303T層	(11.8) 5.6 底径 4.1	淡茶褐色	やや青	良好	体部外腹調整不整、内面工具痕有り、鉄分付青？ 底部ヨコナデ。	3/4	

遺物番号	器種	出土地点	測定(a) (直立)	測定(b) (直立)	色調	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考
250	弥生 鉢	Ⅱ区 SD307T9 底径	(11.7) 6.4	(14.8) 9.7	茶褐色	やや粗	良好	内外面ナデ。底部外面指オサエ。	1/5
251	弥生 串孔鉢	Ⅱ区 SD307T9 底径	4.1 3.2	12.9 6.4	茶褐色	やや粗	良好	体部外面剝離の為不明、内面ハケ。底部に穿孔有り。	1/2
252	弥生 鉢	Ⅱ区 SD307T9 底径	3.9	13.2 7.5	淡黄茶色	やや粗	良好	体部内面ハケ。底部指オサエ。	ほぼ完形
253	弥生 鉢	Ⅱ区 SD307T9 底径	(3.2) 7.4	(13.2) 7.4	淡乳黄色	やや粗	良好	体部外側ナデ、内面ハケ。底部指オサエ有り。	1/2
254	弥生 鉢	Ⅱ区 SD307T9 底径	3.0	13.5 7.4	淡茶褐色	密	良好	外側ナデ、内面ハラナデ。底部外面指オサエ。	ほぼ完形
255	弥生 鉢	Ⅱ区 SD307T9 底径	(24.9) 11.4 (7.1)	(24.9) 11.4 (7.1)	淡茶褐色	密	良好	口縁部外側面糊文(3条)、内面ハラミガキ。体部外側下半墨抜有り。	3/5
256	弥生 鉢	Ⅱ区 SD307T9 底径	8.6	(31.6) 15.2	淡灰茶色	密	良好	内面ハラミガキ。体部外側下半墨抜有り。	1/2
257	弥生 器台	Ⅱ区 SD307T9 底径	17.2	(16.2) 11.4 (7.2)	茶褐色	密0.1~1.0mm の砂粒を含む	良好	口縁部ハラミガキ、端部ヨコナデ。体部外側ハラミガキ、内面糊文ナデ。底部外側ハラミガキ、内面ナデ、端部ヨコナデ。	反転 1/2
258	弥生 器台	Ⅱ区 SD307T9		17.1	茶褐色	2.5mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	口縁部ハラミガキ、端部ヨコナデ。体部外側ハラミガキ、内面ハケ。体部二段4方向に凹孔。	一級反転 1/2
259	弥生 器台	Ⅱ区 SD307T9		(17.1)	暗乳茶色	やや粗	良好	口縁部~体部外側ハラミガキ。内面ハケ後ハラミガキ。口縁部に竹管文有り、痕跡有。体部に竹管文有り。蓋の口縁部か?	-
260	弥生 壺?	Ⅱ区 SD307T9		21.5	茶褐色	やや粗 0.1~0.5mmの砂粒 を多量に含む	良好	外側ハラミガキ、内面ナデ。口縁端部ヨコナデ。	1/5
261	弥生 器台	Ⅱ区 SD307T9 底径	(7.1) 4.9 (7.4)	(7.1) 4.9 (7.4)	暗茶色	やや粗	良好	外側ナデ、内面ハケ。	1/2
262	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層 底径	9.9 14.8 3.9	9.9 14.8 3.9	黄茶灰色	密0.2~2.0mm の砂粒を含む	良好	口縁部内側下位ハラミガキ。体部外側ハラミガキ、内面上ビカナ、中位~下位ハラミガキ。体部外側下半墨抜有り。体部最大径14.5	完形
263	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層 底径	8.0 15.5 4.2	8.0 15.5 4.2	淡灰茶色	やや粗 0.2~1.0mmの 砂粒を多量に 含む	良好	口縁部ヨコナデ、端部凹窓。頭部~体部外側ハラミガキ、体部内側上位ナデ、中位板ナデ。体部外側墨抜有り。肩部ヘラ記号有り。体部最大径15.0	完形
264	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層 底径	11.1 17.2 (4.7)	11.1 17.2 (4.7)	淡茶褐色	3.5mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	口縁部ケダ、頭部~体部外側上半ハケ、下半ナデ。体部内側ナデ、下位ハラナデ。底部墨抜有り。肩部ヘラ記号有り。体部最大径14.8	3/4
272	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層 底径	(13.5) 26.6 5.3	(13.5) 26.6 5.3	淡褐色	密0.2~2.0mm の砂粒を含む	不良	口縁端部ヨコナデ。口縁外側ハケ。体部外側ハケ後板ナデ、内面上半ナデ、下半板ナデ、下位ハケ。体部最大径(13.7)	一級反転 1/2
273	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層	(25.4)	赤茶褐色	密	良好	口縁部ハラミガキ。口縁端部と口縁一部間に竹管形浮文有り。	反転	
274	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層	(16.7)	淡茶色	やや粗	良好	口縁部外側ヨコナデ、内面ナデ。口縁端部ハラミガキ、内面ナデ。口縁端部竹管形浮文。	反転 1/5	
275	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層	(15.3)	茶褐色	密	良好	口縁端部竹管文有り。頭部~体部ハラミガキ。体部最大径(22.4)	反転 1/2	
277	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層 底径	(15.5) 4.4	茶褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タッキ、内面上位ナデ、中位~下位ハケ。体部外側下トスス付着。体部最大径21.5	ほぼ完形	
278	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層 底径	16.2 23.5 5.1	16.2 23.5 5.1	茶褐色	3mm以下の 砂粒を多量に 含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側上半タッキ、下半タッキ後ハケ、内面ハケ。体部外側下半スス付着。体部最大径21.9	ほぼ完形
282	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層 底径	16.7 26.0 3.7	16.7 26.0 3.7	淡灰茶色	密0.2~2.0mm の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナデ、ハケ残る。体部外側タッキ後ナデ、内面上半ナデ、下半ハケ。体部最大径18.5	ほぼ完形
283	弥生 壺	Ⅱ区 SD307上層 底径	16.0 22.0 3.7	16.0 22.0 3.7	茶褐色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側タッキ、内面ハケ。体部最大径(18.0)	2/5

遺物番号 回収番号	器種	出土地点	主計(目) 復元形 直徑	口徑 (直徑)	色調	胎上	焼成	技法・形態の特徴	備考
288	弥生 高杯	Ⅷ区 SD001上層	(19.1) 13.3 底径(9.7)	淡茶灰褐色	密		良好	杯部ヘラミガキ。脚部外側ヘラミガキ、内面ハケ。 脚部3方向に円孔。	反転 2/5
289	弥生 高杯	Ⅷ区 SD001上層	(20.0) 15.4 底径(14.3)	茶褐色	4mm以下の砂粒を 多量に含む		良好	杯部ヘラミガキ。脚部外側ヘラミガキ、内面シ ボリ。脚部外側ハケ、内面ヨコナデ。脚部3方 向に円孔。	一部反転 2/5
290 23	弥生 高杯	Ⅷ区 SD001上層	14.7 14.1 底径 14.8	乳黃褐色	やや粗 1~ 5mmの砂粒を 多量に含む		良好	杯部ナデ。脚部ヘラミガキ。脚部3方向に円孔。	4/5
291 23	弥生 高杯	Ⅷ区 SD001上層	19.2 14.8 底径 12.4	茶褐色	やや粗		良好	杯部外側スス付着。脚部外側ヘラミガキ。足端部 ヨコナデ。脚部3方向に円孔。	3/4
292	弥生 鉢	Ⅷ区 SD001上層	(20.7) 12.6 底径 4.1	淡棕色	密0.2~1.0mm の砂粒を含む		不良	口縁部外側~体部外側ハケ後ヘラミガキ。内面ヘ ラミガキ。	1/2
293	弥生 鉢	Ⅷ区 SD001上層	(20.3) 13.0 底径 3.9	淡茶褐色	密		良好	口縁部ヘラミガキ。体部外側ハケ。内面ヘラミガ キ。体部外側黒斑有り。	2/5
294 23	弥生 鉢	Ⅷ区 SD001上層	22.4 22.6 底径 4.3	茶色	やや粗		良好	口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。外側に黒斑有 り。底部指オサエ。	4/5
297	弥生 鉢	Ⅷ区 SD001上層	(15.2) 10.3 5.2 底径	淡茶褐色	密		良好	体部外側ナデ。内面下平ヘラナデ。	3/5
298 23	弥生 小鉢	Ⅷ区 SD001上層	12.6 6.6 底径 4.5	茶褐色	密		良好	口縁部黒ナデ。体部外側タキ。内面ナデ。体部 上平に黒斑有り。	
299 23	弥生 鉢	Ⅷ区 SD001上層	(24.2) 15.1 5.1 底径	淡茶色	やや粗		良好	口縁部ヘラミガキ。体部外側ヘラミガキ。底部ナ デ。	3/5
300 23	弥生 鉢	Ⅷ区 SD001上層	25.5 16.6 4.8 底径	乳白色	やや密 1mm 以上の砂粒を 多く含む		良好	口縁部外側ヘラミガキ、口縁部分外側ハケ。 体部ヘラミガキ。	3/4
301	弥生 鉢	Ⅷ区 SD001上層	(21.6) 11.3 4.6 底径	橙茶色	密		良好	口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。底部外側ナデ。	反転 1/3
302 23	弥生 鉢	Ⅷ区 SD001上層	24.6 10.4 3.8 底径	淡茶灰褐色	密		良好	口縁部ヨコナデ。体部外側ハケ。口縁部~体部 上半黒斑有り。口縁部繩花状。	4/5
303	石縄	Ⅷ区 SD001上層	長辺 7.5 短辺 3.3	灰色				外面中央部に溝が通る。砂岩。	

図 版



1区 第1次面全景(西から)



1区 第2次面全景(西から)



2区 第2次面S D231(東から)



2区 第2次面埴輪円筒棺(南から)



1区 第3次面全景(西から)



2区 第3次面全景(西から)



1区 第3次面 S X 301遺物出土状況(南から)



1区 第3次面S X302遺物出土状況(南から)



1区 第3次面S K303遺物出土状況(南から)



2区 第3次面SK3II遺物出土状況(南から)



2区 第3次面SD3II遺物出土状況(西から)



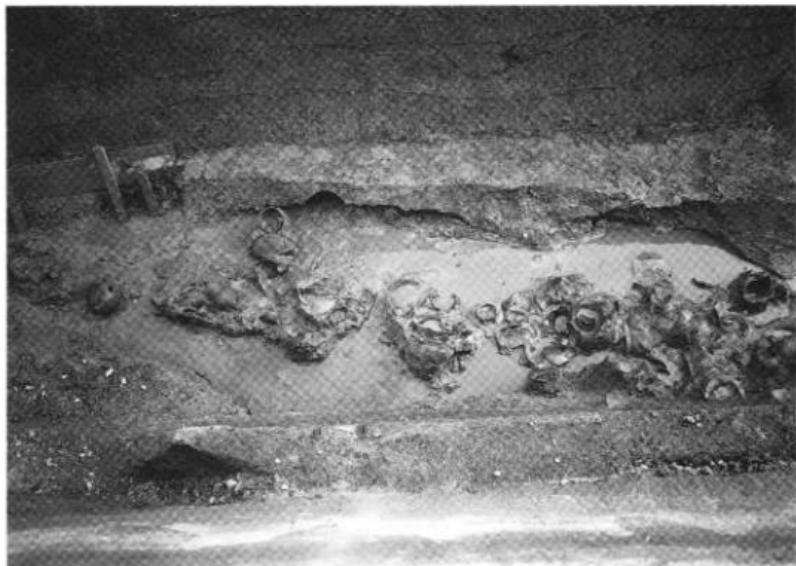
2区 第3次面SD3III遺物出土状況(東から)



2区 第3次面S D 303遺物出土状況(南から)



2区 第3次面S D 303遺物出土状況(南から)



2区 第3次面SD 303遺物出土状況(北から)



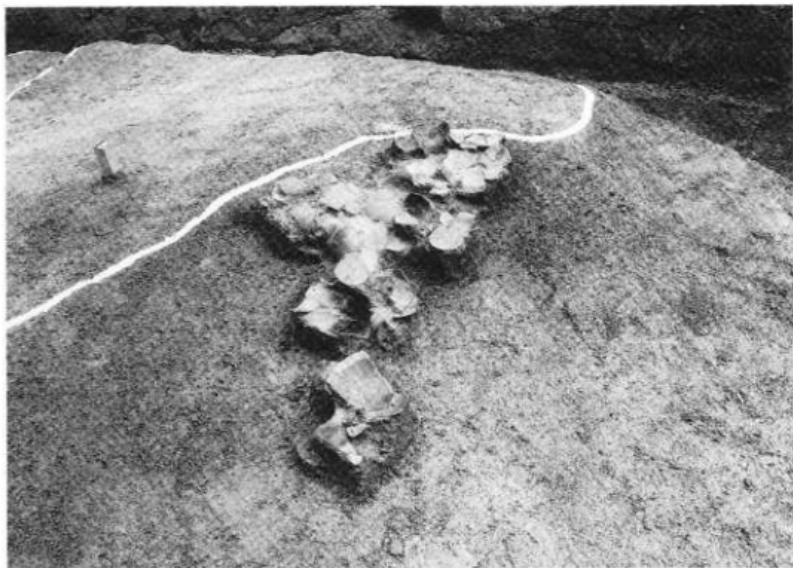
2区 第3次面SD 303遺物出土状況(北から)



3区 第3次面全景(北から)



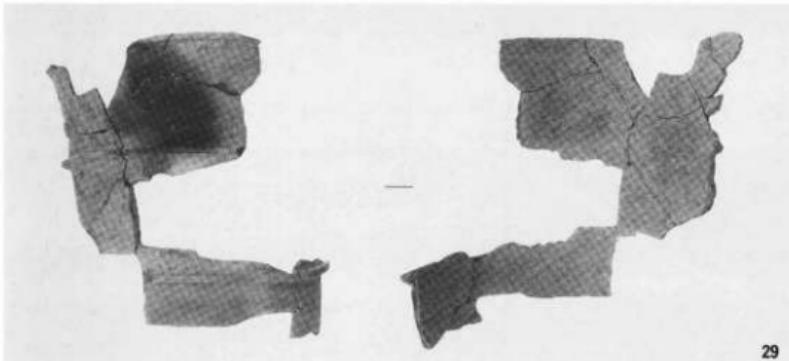
3区 第3次面全景(南から)



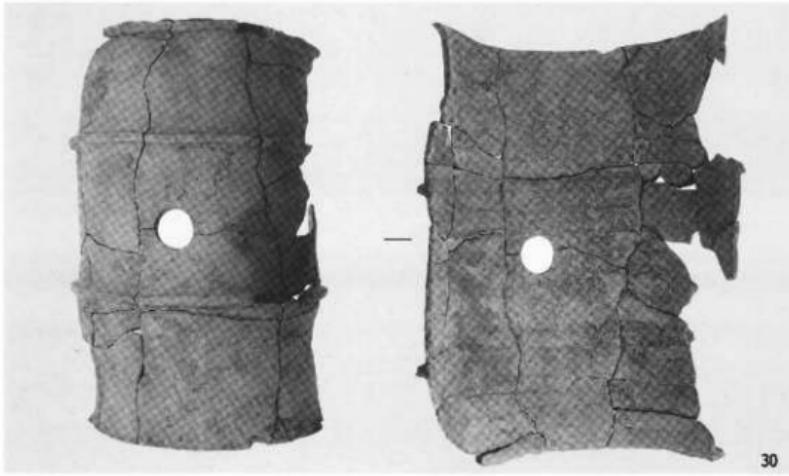
3区 第3次面SD303遺物出土状況(西から)



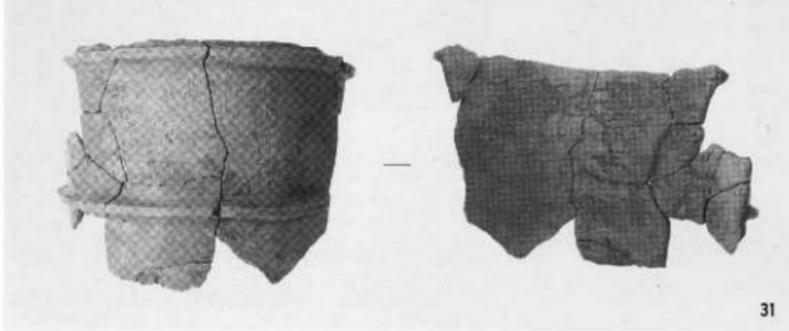
3区 第3次面SD303東壁遺物出土状況(西から)



29



30



31



39



44



41



45



42



53



43



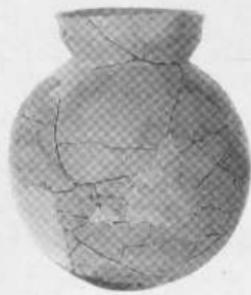
46

47

48

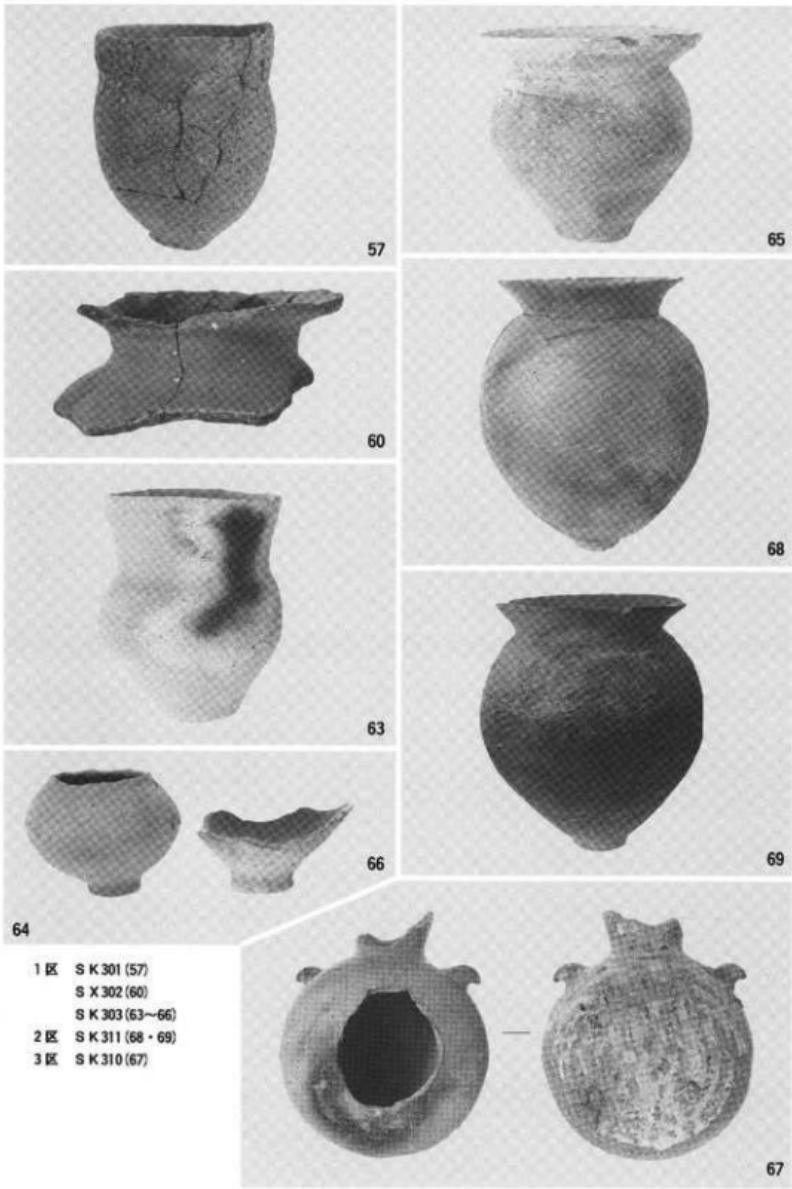
49

50



56

1区 S X 301 (56), 他は3区包含層



64

- 1 区 SK 301 (57)
SK 302 (60)
SK 303 (63~66)
2 区 SK 311 (68~69)
3 区 SK 310 (67)

67



71



78



72



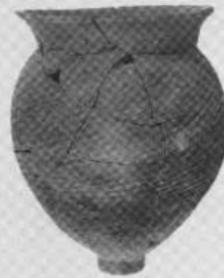
79



73



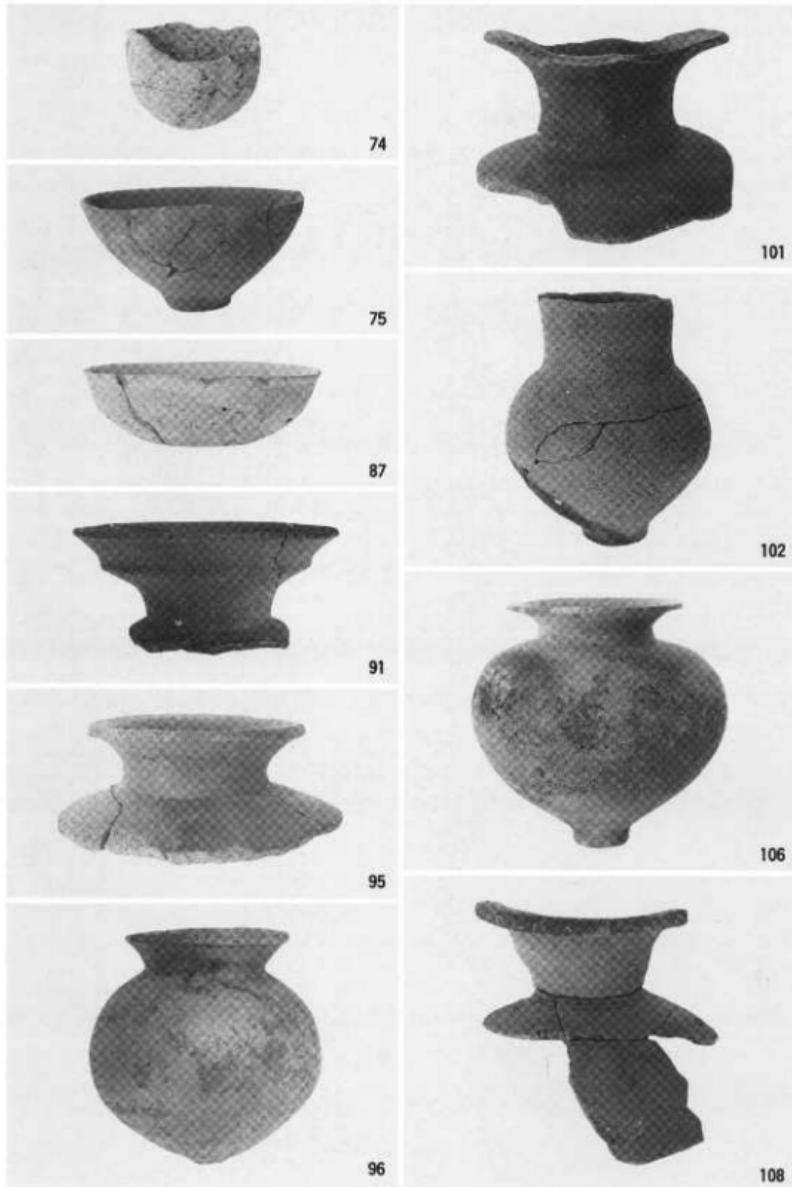
81



76



84



2区 SK311(74・75)、3区 SD301(87)、他は2区 SD303上層



110



112



115



118



119



126



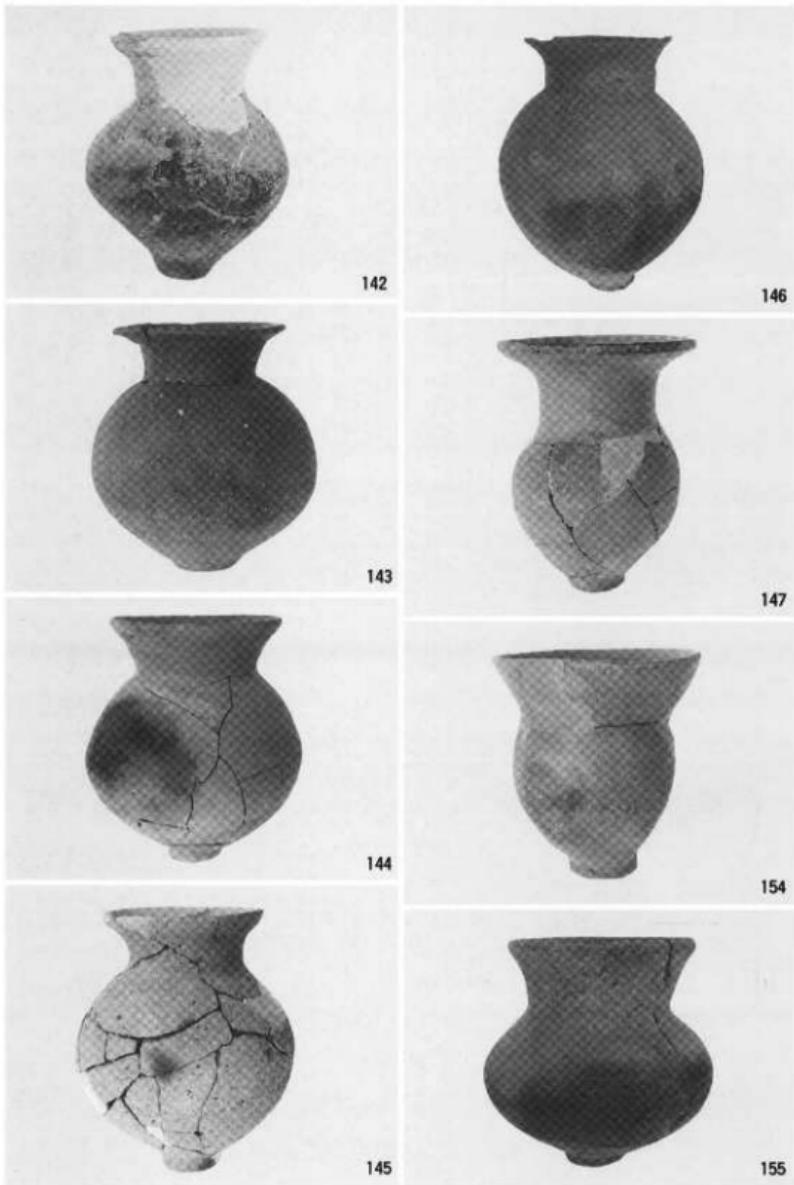
125

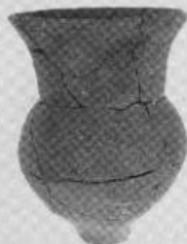


132



137





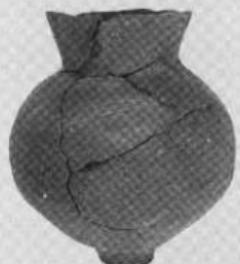
157



164



159



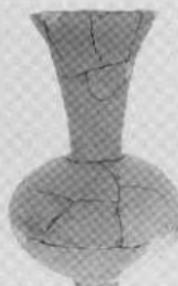
165



161



177



162



178



182



188



183



195



184



197



187



198



199



208



201



209



205



212



206



215



216



225



217



227



218



230



223



231



224



234



235



246



236



254



242



255



243



256



245



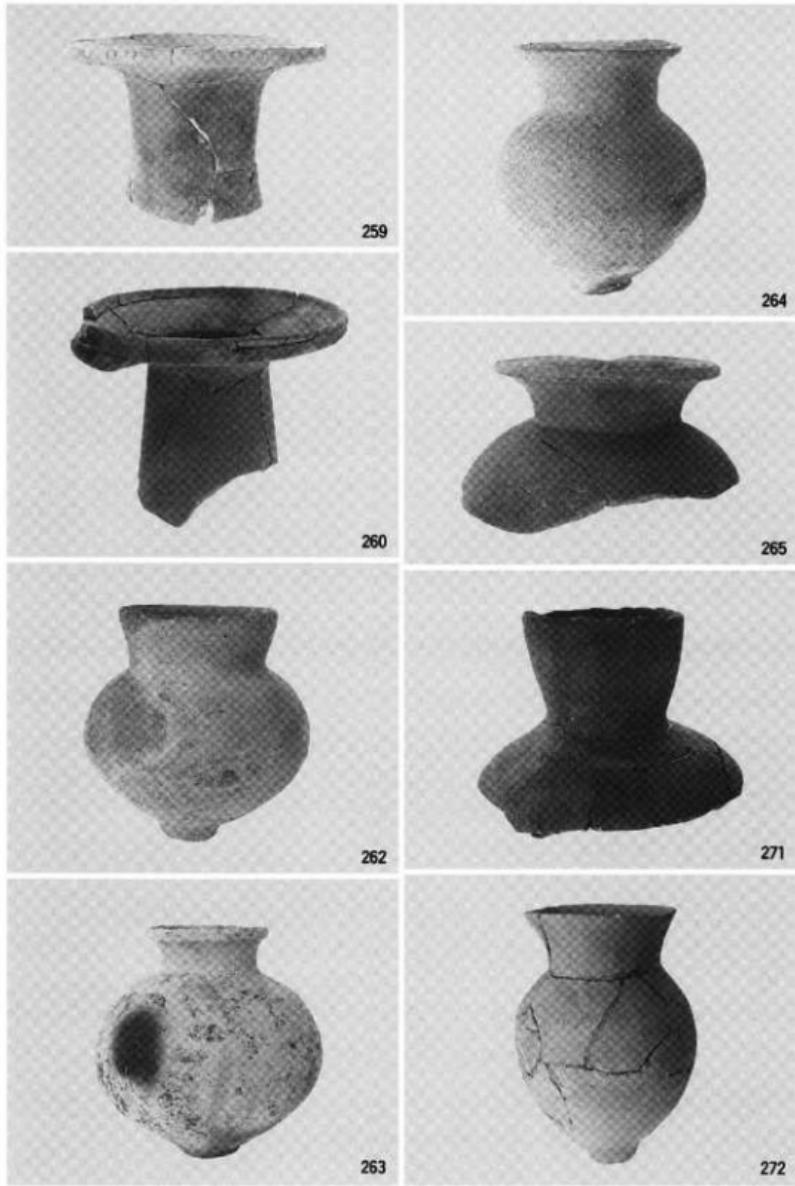
257



247



258



2区 SD 303下層(259・260)、他は3区 SD 303



277



291



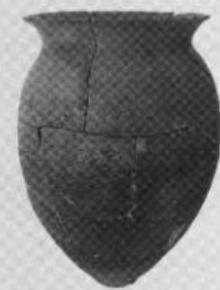
278



294



298



290



299



300



302

II 中田遺跡(N T 89-3・4)

例　　言

1. 本書は、中田遺跡内で公共下水道工事に伴い実施された発掘調査の報告書である。
1. 調査地は八尾木北4～5丁目（第3次調査）、八尾木北5丁目地内（第4次調査）である。
1. 各調査は財團法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市下水道部の委託をうけて実施したものである。
1. 各調査は、当調査研究会 坪田真一を担当者として実施した。
1. 各調査期間及び面積は、第3次調査（平成元年12月2日～2年3月31日、132m²）、第4次調査（平成元年12月12日～2年1月18日、95m²）である。
1. 現地調査には、岡田聖一・佐藤隆史・並河聰也・森本浩一の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、市森千恵子・岩本順子・坂下 学・田島和恵・都篠聰子・濱田千尋・横山妙子・若竹慶弘の参加を得た。
1. 本書の執筆、遺物写真撮影及び全体の収集は坪田が担当した。

本文目次

第1章 調査に至る経過	48
第2章 地理的・歴史的環境	48
第3章 第3次調査の概要	51
第1節 調査の方法と経過	51
第2節 1区の調査	51
第3節 2区の調査	55
第4節 3区の調査	58
第5節 まとめ	58
第4章 第4次調査の概要	59
第1節 調査の方法と経過	59
第2節 1区の調査	59
第3節 2区の調査	65
第4節 3区の調査	68
第5節 4区の調査	70
第6節 5区の調査	73
第7節 まとめ	75

挿図目次

第1図 中田遺跡調査地位置図(S = 1 / 10,000).....	49
第2図 調査区位置図(S = 1 / 2500).....	51
第3図 1区 基本層序(S = 1 / 40).....	51
第4図 1区 平・断面図(S = 1 / 80).....	53
第5図 1区 SK 2出土遺物(S = 1 / 4).....	54
第6図 1区 包含層出土遺物(S = 1 / 4).....	54
第7図 2区 基本層序(S = 1 / 40).....	55
第8図 2区 平面図(S = 1 / 80).....	56
第9図 2区 SK 4出土遺物(S = 1 / 4).....	56
第10図 2区 包含層出土遺物(S = 1 / 4 + 1 / 2).....	57
第11図 調査区位置図(S = 1 / 2500).....	59
第12図 1区 基本層序(S = 1 / 40).....	59
第13図 1区 平面図(S = 1 / 40).....	60
第14図 1区 造構出土遺物(S = 1 / 4).....	61
第15図 1区 包含層出土遺物①(S = 1 / 4).....	63
第16図 1区 包含層出土遺物②(S = 1 / 4).....	64
第17図 2区 基本層序(S = 1 / 40).....	65
第18図 2区 平面図(S = 1 / 100).....	66
第19図 2区 出土遺物(S = 1 / 4).....	68
第20図 3区 基本層序(S = 1 / 40).....	69
第21図 3区 包含層出土遺物(S = 1 / 4).....	69
第22図 3区 平・断面図(S = 1 / 40).....	70
第23図 4区 基本層序(S = 1 / 40).....	71
第24図 4区 平面図(S = 1 / 100).....	71
第25図 4区 SK 4101出土遺物(S = 1 / 4).....	72
第26図 4区 出土遺物(S = 1 / 4).....	72
第27図 5区 基本層序(S = 1 / 40).....	73
第28図 5区 平面図(S = 1 / 40).....	74

第29図 2・4区 出土遺物(S=1/2) 74

表 目 次

表1 中田遺跡及び周辺の発掘調査一覧表 50

図 版 目 次

第3次調査

図版1	1区 第1次面(南東から)	1区 第1次面 SK2(上が東)
	1区 第2次面(西から)	1区 第2次面 河川1(東から)
	2区 全景(東から)	2区 下層調査(東から)
図版2	1区・2区出土遺物	
図版3	2区出土遺物	

第4次調査

図版4	1区 北半部(南から)	1区 南半部(北から)
	1区 SK1102(北から)	2区 第1・2次面(北から)
	3区 全景(北から)	3区 SO3101東壁(西から)
図版5	4区 第1次面全景(南から)	4区 第1次面SK4101(西から)
	4区 第2・3次面全景(南から)	4区 第3次面SK4301(西から)
	4区 遺物出土状況(南から)	5区 全景(南から)
図版6	1区出土遺物	
図版7	1区・2区出土遺物	
図版8	1区・2区・4区出土遺物	
図版9	1区・2区・4区出土遺物	

第1章 調査に至る経過

中田遺跡は、昭和45年より行われた八尾都市計画曙川北土地区画整理事業に伴って発見された遺跡である。昭和46年に大阪府教育委員会により最初の発掘調査が行われ、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・当調査研究会・大阪府教育委員会により発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代前期から中世に至る複合遺跡であることが確認されている。

このような情勢下、八尾市下水道部から、当遺跡内の下水道工事計画の通知が、八尾市教育委員会文化財室に提出された。これを受けた市教委では、当該地が周知の遺跡範囲内にあることから、発掘調査が必要であると判断した。こうして同文化財室・下水道部・当調査研究会の三者間協議により、当調査研究会が主体となって発掘調査を実施することとなった。

第2章 地理的・歴史的環境

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の範囲に広がる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で欠作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

以下これまでの調査成果を、周辺の遺跡での成果もあわせて時代毎に概観してみたい。

弥生時代

前期の遺構は、遺跡の中央部付近で中段階に比定される土坑が1基確認されているのみである(④)。南東部では河川から土器が出土している(⑤)。中期では土坑(⑥⑦)及び中期後半の壺・高杯からなる壺棺(⑧)が検出されており、南側に隣接する東弓削遺跡との境付近に集中している。これらのことから前期～中期の集落域は、遺跡の南部に広がるものと考えられる。後期では北東部で後期後半の溝が検出されている(⑨)。また中期から後期末にかけての自然河川が数か所で確認されており、周辺の遺跡の調査成果とあわせて、当遺跡の南部中央付近から北西方向に流路をもつ自然河川の存在が想定されている。

古墳時代～奈良時代

古墳時代では、特に前期の遺構・遺物がほぼ全調査地で確認されており、当遺跡の最盛期であるといえる。前期初頭の遺物については良好な資料が多量に検出されており、吉備・山陰・東海など他地域からの搬入土器が多量に含まれる土坑・溝もみられ(⑩⑪)、古式土師器の研究において重要な位置を占めている。前期・中期の集落遺構は、主に北西部で検出されている

(①②③)。この集落は北側の小阪合遺跡に続くものであり、南北方向に伸びる微高地に営まれている。一方後期では明確な遺構はほとんど認められず、土坑が検出されているのみであり（⑯）、この時期に集落が断絶するようである。北西部で隣接する矢作遺跡域では掘立柱建物・溝等が検出されている（⑰⑱）。また奈良時代においても明確な遺構は確認されていないが、北西部で銅鏡「和同開珎」が出土していることから（⑲）、この周辺では古墳時代後期から続く集落が存在していた可能性がある。



第1圖 中田邊點間車物位置圖 ($S = 1/10,000$)

平安時代以降

確認された集落遺構は平安時代～鎌倉時代を中心とし、北西部で掘立柱建物・井戸（曲物・土釜・板枠・石組み）・溝・土坑が検出されている（②③④⑦⑩）。また注目すべき遺構として瓦葺集積遺構があり（①）、付近に寺院等の存在が想定されている。この地域の字名に「善坊寺」・「地蔵堂」・「薬師堂」等の寺院に関すると思われる地名が残っていることからも、その可能性は高いといえよう。なお出土した瓦には奈良時代のものも認められ、奈良時代まで遡る寺院の存在も考えられる。室町時代では建物と溝を伴う土壙（②）・桶積みの井戸（⑦）が検出されている。

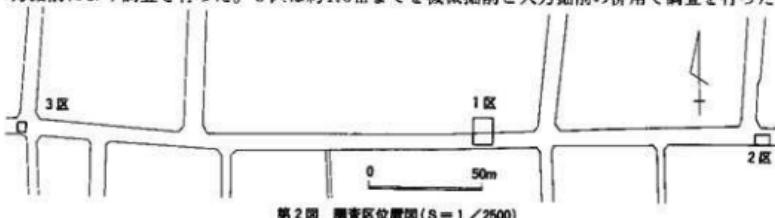
番号	調査主体	調査期間	文 獻	
①	大阪府教育委員会	46年2月～46年3月	中田遺跡発掘調査概要	
②	中田遺跡調査会	47年10月～48年3月	中田遺跡<北区>発掘調査概要	
③	中田遺跡調査会	48年5月～48年9月	中田遺跡<南北>発掘調査概要	
④	中田遺跡調査センター	48年11月～49年1月	中田遺跡：中田遺跡調査報告Ⅰ 1974	
⑤	八尾市教育委員会	49年7月～49年9月	中田遺跡：中田遺跡調査報告Ⅱ 1975	
⑥	八尾市教育委員会	50年12月～51年3月	東河原遺跡 1976	八尾市文化財調査報告 3
⑦	八尾市教育委員会	51年9月～51年10月	昭和51・52年度 墓塚文化財発掘調査年報 1979	八尾市文化財調査報告 4
⑧	八尾市教育委員会	53年4月	昭和53・54年度 墓塚文化財発掘調査年報 1981	八尾市文化財調査報告 7
⑨	八尾市教育委員会 文化財室	56年2月～56年3月	八尾市文化財紀録 2 1986	
⑩	当調査研究会	59年2月	昭和58年度事業要旨報告 1984	(財)八尾市文化財調査研究会報告 5
⑪	八尾市教育委員会	60年9月	八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ 1987	八尾市文化財調査報告 15
⑫	大阪府教育委員会		中田遺跡発掘調査概要 1986	
⑬	八尾市教育委員会	62年8月～62年9月	八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ 1988	八尾市文化財調査報告 17
⑭	八尾市教育委員会	62年12月～63年3月	八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅱ 1988	八尾市文化財調査報告 18
⑮	当調査研究会(第1次)	63年2月～63年3月	八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度 1988	(財)八尾市文化財調査研究会報告 16
⑯	八尾市教育委員会	63年6月	八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ 1989	八尾市文化財調査報告 20
⑰	八尾市教育委員会	元年2月	八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅱ 1990	八尾市文化財調査報告 21
⑱	八尾市教育委員会	元年9月	八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ 1990	八尾市文化財調査報告 20
⑲	八尾市教育委員会	元年10月	八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅱ 1990	八尾市文化財調査報告 21
⑳	当調査研究会(第2次)	元年10月～元年11月	八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度 1990	(財)八尾市文化財調査研究会報告 28
㉑	当調査研究会(第3次)	元年12月	今村報告	
㉒	当調査研究会(第4次)	元年12月～2年1月	今村報告	
㉓	八尾市教育委員会	2年1月	八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ 1990	八尾市文化財調査報告 20
㉔	当調査研究会(第5次)	2年11月～2年12月	平成2年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告 1991	
㉕	当調査研究会(第6次)	3年1月～3年3月	平成2年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告 1991	
㉖	当調査研究会(第7次)	3年5月	平成2年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告 1992	八尾市文化財調査報告 24
㉗	当調査研究会(第8次)	3年11月～3年12月	平成3年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告 1992	八尾市文化財調査報告 24
㉘	当調査研究会(第9次)	3年12月	平成3年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告 1992	八尾市文化財調査報告 24
㉙	当調査研究会(矢作遺跡 第1次)	61年12月～62年3月	八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度 1989 (財)八尾市文化財調査研究会報告 22	
㉚	当調査研究会(矢作遺跡 第2次)	62年10月～62年11月	八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度 1989 (財)八尾市文化財調査研究会報告 22	

表1 中田遺跡及び周辺の発掘調査一覧表

第3章 第3次調査の概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、下水道工事の立坑部分の掘削に伴うものであり、調査区は1～3区の三箇所で東西方向に並んでいる。調査面積は1区-100m²、2区-32m²である。3区についてはマンホール設置部分であり面積が狭小であることから立会調査を行った。また1区は、立坑の南側半分にすでに水道管・ガス管が埋設されているためこの部分の調査を断念し、北側半分の調査となった。各調査区の面積が狭いことから地区割は行わず、調査区の位置・方位等は工事図面を使用した。掘削は1区では地表下約1.8m、2区では約1.5mまでを機械掘削とし、以下を人力掘削により調査を行った。3区は約4.0mまでを機械掘削と人力掘削の併用で調査を行った。



第2図 調査区位置図(S=1/2500)

第2節 1区の調査

(1) 基本層序

調査区南西部の土層を基本層序とした。

TP
10m

第1層 灰茶色砂

第2層 灰褐色シルト・砂混じり粘土

第1・2層は古墳時代前期初頭・後期の遺物を少量

含んでいる。第1層は河川の堆積と考えられる。

第3層 暗茶色粘土

第4層 暗灰褐色砂混じり粘土

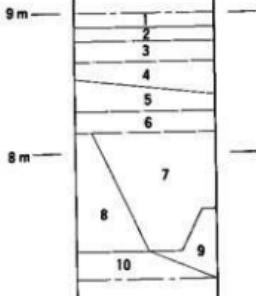
第3・4層は弥生時代中期～古墳時代前期初頭の遺物を少量含んでいる。

第5層 青灰色粘質シルト：この上面が第1次面であり
標高約8.5mを測る。

第5層は弥生時代中期の遺物を少量含んでいる。

第6層 暗褐色砂混じり粘質シルト

第7層 河川1



第3図 1区 基本層序(S=1/40)

第8層 淡青灰色粘質シルト：この上面が第2次面であり、標高約8.2mを測る。

第9層 茶灰色荒砂

第10層 暗褐色粘土

第8～10層からは遺物は全く検出されなかった。

また調査後の工事立会における下層確認によると、標高約4.7mまで青灰色系のシルト・粘土が続き、約30cmの暗灰色粘土を挟んで標高約3.2mまでは砂・砂礫層となっている。

(2) 検出遺構と出土遺物

<第1次面>

土坑2基（SK1・2）を検出した。

• SK1

調査区の北西で検出した。調査区外に統いており、平面形は不明である。規模は3.5m以上×1.8m以上、深さ約30cmを測り、断面Ⅲ状で底部は北西角でさらに約10cm落ち込んでいる。埋土は、上層が淡緑灰色砂混じり粘土、下層が暗褐色砂混じり粘土で、落ち込み部分は上層が黄灰褐色粘土混じり細砂、下層が緑灰色粘土混じり粘質シルトである。

落ち込み部分から庄内壺の体部の破片が出土しており、時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

• SK2

調査区の西辺で検出した。調査区外に統いており、また北側がSK1に削平されているため平面形は不明である。規模は1.0m以上×0.4m以上、深さ約20cmを測る。埋土は上層が暗褐色粘土、下層が緑灰色シルト混じり暗褐色粘土である。

出土遺物は壺(1)の他、壺の体部があり、時期は弥生時代中期後半と考えられる。

<第2次面>

土坑1基（SK3）、ピット6個（SP1～6）、河川1条（河川1）を検出した。

• SK3

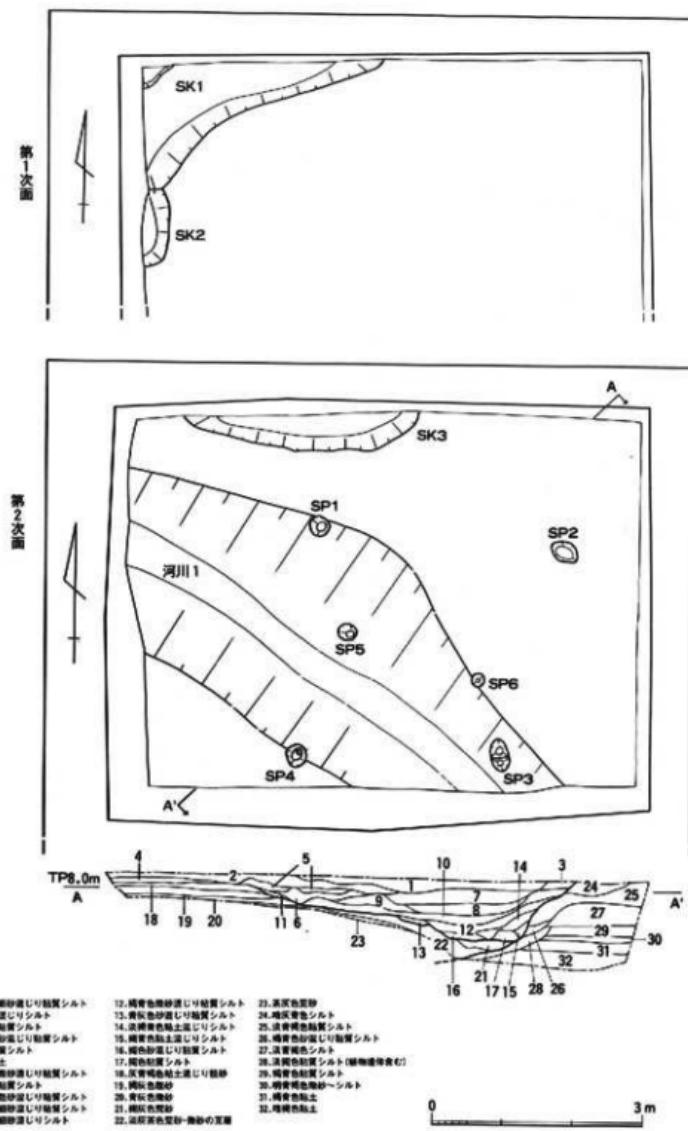
調査区の北辺で検出した。調査区外に統いており平面形は不明であるが、検出部は円弧状を呈している。規模は3.4m以上×0.5m以上、深さ約20cmを測る。埋土は上層が緑灰色粘土混じり粘質シルト、下層が灰褐色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は出土していない。

• SP1

直径約28cmの円形を成し、深さ10cmを測る。断面浅いU字形で、埋土は明緑灰色粘質シルトである。

• SP2

直径43cm×30cmの不整円形を成し、深さ20cmを測る。断面U字形で、埋土は上層が暗褐色微



第4図 1区 平・断面図 (S=1/80)

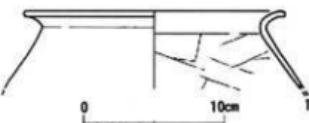
砂混じりシルト、下層が明緑灰色粘質シルトである。

• S P 3

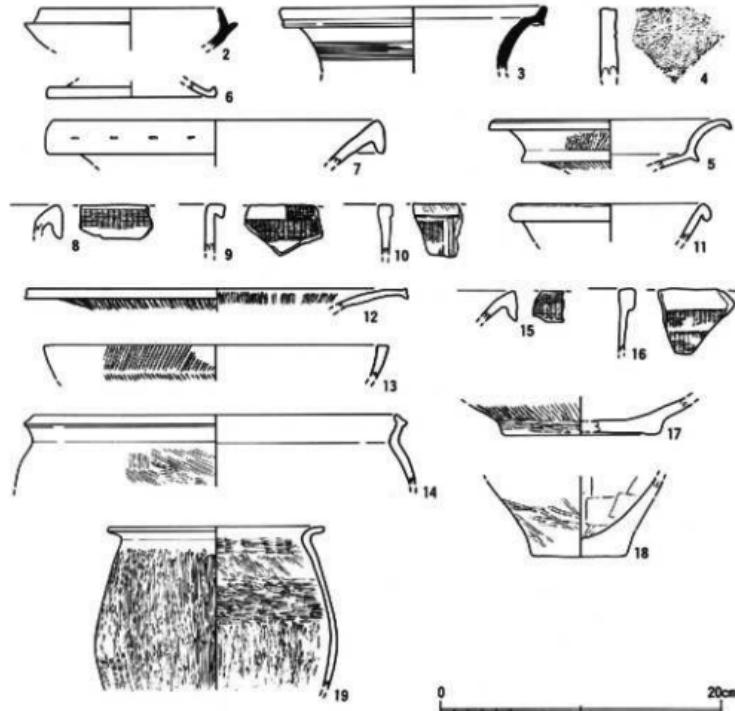
直径47cm×25cmの楕円形を成し、深さ12cmを測る。断面U字形で、埋土は暗褐色微砂混じりシルトである。二つのピットが南北に連続したものである可能性がある。

• S P 4

直径34cm×30cmの不整円形を成し、深さ10cmを測る。断面浅いU字形で、埋土は暗褐色微砂混じりシルトである。また底部北側に直径10cm×8cmの小穴をもち、柱根部とも考えられるが木質は遺存していない。



第5図 1区 SK2出土遺物(S=1/4)



第6図 1区 包含層出土遺物(S=1/4)

• S P 5

直径約25cmの円形を成し、深さ8cmを測る。断面浅いU字形で、埋土は明緑灰色粘質シルトである。

• S P 6

直径約18cmの円形を成し、深さ8cmを測る。断面浅いU字形で、埋土は明緑灰色粘質シルトである。

S P 1～6からは遺物は出土していない。これらのピットの配置から、S P 1～4を主柱穴とする四本柱の堅穴住居となる可能性がある。柱間距離は3.5m・3.1m・2.9m・3.3mとなる。上部が削平され、柱穴の下部のみが遺存しているのかもしれない。これらのピットは、河川1が埋没した後に、その上面に掘られたものである。

• 河川1

南東～北西方向の流路をもつ。検出長は約7.4mにわたり、幅2.3m～4.6m、深さ0.8m～1.0mを測る。埋土は、主に暗青灰色系の粘質シルト・シルト・砂混じりシルトで構成されている。ベースは、北側が褐灰色系の粗砂、南側が青褐色系の粘質シルトである。北側の粗砂を埋土とする、さらに規模の大きな河川が存在する可能性がある。遺物は全く出土していない。

第3節 2区の調査

(1) 基本層序

調査区央西壁の土層を基本層序とした。

第1層 暗灰色シルト質粘土

TP
10m —

第2層 暗青緑色粘土

第3層 暗青緑色粘土

第4層 暗灰色粗砂混じり粘土

9m —

第3・4層は黒灰色系の粘土で、弥生時代中期～古墳時代前期初頭の遺物を多く含んでおり、弥生時代前期の壇(34)も出土している。

1

2

3

4

5

第5層 灰青色細砂・粗砂(黒色土のブロック含む)：

8m —

西側ほど粗砂の割合が多くなる。

6

第5層は弥生時代中期の遺物を少量含んでおり、弥生時代前期の壇(35)も出土している。この上面が遺構面で、標高約8.6mを測る。

7

8

9

10

第6層 青灰色粘土

7m —

第7層 灰青色細砂混じりシルト

第7図 2区 基本層序(S=1/40)

第8層 灰色微砂

第9層 暗灰色微砂混じり粘土

第7～9層は第10・11層を切り込んで南側に落ち込んでいる。

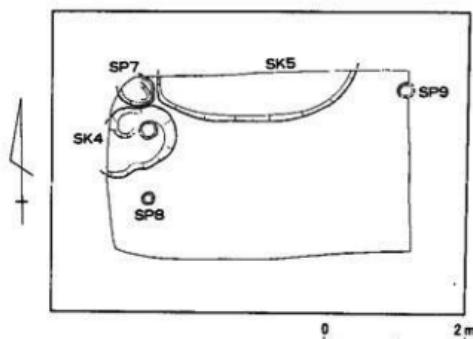
第10層 灰色細砂

第11層 灰色細砂・微砂

第12層 茶褐色シルト（植物遺体を多く含む）

第13層 灰色粗砂

第6層以下は無遺物層である。



第8図 2区 平面図 ($S = 1/80$)

(2) 検出遺構と出土遺物

土坑2基 (SK4・5)、ピット3個 (SP7～9) を検出した。

• SK4

調査区の西辺に位置し、規模は $1.0\text{m} \times 1.0\text{m}$ 以上、深さ約30cmを測り、平面形は不整円形を呈する。断面皿状で、底部は北側がピット状に落ち込んでいる。埋土は、暗灰青色微砂混じり粘土で、炭を微量含んでいる。遺物は甕(20)・鉢(21)が出土しており、時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

• SK5

調査区の北辺に位置し、規模は $2.9\text{m} \times 0.7\text{m}$ 以上、深さ約10cmを測り、検出部の平面形は円弧状を呈する。断面皿状で、埋土は灰青色微砂・細砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

• SP7

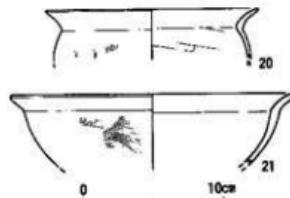
調査区の北西角に位置し、平面形は直径約40cmの円形で、深さ約30cmを測る。埋土は上から暗褐色粘土、暗青灰色微砂混じり粘土、灰青色微砂・細砂混じり粘土で、上層には炭が多量に含まれる。出土遺物は細片のみであるが、時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

• SP8

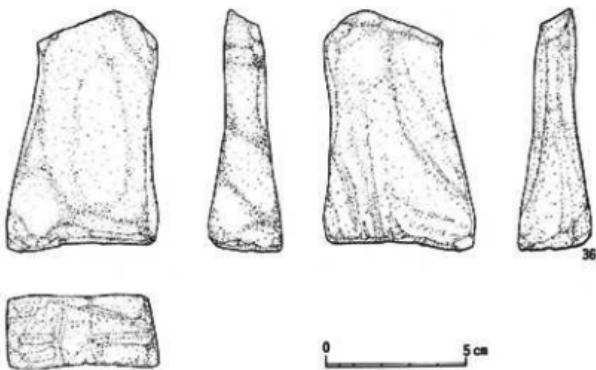
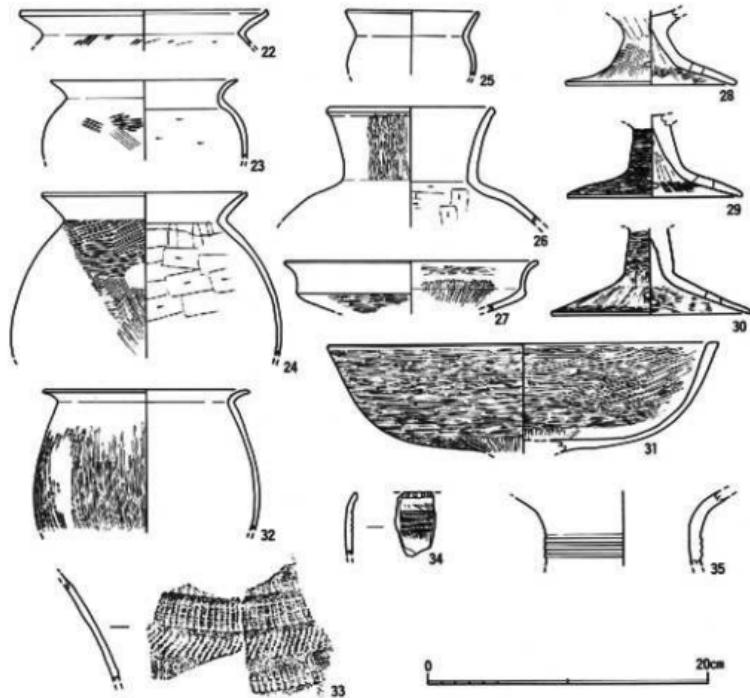
調査区の南西に位置し、平面形は直径16cmの円形で、深さ15cmを測る。埋土はSK4と同様である。

• SP9

調査区の北東角に位置し、平面形は直径20cmの円形と考えられ、深さ18cmを測る。埋土はSP8と同様である。SP8・9から遺物は出土していない。



第9図 2区 SK4出土遺物 ($S = 1/4$)



第10圖 2區 包含層出土遺物 (S=1/4 + 1/2)

第4節 3区の調査

(1) 基本層序

約GL-1.5m(標高9.0m)までは盛土等の搅乱層である。以下標高6.5mまでは厚さ約2.5mにわたって青灰色系の細砂・粗砂が堆積しており、さらにその下約0.5mは植物遺体を多く含む粘土・シルト層である。

(2) 検出遺構と出土遺物 盛土以下はその堆積状況から自然河川と考えられる。また遺物は全く出土していない。

第5節 まとめ

今回の調査では、弥生時代前期～古墳時代の遺構・遺物を検出した。

<弥生時代>

2区の第5層から前期の土器が出土しているが、当遺跡内では当時の遺構は約300m北で検出されているのみであり、前期の集落の広がりを考えるうえで重要な遺物といえる。1区では中期以前の河川、中期の遺構・遺物包含層、2区では中期の遺物包含層を検出した。中期では、南側に隣接する東弓削遺跡内において、今回の調査区から約100m以内の範囲で、壹棺・土坑が確認されている。

<古墳時代>

前期では2区で庄内式期に比定される遺構・遺物包含層を検出した。後期では1区で遺物包含層が検出され、形象埴輪の破片も認められた。

第4章 第4次調査の概要

第1節 調査の方法と経過



第11図 調査区位置図 ($S = 1/2500$)

今回の調査は、下水道工事の立坑部分について行った。調査区は5か所で約60~70m間隔で南北に連なっており、北から1~5区とした。なお1区のすぐ北側では昭和62年度に八尾市教育委員会によって調査が行われている。

各調査区の面積は左記のとおりで、調査日数は計13日間である。各調査区の面積が狭いこともあり地区割は行わず、調査位置・方位等については工事図面を使用した。掘削については、地表下約1.7m~2.6mを機械で行い、以下を層理にしたがって人力で行った。また調査後の工事立会による下層確認をできるかぎり行った。

第2節 1区の調査

- (1) 基本層序 調査区東壁の土層を基本層序とした。

第1層 暗褐色砂混じり粘質土：弥生時代中期の遺物を少量含む包含層である。

第2層 淡青灰色細砂混じり粘土

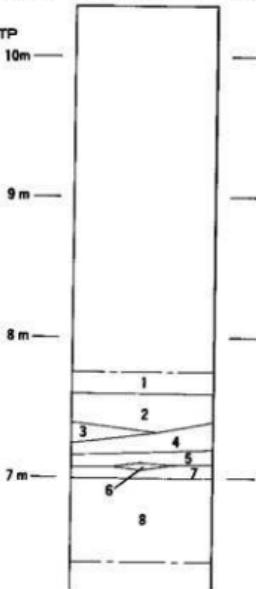
第3層 淡青褐色粘土：調査区の中央から北側にみられた。

第4層 緑灰色粘土

第2~4層には遺物は含まれていない。

第5層 暗褐色砂混じり粘土：層厚約20cmを測り、炭を含んでいる。

第6層 茶褐色粘土：部分的にではあるが調査区全体にみられた。焼土・炭を含んでおり、層厚5~10cmを測る。



第12図 1区 基本層序 ($S = 1/40$)

第7層 暗灰青色粘土～粘質シルト：南部ほどシルト質が強くなる。

第5～7層は弥生前期の包含層となっている。

第8層 暗灰青色粘質シルト：ベース層であり、この上面が弥生時代前期の遺構面で、標高約7.0mを測る。

(2) 検出遺構と出土遺物

第7層上面で土坑3基（SK1101～1103）・ピット3個（SP1101～1103）を検出した。ピットは調査区北部に集中している。

• SK1101

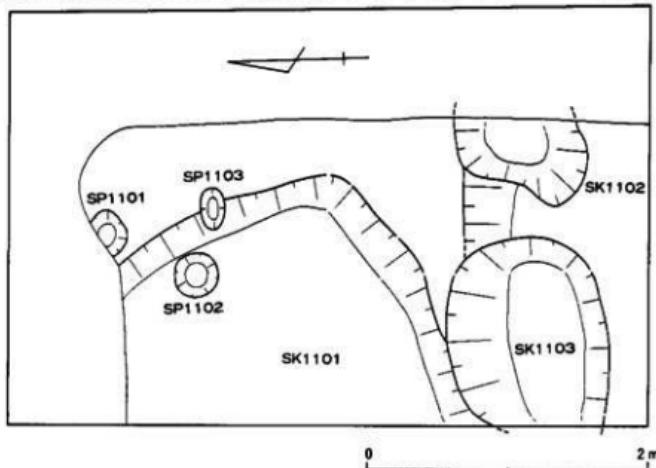
調査区中央から北西に位置する浅い落ち込み状の遺構である。調査区外に続いている。全体の平面形は不明である。規模は2.0m×2.0m以上、深さ約15cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は黒灰色粘質シルトである。出土遺物から時期は弥生時代前期中段階と考えられる。

• SK1102

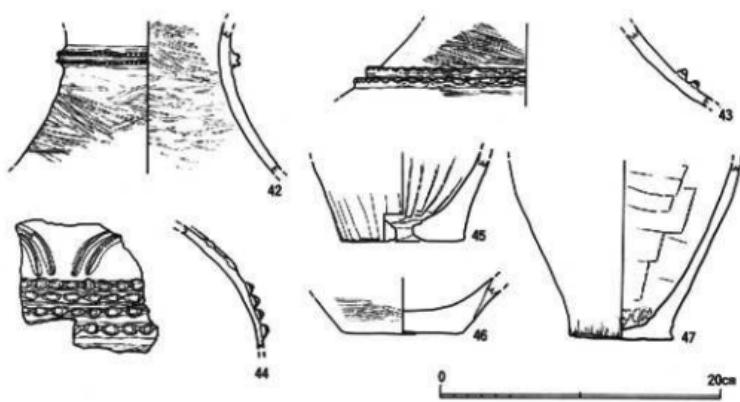
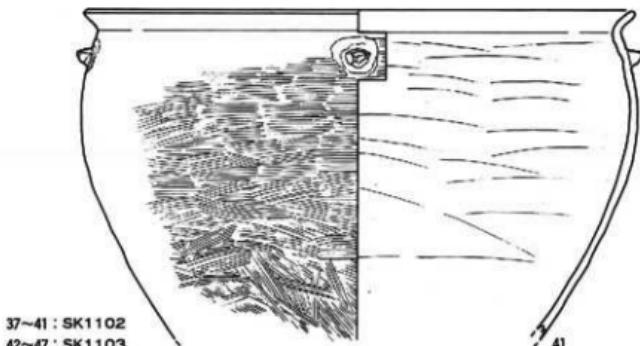
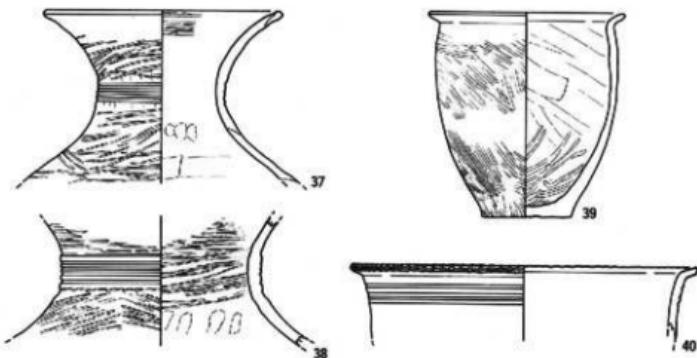
調査区の南東に位置する。平面不定形で、規模は0.95m×0.6m、深さ約20cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は暗青灰色粘土である。遺物は壺(37・38)、甕(39・40)、鉢(41)が出土しており、弥生時代前期中段階に比定される。

• SK1103

調査区の南西に位置する。平面椭円形をなし、長辺1.3m以上×短辺1.15m、深さ約40cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は暗青灰色粘土である。遺物は壺(42～44・46)、甕(45・47)



第13図 1区 平面図 (スケール1/40)



第14図 1区 造構出土遺物 ($S=1/4$)

が出土しており弥生時代前期中段階に比定される。

• S P 1101

平面形は直径約30cmの不整円形を呈し、深さ15cmを測る。埋土は茶褐色粘土である。

• S P 1102

平面形は直径約30cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。埋土は茶褐色粘土である。

• S P 1103

平面形は30cm×18cmの楕円形を呈し、深さ37cmを測る。中央やや西寄りに直径約6cmの柱根が遺存していた。埋土は茶褐色粘土である。

各ピットからは遺物は出土していない。

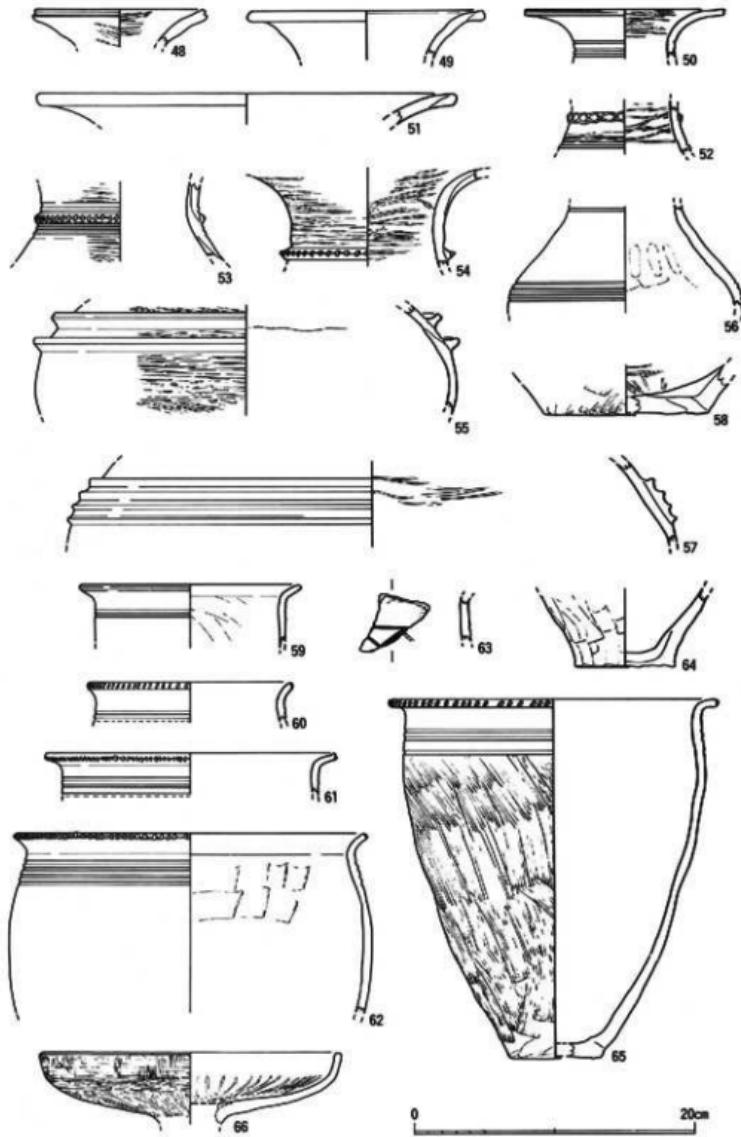
(3) 出土遺物について

1区の調査では弥生時代前期中段階に比定される土坑と、この遺構面を覆う包含層が検出され、それに伴い土器・石器も豊富に出土している。

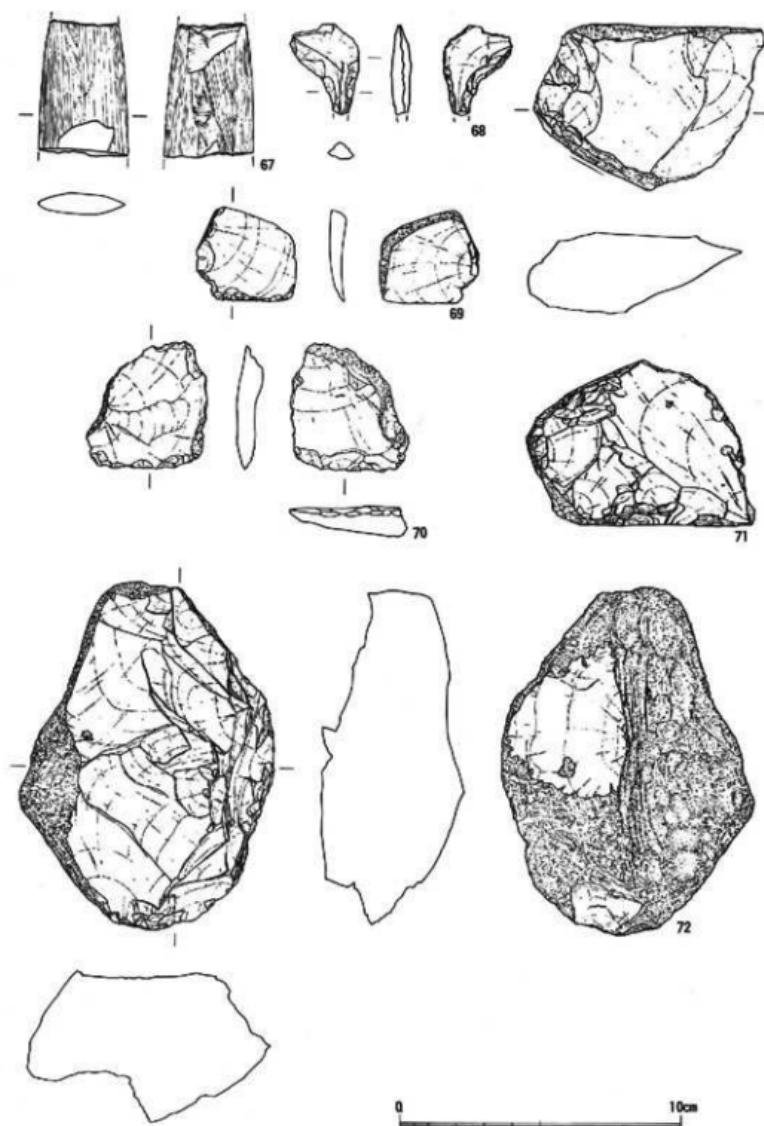
S K 1102-壺では37・38がある。37は頸部に4条の箝捕沈線を巡らし、38は幅の広い削出突帯の上面に4条の箝捕沈線を巡らす。壺には39・40がある。39は小型で無文のもので、底部内面にはヘラミガキが施されている。40は口縁端部に割み目、口縁直下に3条の箝捕沈線を施す。胴部の張らないタイプと考えられる。41の鉢は口径39.6cmを測る大型のもので、外面の調整は目の荒い板ナデである。口縁直下におそらく2個1対の瘤状突起を付す。

S K 1103-壺では42・43・44・46がある。42は頸部の長いタイプである。頸部に1条の貼付け突帯を巡らせ、外端面に1条の箝捕沈線を巡らせたのちその上下に細かい刻み目を施すことにより、一見2条の突帯のように見える。上下の刻み目は同時に施されている。43は肩部に2条の貼付け突帯を巡らせ、指頭圧痕による幅の広い刻み目を施す。44は肩部に2条の貼付け突帯を巡らせる。上段の突帯は幅が広く、42と同様外端面に2条の沈線を巡らせることにより、一見3条のように見え、計4条の突帯となっている。それぞれに指頭圧痕による幅の広い刻み目を施している。またこの上位に、下に開く2重の弧文と思われる装飾が、貼付け突帯によって施されている。この装飾の欠落部には目印のための沈線が観察できる。45は底部穿孔壺で、穿孔は焼成後のものである。底部に擦痕が遺存している。

包含層-壺(48~57)と壺(59~65)がある。52は小型の壺で、頸部に貼付け突帯、頸部体部間に削出突帯を巡らせるものである。貼り付け突帯には指頭圧痕による刻み目が施される。53は頸部に幅の広い削出突帯を巡らせ、その上面に箝による刻み目をもつ貼付け突帯と3条の箝捕沈線が施されている。54は外面の全面に赤彩が施されており、橙色を呈する。55は肩部に2条の高い貼付け突帯を巡らせる。胎土が他と異なり暗灰色を呈しており搬入品の可能性がある。57は肩部に幅の広い貼付け突帯を巡らせ、上面に3条の横ナデによる凹線を施す。壺はいずれ



第15図 1区 包含層出土遺物①(S=1/4)



第16図 1区 包含層出土遺物①($S=1/2$)

も口縁部直下に2~4条の沈線を巡らせるもので、口縁端部は59が無文、他は刻み目が施されている。

石器では磨製石剣(67)・石錐(68)・削器(69~71)・石核(72)の他剝片が出土している。

以上が1区出土遺物の概要である。

S K 1102とS K 1103の出土遺物を比較した場合、壺についてみるとS K 1102出土のものには貼付け突帯を施すものが破片中にも認められない。このことから、個体数が少ないため断言はできないが、S K 1102がやや時期が遅る可能性が高いといえよう。

第3節 2区の調査

(1) 基本層序 調査区東壁の土層を基本層序とした。

第1層 灰褐色粘土・シルト・微砂の互層：河川堆土の

状況を呈している。出土遺物から古墳時代前期初頭の
河川と考えられる。

第2層 青灰色粘土

第3層 黒灰色粗砂・荒砂混じり粘土：調査区北側ほど
砂が多く含まれる。

第2・3層は調査区全体にみられ、弥生時代中期～
古墳時代前期初頭の遺物を少量含んでいる。

第4層 灰褐色砂混じり粘質シルト：この上面が第1次
面で、標高約8.15mを測る。

第5層 暗灰青色砂混じり粘質シルト：調査区北側にみ
られた。この上面が第2次面であり、標高約8.0mを
測る。

第4・5層は弥生時代中期の遺物を少量含んでいる。

第6層 暗青灰色粘質シルト：ベース層で、この上面が
第3次面であり、標高約7.9mを測る。

第7層 棕色粘土：植物遺体を多量に含んでいる。

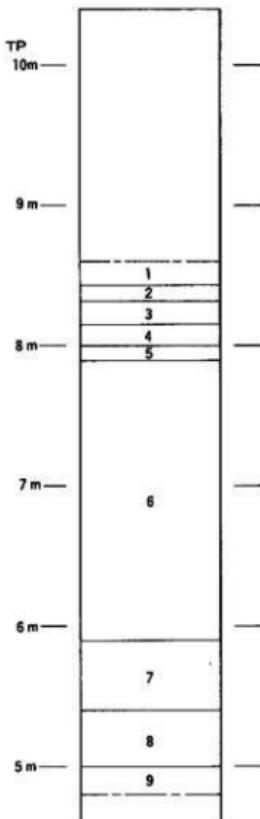
第8層 緑灰色砂

第9層 茶灰色粘土

(2) 検出遺構と出土遺物

<第1次面>

溝1条(S D 2101)・土坑1基(S K 2101)・ピット6 第17図 2区 基本層序(S=1/40)



個（SP2101～2106）を検出した。ピットは調査区南端に集中している。

• SD2101

ほぼ東西方向にのびる溝で、検出長約3.0mを測り、調査区外に続いている。幅30～40cm、深さ約5cmで、断面皿状を呈する。埋土は暗褐色砂混じり粘土である。

遺物は細片のみで、時期は不明である。

• SK2101

調査区東半に位置し、調査区外に続く。平面不定型で、規模は5.0m以上×1.0m以上、深さ約30cmを測る。埋土は上層が緑灰色砂混じり粘土、下層が緑灰色粘質シルトである。

遺物は、弥生土器の底部（81）が出土している。

• SP2101

直径約45cm・深さ約7cmを測り、埋土は暗緑灰色砂混じり粘土である。南側をSD2101によって削平されている。

• SP2102

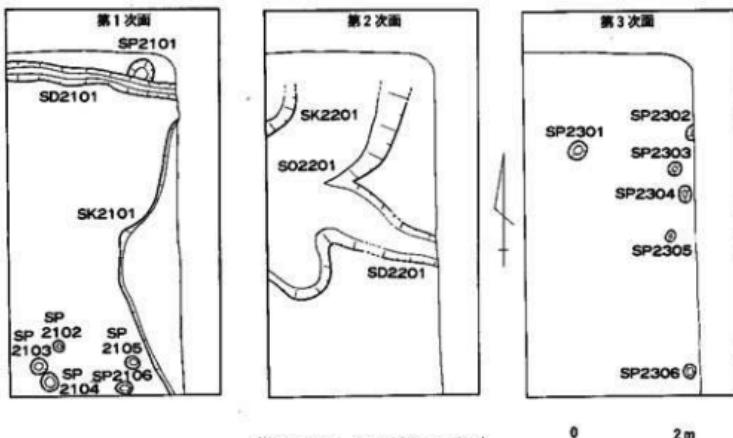
直径約20cmの円形で、深さ16cmを測り、埋土は暗緑灰色荒砂混じり粘土である。

• SP2103

直径約30cmの円形で、深さ35cmを測り、埋土は上から暗緑灰色荒砂混じり粘土・緑灰色砂混じり粘質シルト・暗緑灰色粗砂混じり粘土である。

• SP2104

直径約32cmの円形で、深さ40cmを測り、埋土はSP2102と同様である。



第18図 2区 平面図 (S=1/100)



• S P 2105

直径30cm×24cmの楕円形で、深さ5cmを測り、埋土は暗緑灰色砂混じり粘土である。

• S P 2106

直径26cm×22cmの楕円形で、深さ18cmを測り、埋土は上層が暗緑灰色砂混じり粘土、下層が緑灰色粘土である。

各ピットからは遺物は出土していない。

<第2次面>

土坑1基(S K 2201)・溝1条(S D 2201)・落ち込み1基(S O 2201)を検出した。

• S K 2201

調査区西北角に位置し、調査区外に続く。平面形は不明で、規模は1.5m以上×0.5m以上・深さ約25cmを測る。埋土は上層が暗灰褐色粘質シルト混じり荒砂、下層が暗青灰色砂混じり粘質シルトである。埋土の状況から流路の痕跡とも考えられる。遺物は出土していない。

• S D 2201

調査区中央に位置し、東西方向に伸びる溝で約2.0mにわたって検出した。西側でS O 2201と接続し、東側は調査区外に続く。S O 2201との切り合い関係等は不明である。幅0.5m~1.1m・深さ5cm~10cmを測り、断面皿状を呈し、埋土は暗褐色砂混じり粘質シルトである。遺物は出土していない。

• S O 2201

調査区北西に位置し、調査区外に続く。平面形は不明で、規模は2.4m以上×4.0m以上・深さ15~30cmを測る。埋土は上層が暗緑灰色砂混じり粘質シルト、下層が緑灰色粘質シルトである。遺物は弥生土器の底部(82)の他、石器では石剣の未製品(99)が出土している。

<第3次面>

ピット6個(S P 2301~2306)を検出した。

• S P 2301

S O 2201の底部で検出した。直径30×35cmのほぼ円形で、深さ20cmを測り、埋土は緑褐色砂混じり粘質シルトである。

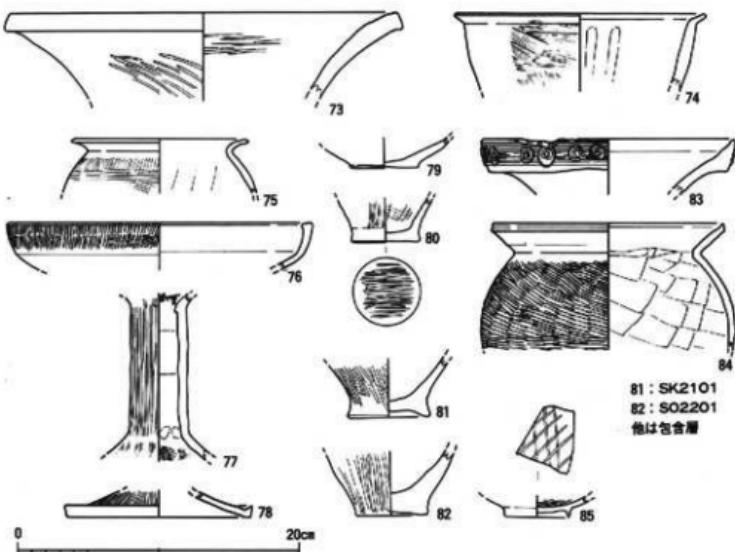
• S P 2302

直径約30cmの円形と考えられる。深さ約8cmを測り、埋土は青褐色砂混じり粘土である。遺物は細片のみで時期は不明である。

• S P 2303

直径25cmの円形で、深さ12cmを測り、埋土は青褐色砂混じり粘土である。

• S P 2304



第19回 2区 出土遺物 (S=1/4)

直径20×30cmの楕円形で、深さ16cmを測り、埋土は青褐色砂混じり粘土である。

• S P 2305

直径18×21cmのほぼ円形で、深さ14cmを測り、埋土は青褐色砂混じり粘土である。

• S P 2306

S K 2201の底部で検出した。直径26×23cmのほぼ円形で、深さ14cmを測り、埋土は上層が暗緑灰色砂混じり粘土、下層が緑灰色粘土である。

S P 2301・2303～2306からは遺物は出土していない。

第4節 3区の調査

(1) 基本層序 調査区東壁の土層を基本層序とした。

第1層 灰青色粘土：西部では荒砂混じりの粘土となっている。

第2層 灰青色粘質シルト

第3層 暗灰青色粗砂混じり粘質シルト

第1～3層はほぼ水平堆積を呈しており、弥生時代中期・古墳時代前期初頭・平安時代末の遺物を少量含んでいる。

第4層 淡灰黄色粘土混じり細砂：ベース層で、この上面が造構面で、標高約8.35mを測る。

第5層 明黄褐色粗砂

第6層 淡黄褐色粗砂・細砂

第7層 暗褐色粘土：植物遺体を多く含む。

(2) 検出遺構と出土遺物

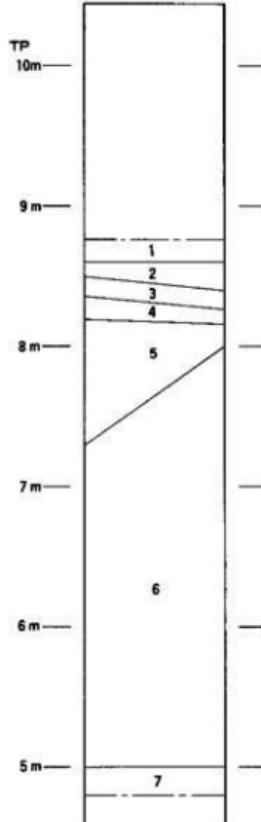
第4層上面で落ち込み1基(SO3101)を検出した。

• SO3101

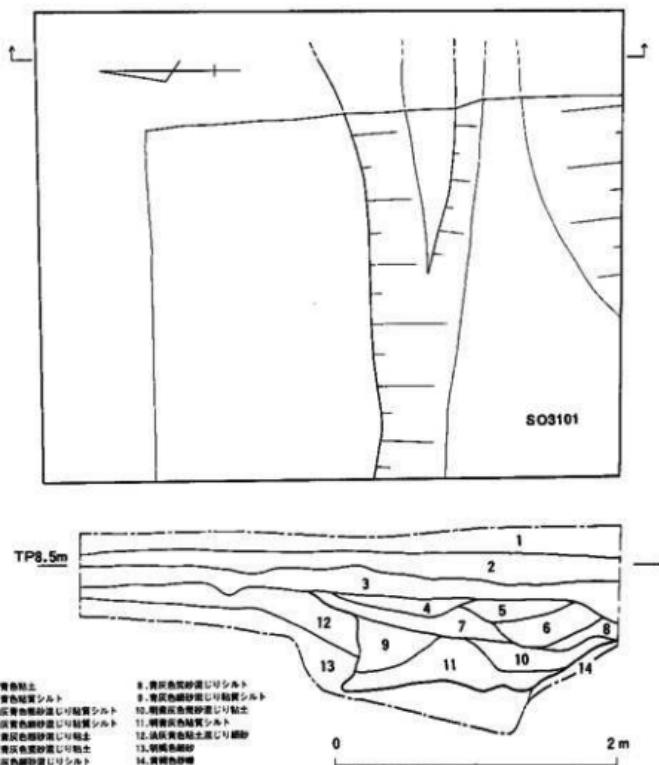
調査区の南半分を占めており、調査区外に続いている。全体の平面形は不明であるが、掘形北辺はほぼ東西方向の直線的なものである。検出部の規模は3.3m×2.0m・深さ約0.8mを測る。埋土は青灰色系の粘土・粘質シルト・シルトで構成されている。掘方をみると、平坦な底部から北側にはほぼ垂直に立ち上がり、南側はなだらかに立ち上がりつてゆくようである。東西方向の溝とも考えられる。遺物は全く出土していない。



第21図 3区 包含層出土遺物(S=1/4)



第20図 3区 基本層序(S=1/40)



第22図 3区 平・断面図 (S=1/40)

第5節 4区の調査

(1) 基本層序 調査区西壁の土層を基本層序とした。

第1層 灰青色微砂混じり粘土

第2層 明青灰色粘土

第3層 暗青灰色砂混じり粘土

第4層 暗褐青色荒砂混じり粘土：この上面が第1次面であり、標高約8.5mを測る。

第5層 青灰色砂混じり粘土

第6層 青灰褐色粘質シルト：この上面が第2次面であり、標高約8.2mを測る。

第7層 明青灰色粘土：ベース層で、この上面が第3次面であり、標高約7.9mを測る。

第8層 青灰色粘土～シルト

第9層 淡黄褐色粗砂

(2) 検出遺構と出土遺物

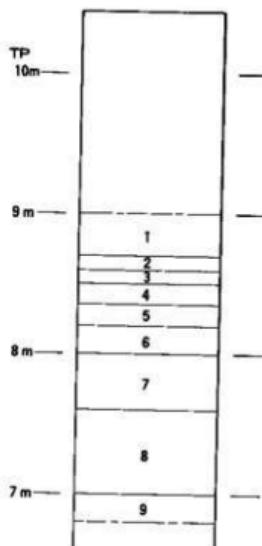
<第1次面>

土坑2基(SK4101・4102)を検出した。

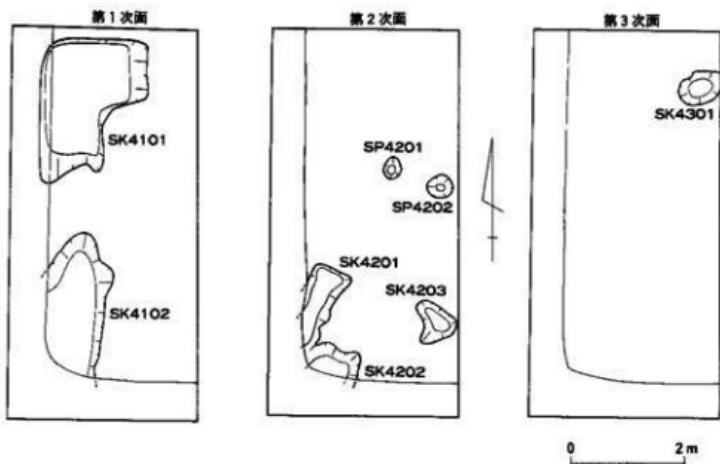
• SK4101

調査区の北西で検出した。平面不定型であるが、西肩部は掘溝掘削時に削平しており、調査区外には続かない。規模は2.6m×1.7m以上で、深さ0.5mを測る。断面は浅いU字形をなし、埋土は上から灰褐色粗砂・明灰褐色細砂・綠褐色粘質シルト(植物遺体を含む)・灰褐色細砂・褐灰色疊混じり荒砂が皿状の堆積を呈している。これらの状況から流路の一部、あるいは凹み部分と考えられる。

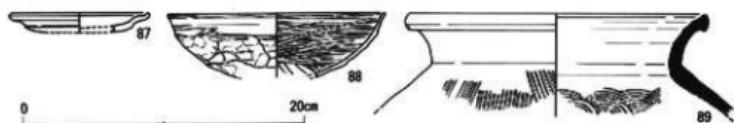
遺物は、土師質皿(87)、瓦器椀(88)、須恵器壺(89)が出土しており、時期は平安時代後期と考えられる。また東肩部付近から、獸骨一点(馬か牛。図版8.)が出土しており、上層の第3層からは獸歯も出土している。



第23図 4区 基本層序(S=1/40)



第24図 4区 平面図(S=1/100)



第25図 4区 SK 4101出土遺物(S=1/4)

• SK 4102

調査区の南西で検出した。平面形は不明で、調査区外に続いている。規模は2.5m以上×1.0m以上・深さ約15cmを測る。埋土は暗褐色砂混じり粘土である。遺物は出土していない。

<第2次面>

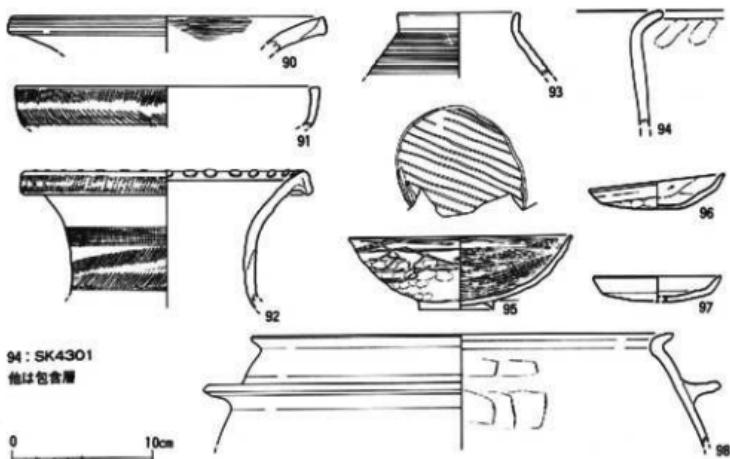
土坑3基(SK 4201～4202)、ピット2個(SP 4201・4202)を検出した。

• SK 4201

調査区の南西で検出した。平面形は不明で、調査区外に続いている。規模は1.5m以上×0.7m以上・深さ約30cmを測る。埋土は上層が暗褐色粘土、下層が暗褐青色砂混じり粘土である。遺物は細片のみで時期は不明である。

• SK 4202

調査区の南西で検出した。平面形は不明で、調査区外に続いている。規模は0.7m以上×0.9m以上・深さ約20cmを測る。埋土は暗褐青色砂混じり粘土である。北側でSK 4201と連続しているが、切り合い関係は不明である。遺物は出土していない。



第26図 4区 出土遺物(S=1/4)

• S K 4203

調査区の南東で検出した。平面不定形で、規模は $0.7m \times 0.8m$ ・深さ約30cmを測る。埋土は上から暗灰青色砂混じり粘土・青灰色粘土・暗灰青色細砂混じり粘土である。遺物は細片のみで時期は不明である。石器では削器(101)が出土している。

• S P 4201

直径40cm×30cmの不整円形を成し、深さ約15cmで、埋土は淡緑灰色粘土混じり荒砂である。

• S P 4202

直径42cm×46cmのほぼ円形を成し、深さ約26cmで、埋土はS P 4201と同様である。

ピットからは遺物は出土していない。

<第3次面>

土坑1基(S K 4301)を検出した。

• S K 4301

調査区の北東で検出した。直径0.8m以上×0.6mの楕円形を成し、深さ約12cmを測る。また底部に直径15cm×10cm、深さ12cmの小穴を有している。断面皿状を呈し、埋土は黒色粘質シルトの単層で、これは炭層と考えられる。なおこの炭層は、遺構の周辺にも広がっていた。遺構の性格は不明であるが、住居等に伴うものと考えられる。遺物は甕(94)が出土している。

第6節 5区の調査

(1) 基本層序 調査区東壁の土層を基本層序とした。

第1層 灰色粘土

第2層 暗灰青色シルト：この上面が遺構面で、標高約
8.5mを測る。

第3層 淡灰青色砂混じりシルト

第4層 青灰色荒砂混じりシルト

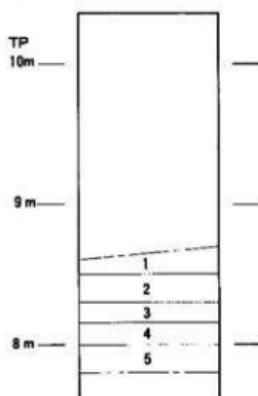
第5層 淡黄褐色粗砂

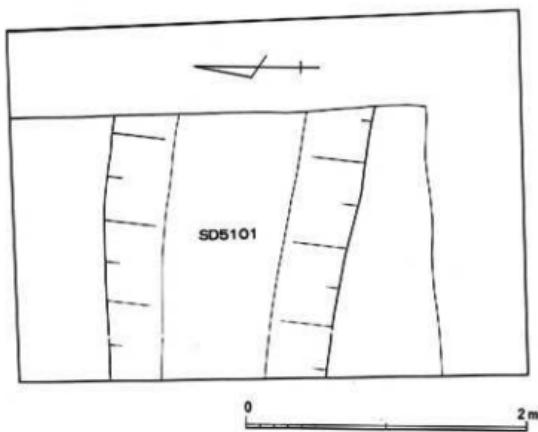
(2) 検出遺構と出土遺物

第2層上面で溝1条(S D 5101)を検出した。

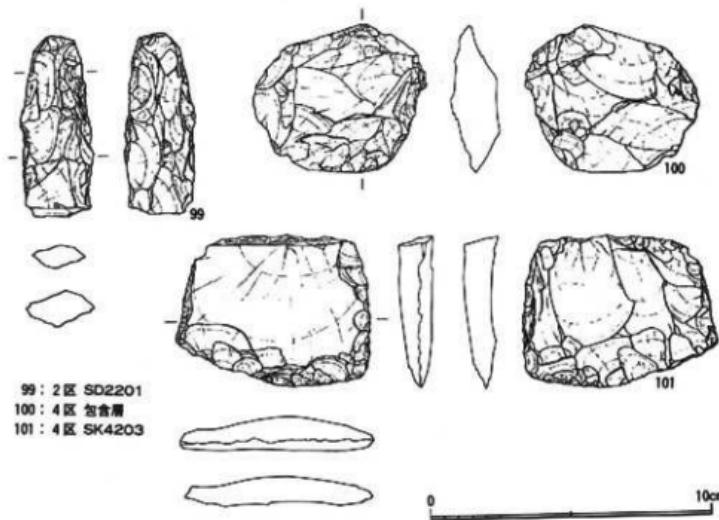
• S D 5101

調査区中央で検出した東西方向の溝である。幅1.6m～
1.9m・深さ約0.4mを測る。底部は起伏があり、埋土は上
層が暗灰色系の砂混じり粘土、下層が暗灰色系の粘質シル
トである。自然流路と考えられる。遺物は出土していない。





第28図 5区 平面図 (S = 1 / 40)



第29図 2・4区 出土遺物 (S = 1 / 2)

第7節　まとめ

今回の調査では弥生時代前期から平安時代の遺構・遺物を検出した。各調査区の面積が狭く、不明な点が多いことは否めない。しかしながら調査範囲は南北約250mにわたっており、各時期の遺跡の広がりを確認するうえで貴重な資料を得ることができた。

弥生時代前期では1区でのみ遺構・包含層が検出され、土器・石器が出土している。北側に隣接する調査地でも同時期の遺構が検出されている。この集落域は2区より南には広がらないと考えられる。

弥生時代中期では1・2・3・4区で土器・石器が出土している。遺物の出土状況から標高8m前後に、広範囲に集落が営まれていたと考えられる。

弥生時代後期から古墳時代前期では2区で土器が出土している。既往の調査により、この時期は当遺跡の集落の最盛期であることが確認されているが、今回の調査での成果はこれに合致していないといえる。

平安時代後期では4区で遺構・遺物が検出された。当遺跡内では主に遺跡の北西部で遺構・遺物が検出されている。

註

- ・助大阪文化財センター「山賀(その3)」1984 図版九一に類似する土器が掲載されている。写真を見るかぎりでは、貼付け突部に刻み目が無く、装飾の重乳文の天地が逆で上に向いている。

参考文献

- ・八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅱ」1988

第5章 出土遺物観察表

第3次調査

土器

遺物番号 団体番号	器種	出土地点	法算 (cm)	口徑 基高	色調 外内	胎土	焼成	技術・形態の特徴	備考 残存率
1 2	茶 碗	1区 SK 2	18.7	5.7	茶褐	密・0.2~1mm の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部は外面ナデ、内面ナデ。 L1縁1/6	反転
2	調度器 杯身	1区 包含層 受部径15.2	12.7 2.9	5.7	淡青灰	やや粗・0.2~1mmの砂粒含む	良好	口縁ナデ。	反転 L1縁1/6
3 2	調度器 要	1区 包含層	19.1 4.6	5.7	淡青灰	密・0.2~2mm の砂粒含む	良好	回転ナデ。 器底外側回転カキ目。	反転 L1縁1/8
4 2	埴輪	1区 包含層	5.0 厚さ 1.8	5.7	暗黄灰	密・0.2~2mm の砂粒含む	良好	外面ハケのち沈線文。端部・内面ナデ。	極小
5	土器器 要	1区 包含層	17.4 3.5	5.7	黄褐	密・0.2~1mm の砂粒含む	良好	外周縦方向のヘラミガキ。内面ナデ。	反転 L1縁1/4
6	弥生 高杯	1区 包含層 底径 11.2	1.1	暗褐	密・0.2~1mm の砂粒含む	良好	内外面ヨコナデのち、外周部分に縱方向のヘラ ミガキ。	反転 極小	
7 2	弥生 豆	1区 包含層	24.5 3.2	5.7	淡褐色	密・0.2~2mm の砂粒・小石 含む	良好	内外面ヨコナデ。 口縁部外面に刻文文。	反転 L1縁1/8
8	弥生 煮	1区 包含層	2.4	茶灰	密・0.2~3mm の砂粒含む	良好	内外面ヨコナデ。 口縁部外面に横筋縫状文。	極小	
9	弥生 台付鉢?	1区 包含層	3.6	黄褐 暗褐	密・0.2~3mm の砂粒含む	良好	口縁部方向のヘラミガキ。 外周横縫状文。	極小	
10 2	弥生 台付鉢?	1区 包含層	3.8	茶灰	密・0.2~2mm の砂粒含む	良好	内面ヨコナデ。 外周横縫状文のち突審文。	極小	
11	弥生 要	1区 包含層	14.4 2.7	暗褐	密・0.2~2mm の砂粒含む	良好	内外面ヨコナデ。	反転 極小	
12	弥生 高杯	1区 包含層	27.6 1.5	黄褐	密・0.2~2mm の砂粒含む	良好	内外面ヨコナデのち、縦方向のヘラミガキ。	反転 極小	
13 2	弥生 高杯	1区 包含層	24.6 2.5	茶褐	密・0.2~1mm の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。 口縁外側ヘラによる斜め方向の直線文。	反転 極小	
14 2	弥生 要	1区 包含層	27.6 5.0	暗褐	密・0.2~2mm の砂粒多く 含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部は外周ハケ。内面ナデ。	反転 極小	
15	弥生 豆	1区 包含層	2.2	淡灰茶	密・0.2~1mm の砂粒含む	良好	内外面ヨコナデ。 口縁部外面に横筋縫状文。	極小	
16 2	弥生 台付鉢?	1区 包含層	4.7	褐灰	密・0.2~1mm の砂粒含む	良好	内外面ヨコナデ。 体部外面に横筋縫状文。	極小	
17	弥生 要	1区 包含層 底径 11.3	2.7	暗褐	密・0.2~2mm の砂粒多く 含む	良好	外側は、体部斜め方向、作形・底部斜め方向のヘ ラミガキ。底部ナデ。内面ナデ。	反転 底径1/4	
18 2	弥生 要	1区 包含層 底径 6.5	5.7	褐灰	密・0.2~2mm の砂粒多く 含む	良好	外側は体部ヘラミガキ、底部ナデ。内面ナデ。	底辺完存	
19 2	弥生 要	1区 包含層	15.6 11.6	暗褐 淡褐	密・0.2~1mm の砂粒含む	良好	L1縁部ヨコナデ。体部は外周縦方向のヘラミガキ。 内面下段横・斜め方向のハケ、中位横方向・下位 縦方向のヘラミガキ。	反転 L1縁1/4	
20 2	土器器 要	2区 SK 4	15.8 3.7	赤茶	密・0.2~1mm の砂粒含む	やや 不良	口縁部ヨコナデ。体部は外周ハケ。内面ヘラケズ り。	反転 口縁1/4	

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量 (cm)	口径 器高	色調	外 内	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考 現存率
21 2	灰生 鉢	2区 SK4	20.3 5.3	黄茶	密・0.2~2mm の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部は外面ハケ、内面ナデ。		反転 口縁1/8	
22	土師器 更	2区 包含層	17.8 2.7	暗灰褐色	密・0.1~1 mmの砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部は外面タタキ、内面ヘラケ ズリ。		反転 口縁1/4	
23	土師器 更	2区 包含層	13.3 5.7	淡灰茶	密・0.2~2 mmの砂粒含む	やや 不良	口縁部ヨコナデ。体部は外面タタキ、内面ヘラケ ズリ。		反転 口縁1/6	
24 2	土師器 更	2区 包含層	14.7 11.8	灰黃褐色	密・0.2~2 mmの砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部は外面タタキのち半径にハ ケ、内面ヘラケズリ。		反転 口縁1/2	
25	土師器 壺	2区 包含層	9.6 4.6	茶灰	密・0.1~0.5 mmの砂粒含む	良好	摩減のため調査不明。		反転 口縁1/6	
26 3	土師器 壺	2区 包含層	12.1 8.6	黄灰茶	密・0.2~3 mmの砂粒含む	良好	口縁部外腹横方向のヘラミガキ。		反転 口縁1/2	
27	土師器 高杯	2区 包含層	18.2 3.7	灰黃茶	密・0.2~1 mmの砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデのち内面横方向のヘラミガキ。体 部は外腹横方向、内面放射線状のヘラミガキ。		反転 口縁1/6	
28	弥生 高杯	2区 包含層	5.5 底径	灰灰褐色	密・0.2~2 mmの砂粒含む	良好	外腹底に向のハケ。内面は脚柱部ナデ、脚 柱間のハケ。 四方孔あり。		一部反転 脚底1/3	
29 3	土師器 高杯	2区 包含層	5.9 底径	明黄茶	密・0.2~1 mmの砂粒多く 含む	良好	外底横方向のヘラミガキ。内面は脚柱部ナデ、脚 柱間のハケ。 四方孔あり。		一部反転 脚底1/2	
30 3	土師器 高杯	2区 包含層	6.2 底径	明黄茶	密・0.2~1 mmの砂粒多く 含む	良好	外腹は脚柱部横方向のヘラミガキ。脚部放射状ハ ケのちヘラミガキ。内面は脚柱部ナデ、脚部 横方向のハケ。 四方孔あり。		痕跡3/4	
31 3	弥生 白付鉢	2区 包含層	28.1 7.7	暗暗灰	密・0.2~2 mmの砂粒多く 含む	良好	口縁部は横方向のヘラミガキ。体部は外腹放射状、 内面一定方向のヘラミガキ。		反転 体部1/2	
32 3	弥生 更	2区 包含層	14.8 10.1	暗褐	密・0.2~1 mmの砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部は外腹横方向のヘラミガキ、 内面横方向のナデ。		反転 口縁1/4	
33 3	弥生 壺	2区 包含層	7.9 断開	淡灰茶	密・0.1~1 mmの砂粒多く 含む	良好	内面ナデ。 体部外腹上半に轟接による瘤状文・斜突文を施す。		極小	
34	弥生 更	2区 包含層	4.5	暗褐	密・0.1~1 mmの砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。体部は外腹ハケ、内面ナデ。 口縁部に崩れ目、口縁底下外側に4条の沈線を 施す。		極小	
35 3	弥生 壺	2区 包含層	4.9 底部径11.2	明灰茶	密・0.2~2 mmの砂粒多く 含む	良好	外腹横方向のヘラミガキ。内面ナデ。 脚部外側に削出による段を施し、その上位に3条 の沈線を施す。		反転 極小	

石製品

遺物番号 図版番号	出土地点	種類	材質	法量 (mm) 長辺 短辺 厚さ		
36 3	2区 包含層	砥石	砂岩	8.6	5.5	2.6

第4次調査

土器

遺物番号 回収番号	器種	出土地点	法量 (cm)	口径 基部	色調	外 内	胎土	施成	技法・形態の特徴	備考
37 6	弥生 壹	1区 SK1102	17.2 12.3	黄褐 黄灰	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	外表面横方向のヘラミガキ。内面は口縁部横方向のヘラミガキ、腹部ナデ、体部板ナデ。 腹部に4条の沈線。	一部反転 頭部光存	
38 6	弥生 壹	1区 SK1102	9.3 14.4	淡茶灰 暗褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	外表面横方向のヘラミガキ。内面は口縁部-頭部横方向のヘラミガキ、頭部-体部斜削痕等。 頭部底広の前凸欠壊部面に4条の沈線。	反転 頭蓋1/2	
39 6	弥生 壹	1区 SK1102	14.0 14.7	茶褐 灰褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒多く含む	良好	外表面-斜め方向のハケ。口縁部ヨコナデ。内面 は上平ナデ、下平ヘラミガキ。	一部反転 2/3	
40 7	弥生 壹	1区 SK1102	25.0 5.3	黄 灰	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	ヨコナデ。 口縁部ヘラによる削み目。口縁底下に3条の沈 線と頭部外面向に塗付痕。	反転 口縫1/10	
41 6	弥生 体	1区 SK1102	39.6 23.5	黄褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	外面上傾横方向、下傾め方向の板ナデ。口縫部 は頭部-斜め方向のナデ。 口縫底下に瘤状突起(2個1対)。	反転 1/5	
42	弥生 壹	1区 SK1103	10.9 11.5	淡灰茶 淡灰茶	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	内表面横方向のヘラミガキ。 頭部に1条の貼付け突起を付し、外面上に1条の沈 線を施した後、ヘラミによる削み目。	反転 極小	
43 6	弥生 壹	1区 SK1103	5.9	黄褐灰 灰黄	直 曲	0.2~4 mmの砂粒含む	良好	外表面-斜め方向のヘラミガキ。内面ナデ。 脇骨に握壓斑による削み目を施した3条の貼付け 突起。	反転 極小	
44 6	弥生 壹	1区 SK1103	8.7	淡褐 黑灰	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	外表面ヘラミガキ。内面ナデ。体部に2条の貼付け 突起。上-上段は縮りて、外面上に2条の沈線を施す。 いずれにも6指捺压による削み目を施す。脇部に、 下に2重の弦文と思われる貼付け突起。	極小	
45 6	弥生 壹	1区 SK1103	6.4 9.0	淡茶 灰褐	直 曲	0.2~3 mmの砂粒含む	良好	外表面-上の板ナデ。内面右→左の板ナデ。 底部中央に施成後の跡。	一部反転 底部光存	
46 6	弥生 壹	1区 SK1103	4.0 8.8	淡褐灰 淡黄褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	外表面横方向のヘラミガキ。内面ナデ。底部外側ナ デ。	底部光存	
47 6	弥生 壹	1区 SK1103	12.9 7.4	暗茶 暗茶褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	外表面ナデ、D下→上の板ナデ。内面右→左の板 ナデ。	一部反転 底部光存	
48 6	弥生 壹	1区 包含層	12.4 2.7	褐灰 黄褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	内外面ヘラミガキ。 口縫部に赤彩を施す。	反転 口縫1/10	
49 6	弥生 壹	1区 包含層	17.2 3.5	明茶 紫褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	外表面ヨコナデ。	反転 口縫1/4	
50 6	弥生 壹	1区 包含層	14.4 3.5	淡褐灰 灰褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	内面横方向のヘラミガキ。 頭部に3条以上の沈線。	反転 口縫1/8	
51 6	弥生 壹	1区 包含層	30.2 2.2	淡茶 淡灰褐	直 曲	0.2~1 mmの砂粒含む	良好	内外面ヨコナデ。	反転 口縫1/4	
52 6	弥生 壹	1区 包含層	3.9	淡黄茶 灰褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	内外表面横方向のヘラミガキ。 頭部に握壓斑による削み目を施した1条の貼付け 突起。脇部-体部斜面に1条の削出突起。	反転 極小	
53 6	弥生 壹	1区 包含層	5.7 頭部径11.4	暗灰 頭部径11.4	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	外表面横方向のヘラミガキ。内面ナデ。脇部に幅広 の削出突起を施し、その外側に、上段から化粧・ 下段による削み目を有する貼付け突起。2条の沈線を 施す。	反転 極小	
54 7	弥生 壹	1区 包含層	7.1 頭部径10.8	暗茶 淡灰褐	直 曲	0.2~2 mmの砂粒多く含む	良好	内外表面横方向のヘラミガキ。 頭部に、ヘラによる削み目を施す1条の貼付け突 起を付す。外面上に赤彩を施す。	反転 極小	
55 7	弥生 壹	1区 包含層	7.8 底径大径30.4	暗茶 暗茶	直 曲	0.2~1 mmの砂粒含む	良好	外表面横方向のヘラミガキ。内面ナデ。 脇部に2条の高い貼付け突起。	反転 極小	
56 7	弥生 壹	1区 包含層	7.6 底径大径16.9	褐灰 黄灰	直 曲	0.5~2 mmの砂粒含む	良好	内面ナデ、体部板ナデ。 脇部に1条以上、脇部に4条の沈線。	反転 極小	
57 6	弥生 壹	1区 包含層	6.0	暗茶 黑灰	直 曲	0.2~2 mmの砂粒含む	良好	内面ナデ(後側方向の薄いヘラミガキ) 脇部に2条の貼付け突起を付し、外面上に3条の ナデによる凹痕を施す。	反転 極小	

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量 (cm)	口径 基部	色調	外内	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考 残存率
58	弥生 壺	1区 包含層	3.5	淡灰茶	密・0.2~3mm	良好	砂粒含む	外削下→上の板ナデ。内面ハラミガキ。	反転 底部1/4	
59	弥生 壺	1区 包含層	11.9	黒褐	密・0.2~1mm	良好	砂粒含む	外面ナデ。口縁部ヨコナデ。内面板ナデ。 「縁部底面下に2条の沈線を造らす。 外縁に張付着。」	反転 口縁1/10	
60	弥生 壺	1区 包含層	14.8	黒褐	密・0.1~0.5	良好	砂粒含む	内面板ナデ。口縁部にヘラによる削み目。「縁底面下に2条以上の沈線を造らす。外面全体に張付着。」	反転 口縁1/10	
61	弥生 壺	1区 包含層	2.8	暗褐	密・0.1~1mm	良好	砂粒含む	内面板ナデ。口縁部にヘラによる削み目。「縁底面下に3条以上の沈線を造らす。」	反転 口縁1/30	
62	弥生 壺	1区 包含層	25.4	暗褐	密・0.2~2mm	良好	砂粒含む	外面ナデ。口縁部ヨコナデ。内面ナデ。 「縁部底面下に1条の沈線を造らし、その下に沈線文(山形文?)を施す。」	反転 口縁1/6	
63	弥生 壺	1区 包含層	4.0	黒褐	密・0.2~2mm	良好	砂粒含む	外面ヨコナデ。内面ナデ。 「口縁部底面下に1条の沈線を造らし、その下に沈線文(山形文?)を施す。」	極小	
64	弥生 壺	1区 包含層	5.7	淡茶	密・0.5~2mm	良好	砂粒含む	外面下→上の板ナデ。内面ナデ。 内面に沈化物付着。	反転 底部1/2	
65	弥生 壺	1区 包含層	23.6	淡褐灰	密・0.2~2mm	良好	砂粒多く含む	外削上→上のハケ。底部付近ヘラケズり。「縁部ヨコナデ。内面ナデ。口縁部底面下にヘラによる削み目。」 「口縁底面下に3条の沈線を造らす。」	一部反転 1/2	
66	弥生 高杯	1区 包含層	21.8	暗褐	密・0.2~1mm	良好	砂粒含む	底部付近斜削状・ハラミガキ。上位傾方向へハラミガキ 「口縁部ヨコナデ。底部内面側へ斜削状へラミガキ後下位傾方向へハラミガキ。」 「縁部外面施墨施文。」	反転 口縁1/8	
73	弥生 壺	2区 包含層	28.6	褐灰	やや粗・0.2~3mmの砂粒	良好	砂粒含む	外面傾め方向。内面横方向のハラミガキ。 「口縁部ナデ。」	反転 口縁1/8	
74	弥生 壺	2区 包含層	18.0	淡茶灰	密・0.1~1mm	良好	砂粒含む	外削横→斜め方向のハケ。口縁部ヨコナデ。内面 ナデ。	反転 口縁1/8	
75	弥生 壺	2区 包含層	12.6	暗褐	密・0.1~1mm	良好	砂粒含む	外削のち傾方向のハケ。口縁部ヨコナデ。内面 下→上のナデ。 「内面付着。」	反転 口縁1/8	
76	弥生 高杯	2区 包含層	22.0	暗褐	密・0.1~0.5mmの砂粒含む	良好	砂粒含む	内外削ヨコナデ。 「口縁部外面2段の棒搭列点文。」	反転 極小	
77	弥生 高杯	2区 包含層	12.0	暗褐	密・0.1~1mm	良好	砂粒含む	底部外側西脇方向のハラミガキ。内面ヨコナデ。 底部外側ハケ。 「縁部外側付着。」	一部反転 脚柱部完存	
78	弥生 高杯	2区 包含層	1.9	淡褐	密・0.2~1mm	良好	砂粒含む	底部外側傾方向のハラミガキ。端部ヨコナデ。内 面ナデ。	反転 底部1/8	
79	弥生 壺	2区 包含層	2.2	暗褐灰	密・0.1~1mm	良好	砂粒含む	内外削ナデ。 「外削付着。」	底部完存	
80	弥生 壺	2区 包含層	3.2	暗褐	密・0.2~2mm	良好	砂粒含む	外削傾方向のハラミガキ。底部付近ヨコナデ。内 面削方向のハケ。底部外側一方向のハラミガキ。 内面ナデ。	一部反転 底部完存	
81	弥生 壺	2区 S X2101	4.2	淡褐	密・0.2~2mm	良好	砂粒含む	外削傾方向のハラミガキ。底部付近ヨコナデ。内 面ナデ。	一部反転 底部完存	
82	弥生 壺	S G2201	4.6	暗茶褐	密・0.2~2mm	良好	砂粒含む	外削傾方向のハラミガキ。底部付近ナデ。	一部反転 底部完存	
83	弥生 壺	2区 包含層	18.1	淡褐	やや 砂粒含む	不良	砂粒含む	口縁外側面施墨直線文のち竹筍円形文。	反転 口縁1/4	
84	弥生 壺	2区 包含層	16.6	灰黃褐	やや粗・0.2~1mmの砂粒	良好	砂粒含む	外面平行タキ。口縁部ヨコナデ。内面横方向の ハラケズリ。	反転 口縁1/4	
85	瓦器 壺	2区 包含層	1.6 高台付 4.7 高台高 0.7	黒褐	密	良好	砂粒含む	高台面ヨコナデ。 見込み部斜格子状の暗文。	反転 高台1/3	
86	弥生 台付鉢	2区 包含層	10.6	灰褐	密・0.2~3mm	良好	砂粒含む	外削傾方向のハラミガキ。口縁部ヨコナデ。内 面横方向のハラミガキ。内面横方向の板ナデ。 「縁部外側面施墨直線文。」	反転 口縁1/10	

遺物番号 回収番号	器種	出土地点	法量 (cm)	口径 厚さ	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考
87 土師甕 皿 SK4101	4区 SK4101		10.2 1.4	淡灰茶	青 の砂粒含む	青・0.2mm位	良好	底部外面ナゲ。他はヨコナガ。	反転 口縁1/4
88 瓦器 甕 SK4101	4区 SK4101		15.6 4.6	黒灰	青	青	良好	体部外面指押え後乱雜なヘラミガキ。口縁部2段のヨコナガのち外周部高いヘラミガキ。見込み平行線文のうち内面密な彫刻状のヘラミガキ。	反転 口縁1/4
89 瓦器 甕 SK4101	4区 SK4101		21.8 7.3	黒灰	青	青・0.2~2mm の砂粒含む	良好	外面平行、内面円弧状のタキ。口縁部同軸ナゲ。	反転 口縁1/6
90 劍先 甕 包含層	4区 包含層		23.0 2.5	褐灰	青	青・0.2~2mm の砂粒含む	良好	内外面横方向のヘラミガキ。 口縁部同軸線文。	反転 1/10
91 黄生 高脚 包含層	4区 包含層		22.0 2.9	赤褐色	青	青・0.2~2mm の砂粒含む	やや不良	内外面ヨコナゲ。 口縁部外面上部横線、下位2段の施捺きの列点文。	反転 極小
92 黄生 蓋 包含層	4区 包含層		20.9 9.9	淡灰茶	青	青・0.1~1mm の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナゲ。類似ナゲ。口縁部外面直線横線状、上部は円形浮文とその下段に3条の凹部を並らす。底面は上から複数層状況、2段の春捺判点文。	一部反転 口縁2/3
93 黄生 蓋 包含層	4区 包含層		8.8 4.6	淡茶	やや青・0.2~2mmの砂粒含む	やや不良	口縁部ヨコナゲ。内面ナゲ。	反転 口縁1/8	
94 黄生 蓋 SK4301	4区 SK4301		8.4	淡茶	やや青・0.2~2mmの砂粒含む	良好	体部外周3段以上の彫刻直線文。 口縁部ヨコナゲで、外側に指押え残る。 頬不明。	極小	
95 丸器 柄 包含層 高台径	4区 包含層	5.4	16.0 5.3	黒灰	青	青	良好	体部外面指押えのち乱雜なヘラミガキ。口縁部ヨコナゲのち外周高いヘラミガキ。見込み平行線文のうち内面密な彫刻状のヘラミガキ。高台高0.7	一端反転 2/3
96 土師甕 皿 包含層	4区 包含層		9.8 2.0	淡灰茶	青(釉色)	青	良好	口縁部ヨコナゲ。底部外面指押え、内面ナゲ。	完形
97 土師甕 皿 包含層	4区 包含層		9.2 1.8	淡灰茶	青・0.2mm位 の砂粒含む	青・0.2mm位 の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナゲ。底部内外面ナゲ。	反転 1/3
98 土師甕 羽釜 包含層	4区 包含層		30.4 8.2 37.2	淡茶灰	やや青・0.2~2mmの砂粒 多く含む	良好	口縁部・脚部ヨコナゲ。他はナゲ。	反転 極小	

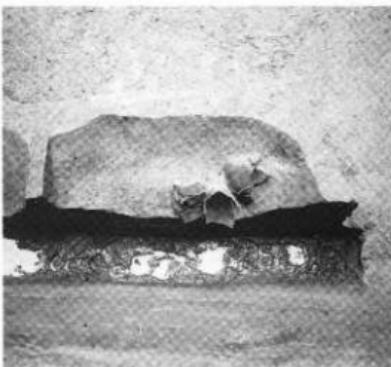
石器

遺物番号 回収番号	出土地点	種類	材質	法量 (mm)	長辺 幅 厚さ	備考
67 8 1区 包含層	磨製石劍	粘板岩	4.6 3.2 0.8		両端欠損	
68 9 1区 包含層	石錐	サスカイト	3.2 2.5 0.7		先端欠損	
69 9 1区 包含層	削器	サスカイト	3.6 3.3 0.6			
70 9 1区 包含層	削器	サスカイト	4.5 4.3 0.9			
71 9 1区 包含層	削器	サスカイト	8.2 6.0 3.0			
72 9 1区 包含層	石核	サスカイト	12.4 9.1 5.2		叩き石に転用	
99 9 2区 S03201	石瘤	サスカイト	6.5 2.6 1.3		未製品	
100 9 4区 包含層	削器	サスカイト	6.2 5.3 1.4			
101 9 4区 SK4203	削器	サスカイト	7.0 5.4 1.2			

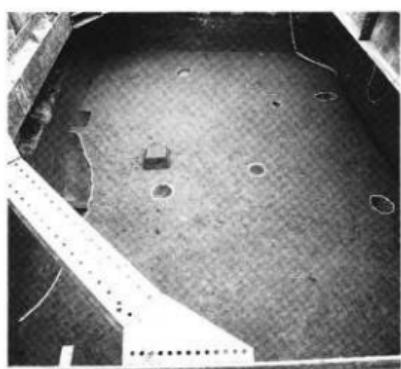
図 版



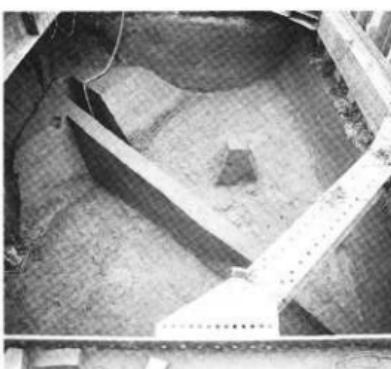
I区 第1次面(南東から)



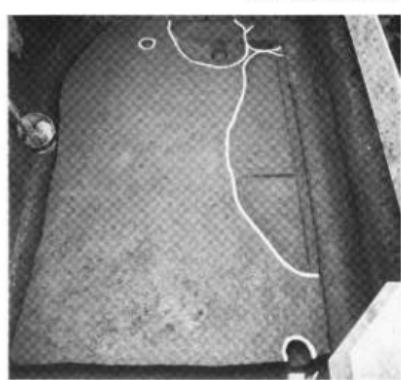
I区 第1次面SK 2(上から)



I区 第2次面(西から)



I区 第2次面(東から)

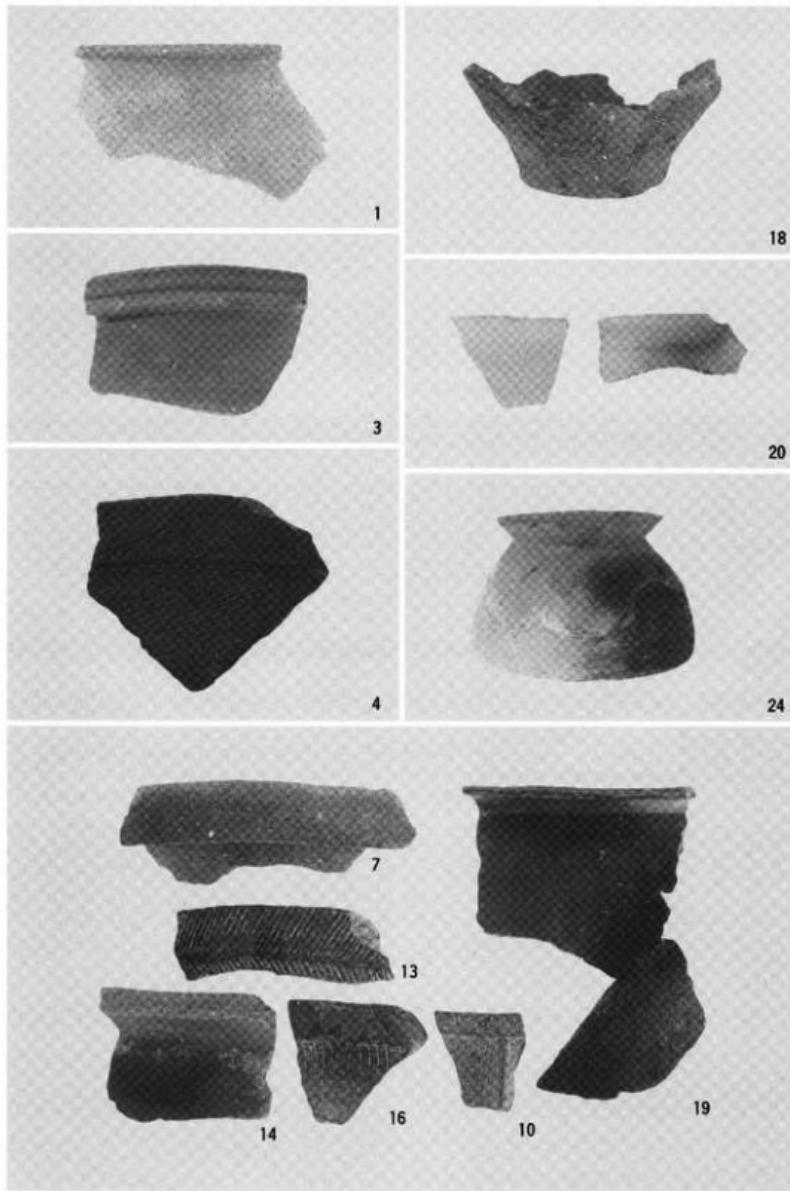


II区 全景(東から)

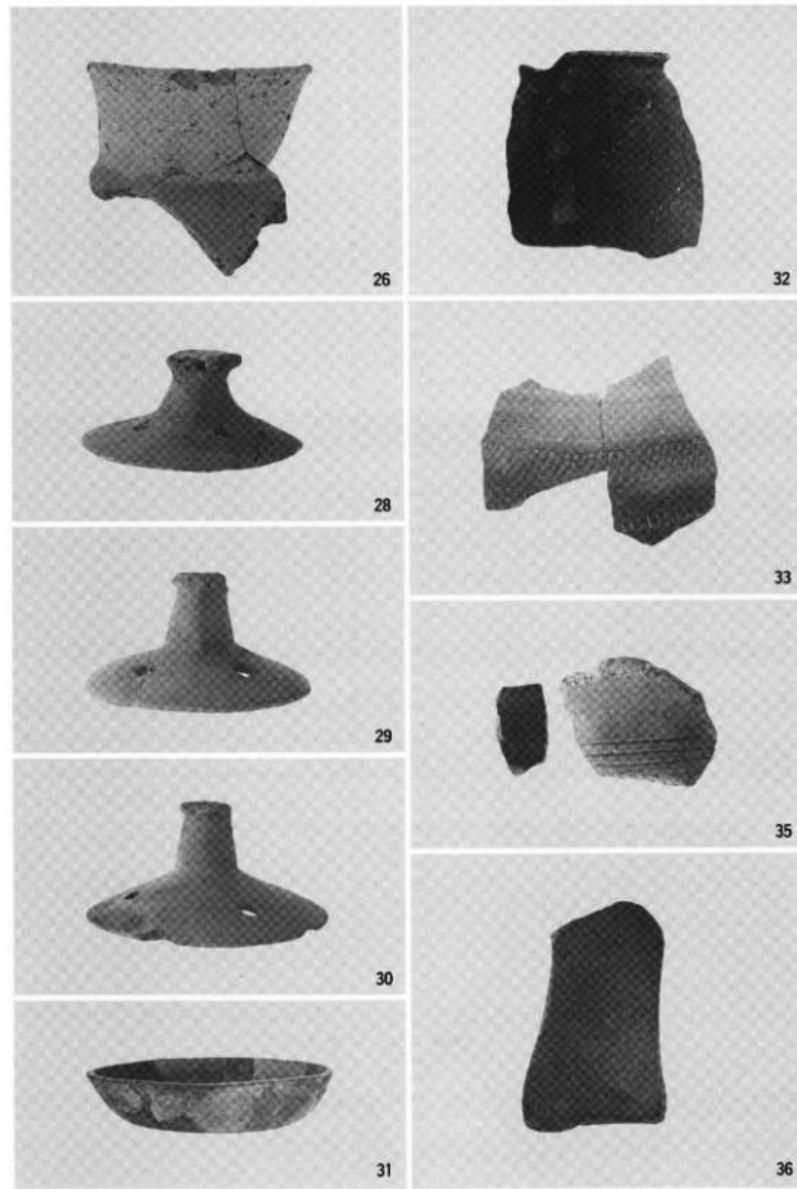


II区 下層構造(東から)

圖版 2
第3次調查



I区 SK 2 (1)・包含層(3~19)、II区 SK 4 (20・21)・包含層(24)





I区 北半部(南から)



I区 南半部(北から)



I区 SK1102(北から)



II区 第1・2次面(北から)



III区 全景(北から)



III区 S03101東壁(西から)



4区 第1次面全景(南から)



4区 第1次面SK 4101(西から)



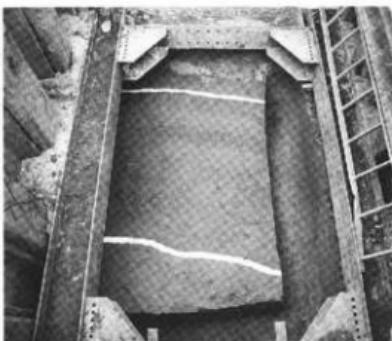
4区 第2・3次面全景(南から)



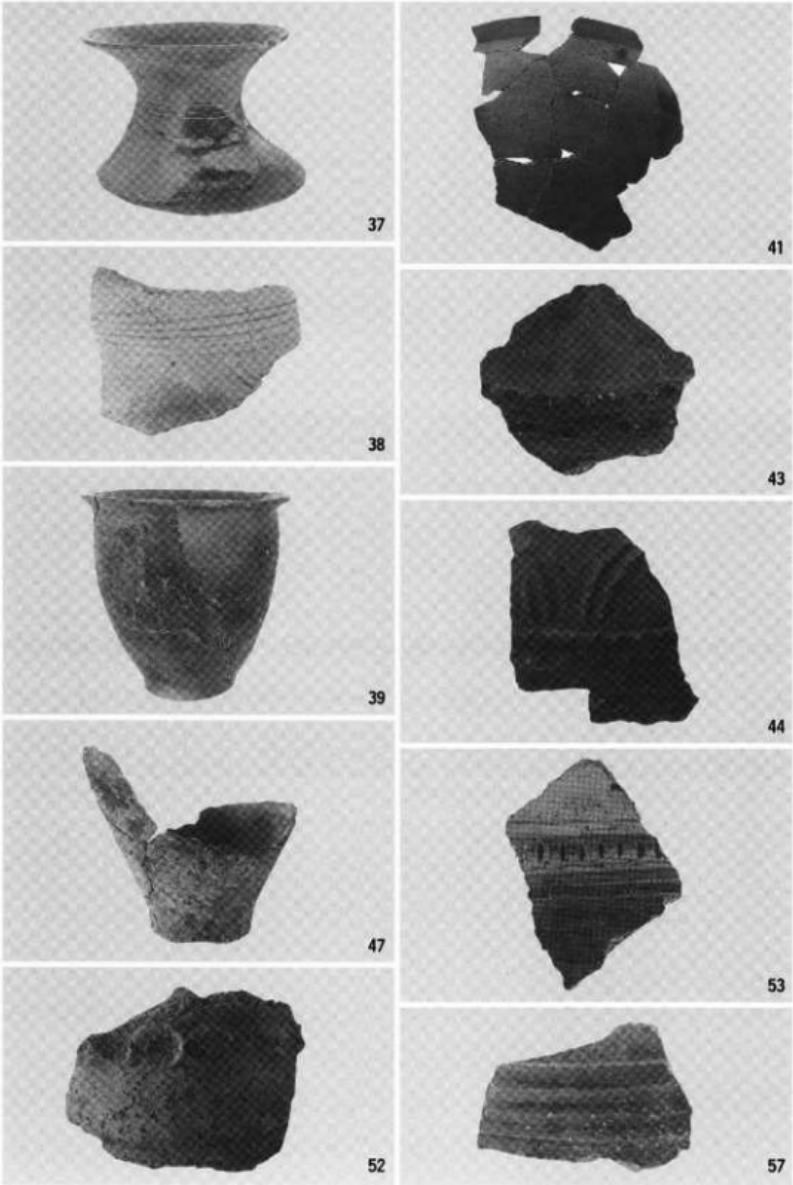
4区 第3次面SK 4301(西から)



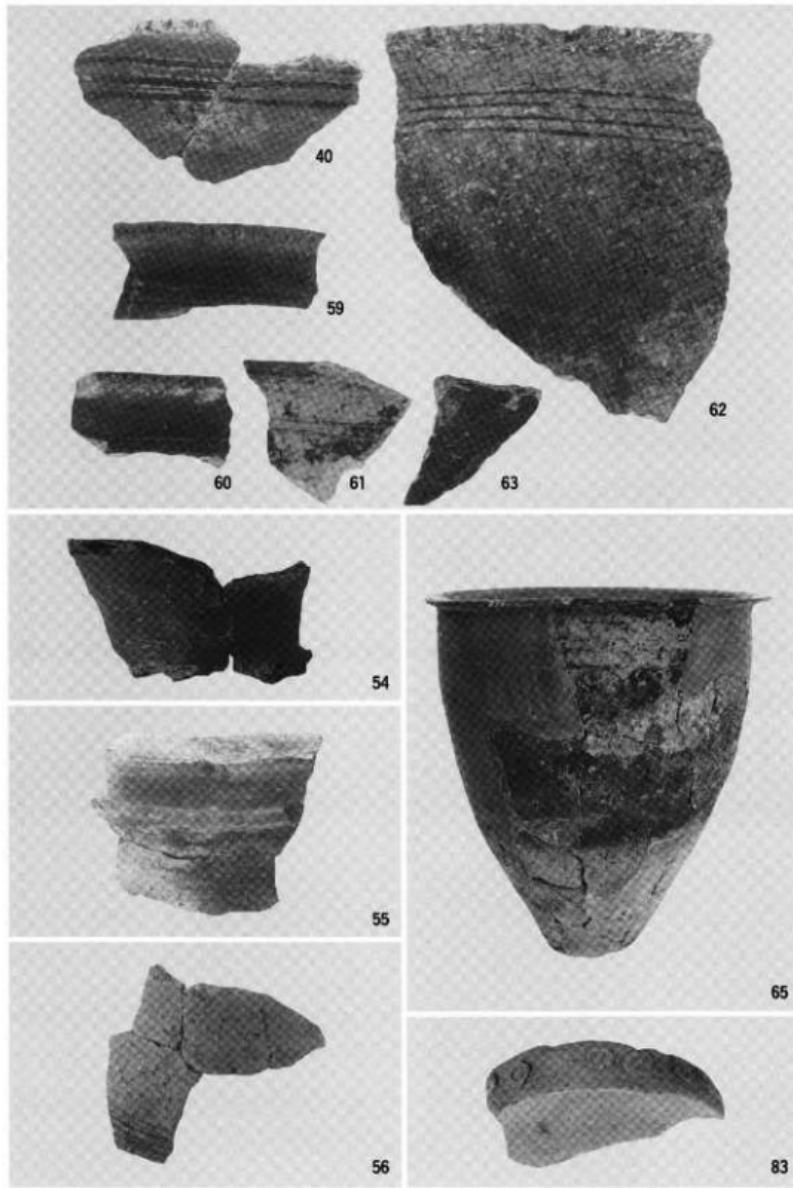
4区 遺物出土状況(南から)



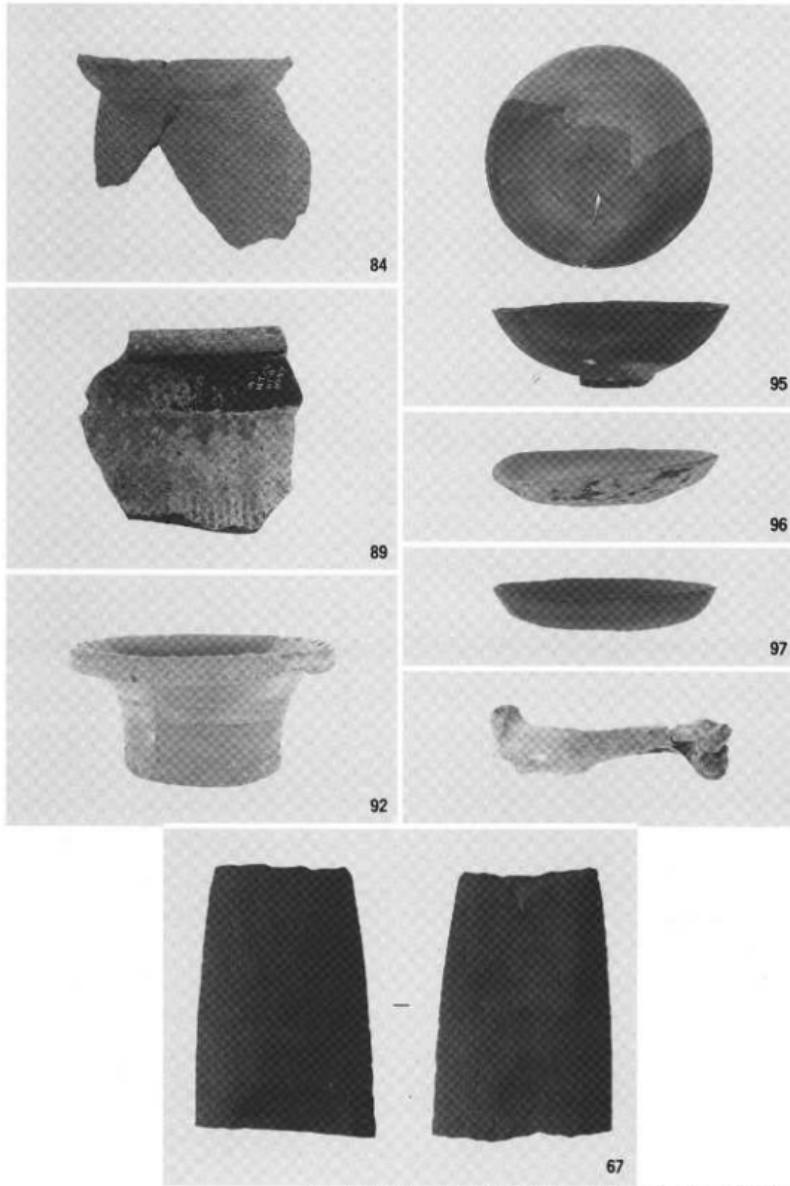
5区 全景(南から)



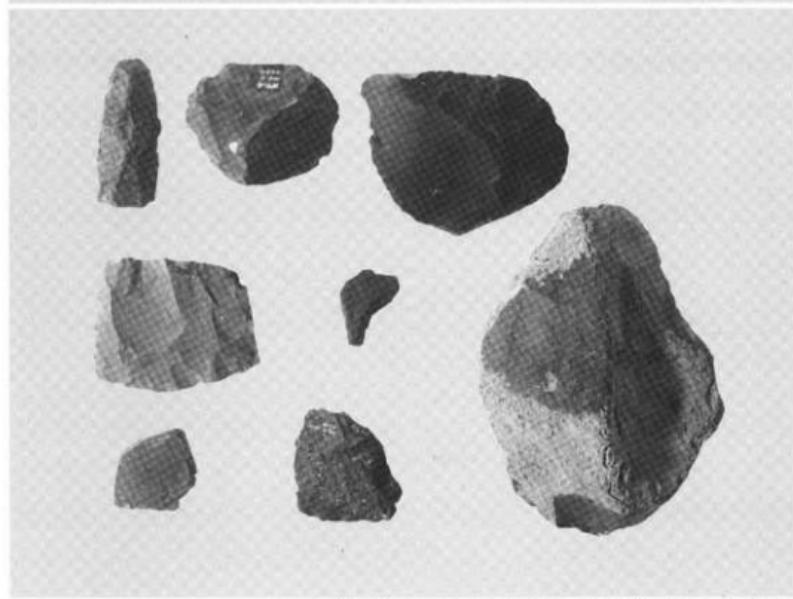
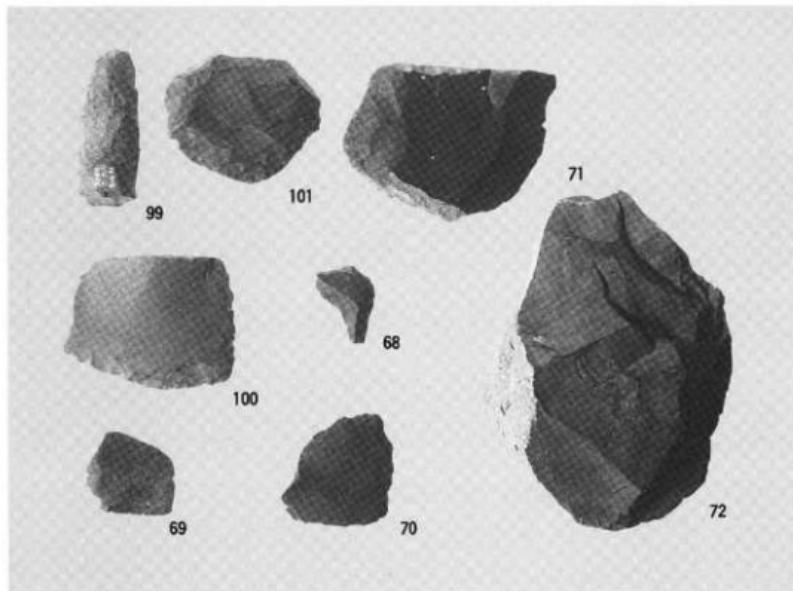
1区 SK1102(37~41)・SK1103(43~57)



1区 包含層(40~65)、2区 包含層(83)



2区 包含層(84)、4区 SK4101(89)・包含層(92~97)、1区 包含層(67)



1区 包含層(69~72)、2区 S O 2201(99)、4区 包含層(100) - S K 4203(101)

III 竹測遺跡(TK89-2)

例　　言

1. 本書は、八尾市竹渕東2丁目で行った公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市下水道部の委託をうけて実施したものである。
 1. 本調査は、当調査研究会が竹渕遺跡内で行った第2次調査である。
 1. 本調査は、当調査研究会 坪田真一を担当者として、平成2年1月12日には着手し、平成2年3月11日に終了した。調査面積は127m²である。
 1. 現地調査には、岡田聖一・坂下 学・濱田千年・若竹慶弘の参加を得た。
 1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子・宮崎寛子・山内千恵子の参加を得た。
 1. 本書の執筆・遺物写真撮影及び編集は坪田が担当した。

本文目次

第1章 調査に至る経過	81
第2章 地理的・歴史的環境	81
第3章 調査概要	83
第1節 調査の方法と経過	83
第2節 検出遺構と出土遺物の概要	83
第4章 まとめ	91
第5章 出土遺物観察表	93

挿図目次

第1図 調査区位置図(S=1/5000)	82
第2図 1区 基本層序(S=1/40)	83
第3図 1区 平面図(S=1/100)	85
第4図 1区 調査区南壁断面図(S=1/60)	86
第5図 1区 SD301平・断面図(S=1/20)	87
第6図 1区 土器棺墓1平・断面図(S=1/10)	88
第7図 1区 土器棺墓1出土遺物(S=1/4)	88

第8図	1区 出土遺物(S=1/4・1/2).....	89
第9図	2区 基本層序(S=1/40).....	90
第10図	3区 基本層序(S=1/40).....	90
第11図	4区 基本層序(S=1/40).....	91
第12図	3・4区 出土遺物(S=1/4・1/2).....	92

図版目次

図版1	1区 第1次面全景(東から)	1区 第2次面全景(東から)
	1区 第3次面全景(東から)	1区 第3次面SD301(北から)
	1区 第3次面SD301(南西から)	1区 第3次面全景(東から)
図版2	1区 第3次面土器棺墓1(南から)	
	1区 第3次面土器棺墓1(上が東)	
図版3	1区 第3次面土器棺墓1(西から)	
	1区 第3次面SD301内遺物出土状況(北から)	
図版4	1区・3区・4区出土遺物	
図版5	1区・4区出土遺物	

第1章 調査に至る経過

竹瀬遺跡は、昭和57年、八尾市教育委員会が市立竹瀬小学校内で行った試掘調査の結果確認された遺跡であり、その後の当調査研究会による発掘調査（第1次調査）においては、古墳時代後期の堅穴住居・土坑・溝・小穴、近世の井戸が検出されている。

その後、当遺跡内では発掘調査は行われていなかったが、平成元年、当遺跡推定範囲内の東部にあたる八尾市竹瀬東2丁目地内においての公共下水道工事計画が、八尾市下水道部建設課より当市教育委員会文化財室に提出された。同文化財室では、申請地が亀井遺跡の中心部に近接していることや、周辺の発掘調査の成果からも、埋蔵文化財の存在が予測されるため、発掘調査が必要であると判断し、事業者にこれを指示した。発掘調査は、同教育委員会文化財室・同下水道部建設課・当調査研究会との三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することが決定した。

第2章 地理的・歴史的環境

竹瀬遺跡は、八尾市の西端に位置し、現在の行政区画では竹瀬1～5丁目・竹瀬東1～4丁目がその範囲となっている。

地形的には、旧大和川の主流である長瀬川・玉串川・平野川などの河川によって形成された沖積地の西側にあたり、現在では長瀬川から分流した平野川が、当遺跡の中央を南東から北西へ流下している。同地形上には、北に久宝寺遺跡、加美遺跡、東に亀井遺跡、南に長原遺跡、瓜破遺跡などが存在している。

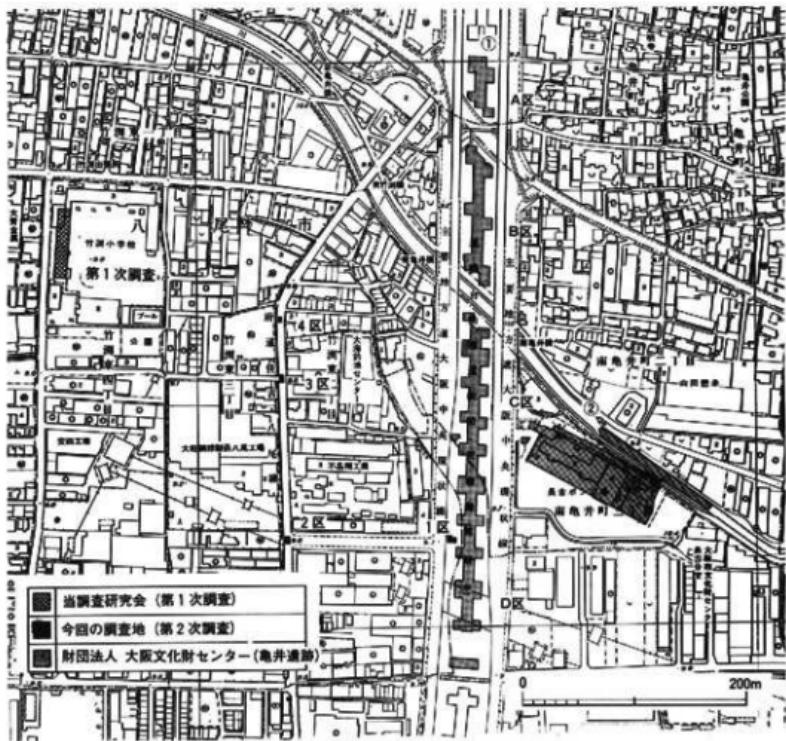
なお竹瀬遺跡は当市での行政区画に対応した呼称であり、本来は亀井遺跡と同一の遺跡と考えられる。亀井遺跡は、昭和43年の平野川改修工事の際発見された遺跡で、それ以後大阪府教育委員会・財團法人大阪文化財センター・当調査研究会により発掘調査が続けられている。今回の調査の第1区の東側では、近畿自動車道建設に伴う発掘調査（①）、長吉ポンプ場関連の発掘調査（②）が、昭和55～58年に財團法人大阪文化財センターにより行われている。この南北約500mにわたる調査などによって亀井遺跡の全容が明らかになりつつあるが、ここではその成果をもとに亀井遺跡の概要を述べておきたい。

亀井遺跡に集落が成立するのは弥生時代前期中段階である。集落は、弥生時代前期初頭に形成されたと考えられている自然堤防上に営まれている。この自然堤防はB区北端を縁辺としており、生活域はC区北部に限られ、比高差約1mの微高地上に小規模な生活域が存在した。それ以前については、下層確認調査によると、縄文時代晩期の土器を含む黒色粘土層が広範囲に

確認されており、湿地帯が広がっていたようである。弥生時代前期末には生活域のやや南側が墓域となり、方形周溝墓が造営されている。その他の前期の遺構としては、C区で密度は希薄であるが溝が確認されている。

中期前葉になると集落はやや北側に、また墓域は南側に移動しその間隔が広がる。龜井集落の最盛期とも言える中期中葉になると生活域はさらに北に、B区すなわち自然堤防北縁に移動する。そして前期の生活域であったC区以南は、南側の城山遺跡をも含め墓域となり、生活域と墓域との完全な分離が認められる。集落はポンプ場地区でも確認されているが、両者は別の集落と考えられている。中期後葉から後期初頭にはA区に大溝群が形成されている。この大溝は集落域を画する環濠、あるいは水田を洪水などから防御するためのものと考えられている。

なおポンプ場地区では、中期後葉にかつての生活域に方形周溝墓が築かれており、集落域と



第1図 調査区位置図 (S = 1 / 5000)

墓域の分離という原則の崩壊が認められる。

その後、集落は一時途絶え、後期中業に再開されるが一時的なもので、以降集落は廃絶される。これは河川の氾濫による広範囲にわたる冠水が要因と考えられ、5世紀中頃までは滞水状態～湿地状態にあったようである。5世紀後葉にはC区北部に古墳が造営されるが、それ以降はふたたび滞水状態が認められる。そして7世紀以降は古代・中世平野川、東除川の流路となり、顯著な生活遺構はみられない。畦畔・井戸・流路・しがらみ等の生産遺構が検出されており、耕地としての土地利用が近世まで続いている。

第3章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、当調査研究会が竹測遺跡内で行った第2次調査である。下水道工事の立坑部分の掘削に伴う調査であり、調査区は4か所である。調査は地表下2.5～3.0mを機械掘削及び人力掘削を併用して行い、以下を人力掘削で調査を行った。なお、2～4区については、工事工程の事情からやむをえず夜間調査となつたため、満足な調査ができたとは言い難い。

第2節 検出遺構と出土遺物の概要

<1区>

1. 基本層序

第1層 盛土

第2層 淡灰褐色細砂・粗砂・粘土

第3層 淡灰色砂混じり粘土

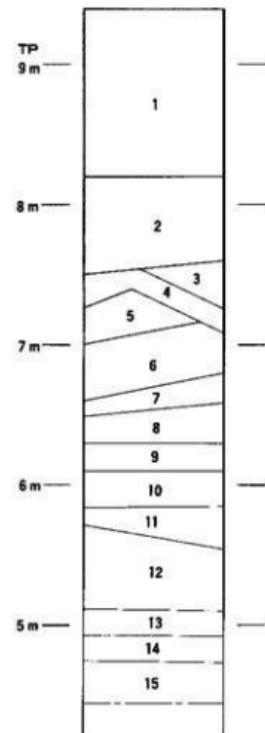
第2・3層は細砂・粗砂・粘土の互層で、旧東除川の堆積と考えられる。

第4層 灰青色粘土

第5層 青灰色粘土

第6層 暗青灰色粘土

第4～6層は、青灰色系の粘土が続くが、遺物は全く検出されなかった。



第2図 1区 基本層序 (S=1/40)

第7層 青黒色粘土

第8層 暗青灰色粘土

第7・8層は弥生時代中期の遺物を少量含む包含層である。

第9層 灰青色粘土

弥生時代前期～中期の遺物を少量含んでいる。この上面が第1次面で、標高約6.3mを測る。

第10層 褐青色粘土・シルト

弥生時代前期～中期の遺物を含んでいる。この上面が第2次面で、標高約6.1mを測る。

第11層 青灰色シルト（黒灰色粘土をブロック状に含む）

この上面が第3次面で、標高約5.8mを測る。

第12層 青灰色シルト

第13層 灰青褐色細砂混じり粘質シルト（植物遺体含む）

第14層 灰色細砂

第15層 暗茶色粘土（植物遺体を多量に含む）

第11層がベース層と考えられ、以下からは遺物は検出されなかった。

2. 遺構と出土遺物

第1～3次面の3面を確認した。

<第1次面>

溝3条（SD101～103）を検出した。

• SD101

南北方向に伸びる浅い落ち込み状のもので、東肩は調査区外となっている。検出長3.2m、幅2.0m以上、深さ約0.1mを測る。断面皿状で、埋土は灰青色粘土である。遺物は全く出土しておらず、時期は不明である。

• SD102

南北方向に伸びる浅い落ち込み状のもので、検出長4.8m、幅約2.0m、深さ約0.1mを測る。断面皿状で、埋土はSD101と同様である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

• SD103

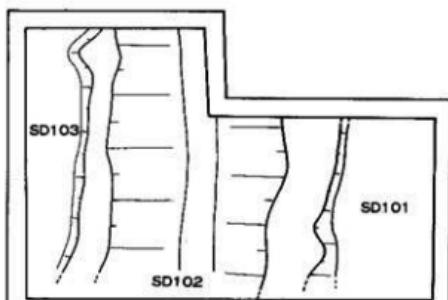
南北方向に伸び、西肩は調査区外となっている。検出長4.8m、幅約4.0m、深さ約0.3mを測り断面皿状で、埋土は黒灰色系の粘土である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

<第2次面>

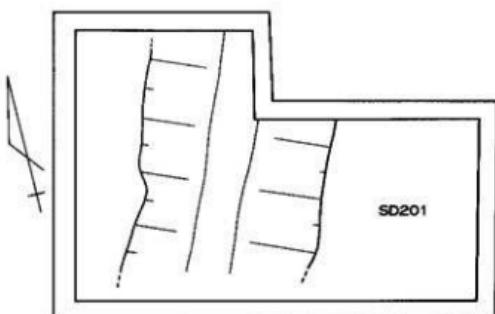
溝1条（SD201）を検出した。

• SD201

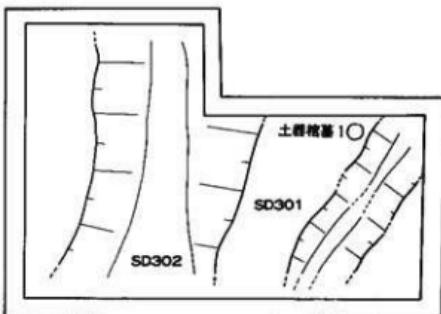
南北方向の流路をもち、検出長4.8m、幅約3.5m、深さ約0.8mを測る。埋土は上から暗灰



第1次面



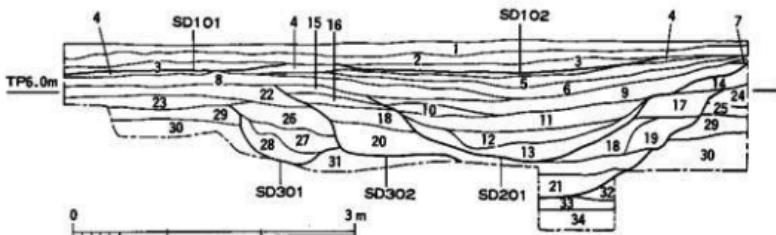
第2次面



第3次面



第3図 1区 平面図 ($S = 1/100$)



1. 喀青灰色粘土	13. 青灰色粘質シルト	24. 喀青色細砂混じりシルト
2. 喀灰青色粘土	14. 喀褐灰色粘土	25. 黒灰色粘質土
3. 喀青色粘土	15. 灰色細砂	26. 喀青色粘質シルト
4. 喀黑色粘土	16. 喀色細砂混じり粘質土	27. 喀青色シルト
5. 黑灰色粘土	17. 喀褐灰色粘質土	28. 青褐色シルト
6. 喀黑褐色粘土	18. 線状細砂混じり粘質シルト	29. 青灰色シルトに黒灰色粘土のブロック含む
7. 喀褐色粘土	19. 喀褐色細砂混じり粘質シルト	30. 青灰色シルト
8. 喀青色粘土	20. 喀褐色細砂混じり粘質シルト	31. 喀灰褐色細砂混じり粘質土
9. 喀灰青色粘土	21. 黑灰青色粘質シルト	32. 喀青褐色細砂混じり粘質シルト(植物遺体含む)
10. 青灰色細砂混じり粘質シルト	22. 喀青色粘土	33. 灰色細砂
11. 喀黄色粗砂	23. 喀青色シルト	34. 喀茶色粘土(植物遺体多量に含む)
12. 喀灰色細砂混じりシルト		

第4図 1区 調査区南壁断面図 (S = 1/60)

青色粘土・灰黄色粗砂・青灰色シルト・青灰色粘質シルトである。検出状況から、第3次面のSD302がある程度埋没した段階で、同一流路上に形成された溝と考えられる。出土遺物は細片のみで時期は不明である。

<第3次面>

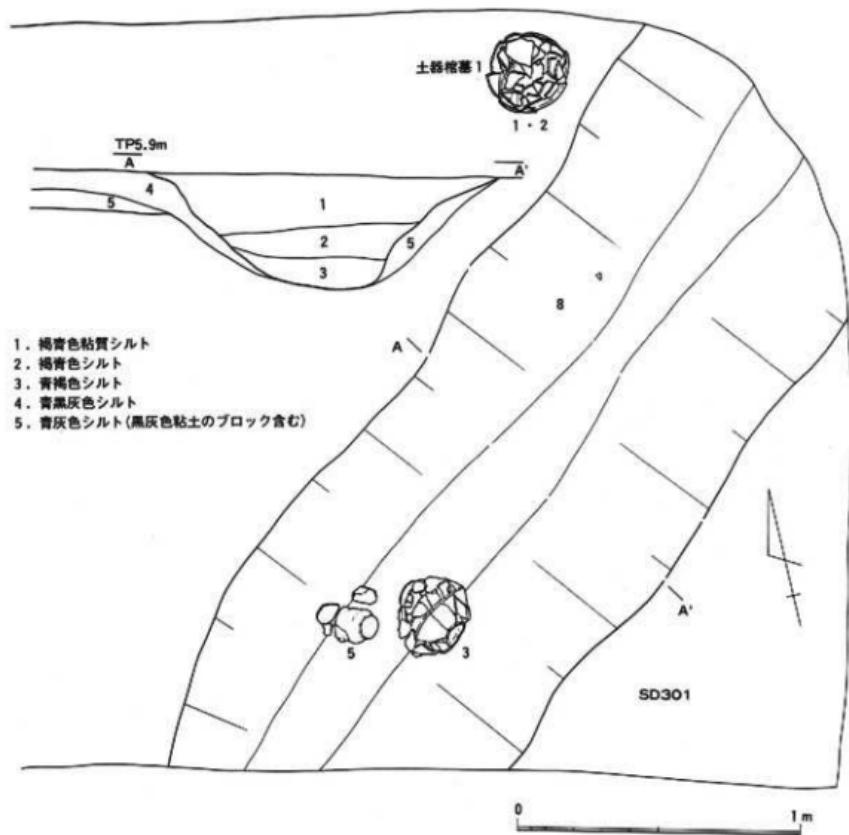
溝2条(SD301・302)・土器棺墓1基(土器棺墓1)を検出した。

• SD301

調査区の東端で約3.5mにわたって検出した。幅約1.2m、深さ約0.5mで、方向は北から東に約35度振っている。埋土は上から褐青色粘質シルト・褐青色シルト・青褐色シルトである。

出土遺物には土器(3~5)・石器(8)がある。壺(3)は最上層からの出土で、口縁部を欠いており、土圧によって押しつぶされた状態で横位に出土している。この出土状況から供獻土器としての性格が考えられ、当溝は方形周溝墓の周溝である可能性がある。この場合、溝の西肩に存在する第4層の青黒灰色シルトが墳丘盛土になるのかもしれない。時期は弥生時代前期中段階と考えられる。

なお当溝は、財团法人大阪文化財センターによる近畿自動車道トレンチ部分の調査において検出されたSD3087、あるいはSD3088に連続する可能性がある。出土遺物をみると、前者は弥生時代前期新段階の新相に比定されるものでやや時期差があり、後者からは遺物は出土していない。また規模・埋土をみると、前者は当溝に比して規模が大きく、埋土には粗砂層が存在することから水流の痕跡が認められており、後者は当溝に類似しているといえる。

第5図 1区 SD301平坦面図 ($S = 1/20$)

• SD302

南北方向の溝で、検出長4.8m、幅約4.8m、深さ約1.2mを測る。埋土は暗褐色系の粘質土・粘質シルトである。

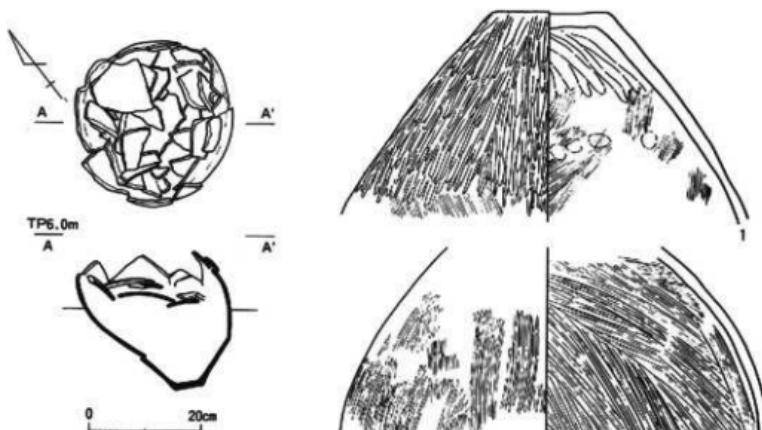
遺物は壺の底部(7)・石鏡(9)が出土している。

• 土器棺墓1

調査区の北東部で検出した。土器棺最上部のレベルは標高約5.97mを測る。口縁部を欠く壺

(2) を正位に据えたもので、上半部は土圧によって西側にやや傾いている。内部には中位まで土が入っており、この上面には別個体の底部(1)が落ち込んでいた。これが蓋として被せられていたと考えられる。また、掘形は検出できなかった。内部の土から、人間の歯1点が出土している。鑑定によるとこの歯は上部の臼歯で、5~6歳までの幼児の乳歯である。

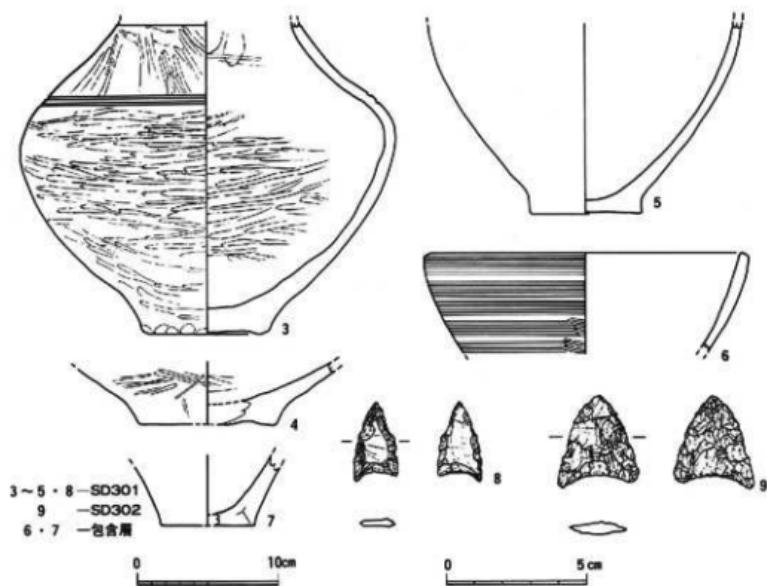
土器の時期は弥生時代中期頃と考えられる。



第6図 1区 土器格塞1平・断面図(S=1/10)



第7図 1区 土器格塞1出土遺物(S=1/4)



第8図 1区 出土遺物(S=1/4+1/2)

<2区>

1. 基本層序

- 第1層 灰黒色粘土
 第2層 灰青色粘質シルト
 第3層 暗灰色微砂・細砂
 第4層 灰青色粘質シルト
 第5層 灰白色細砂
 第6層 茶色粘土・灰白色微砂の互層：(植物遺体を多量に含む)
 全体に安定した水平堆積である。

2. 遺構と出土遺物

遺構・遺物は全く検出されなかった。

< 3 区 >

1. 基本層序

第1層 淡褐色砂疊泥じり粘土

第2層 淡褐色粘土泥じり砂疊

第1・2層が弥生時代前期～中期頃の遺物を少量含む
包含層である。

第3層 明黄灰色細砂

第4層 淡褐色荒砂

第5層 淡黄色細砂

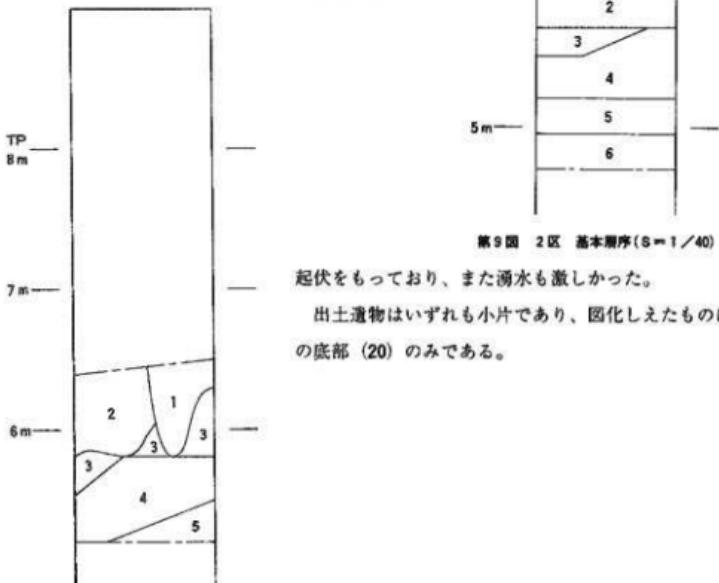
第3層以下は砂層が続き、ベースになると考えられる
遺物はまったく検出されなかった。

2. 遺構と出土遺物

第1・2層が、弥生時代前期～中期頃の包含層である。

少量の土器の他、自然木・加工木片も多く含んでいる。

河川の堆積層と考えられ、ベースとなる砂層は、かなり



第9図 2区 基本層序 ($S = 1/40$)

起伏をもっており、また湧水も激しかった。

出土遺物はいずれも小片であり、固化したものは甕
の底部 (20) のみである。

第10図 3区 基本層序 ($S = 1/40$)

<4区>

1. 基本層序

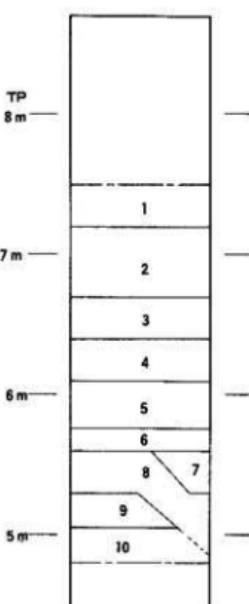
- 第1層 青灰色シルト
- 第2層 淡褐色粘質シルト
- 第3層 淡褐色粘土・細砂・微砂の互層
- 第4層 褐色粘土
- 第5層 褐灰色粘土（植物遺体を多量に含む）
- 第6層 淡青灰色シルト：部分的に見られる。
- 第6層までを層理に従って機械および人力で掘削したが、遺物・遺構は全く検出されなかった。第1～5層は河川の堆積と考えられる。
- 第7層 黒青灰色粘土
- 第8層 暗青灰色粘土
- 第7・8層が弥生時代前期の包含層となっており、中期の遺物も若干含んでいる。第8層は北側に向かって低くなっている。
- 第9層 暗黄褐色砂混じり粘土
- 第10層 黄褐色粗砂

第9・10層がベース層となり、遺物は含んでいない。

2. 遺構と出土遺物

第7・8層の黒青灰色粘土・暗青灰色粘土が弥生時代前期の包含層で、特に前者に遺物は多い。第7層は深さ約30cmの落ち込み状の遺構埋土になる可能性があり、上面のレベルは標高約5.6mを測る。

出土遺物のうち固化した遺物には、土器（10～19）・石器（21）がある。土器はかなり壊滅している。壺の調整には削出突帯と凹線文がみられ、時期はほぼ弥生時代前期中段階と考えられる。

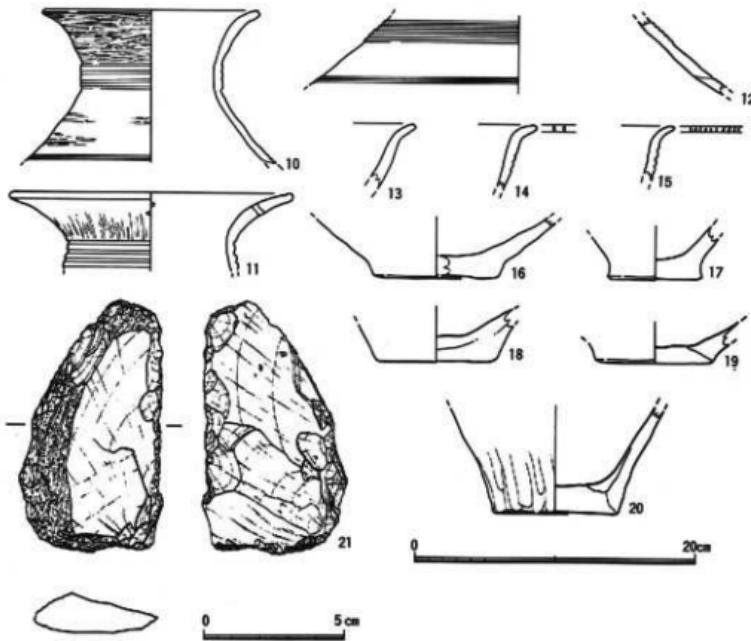


第11図 4区 基本層序(S=1/40)

第4章 まとめ

今回の調査では弥生時代前期～中期の遺構・遺物を検出した。

弥生時代前期では1・4区で遺構・遺物が検出された。4区では明確な遺構は検出できなかつたが、土器が出土したことは、既往の調査で確認されている当時の集落が西へ広がる可能性



第12図 3・4区 出土遺物(S=1/4・1/2)

を示唆するものである。

弥生時代中期では1区で土器棺墓を検出した。棺内部から出土した歯の鑑定から、埋葬されたのは5~6歳までの小児であることが確認されている。東に隣接する財团法人大阪文化財センターによる調査区での弥生時代中期の検出例としては、当調査区の南方約45mと約70mの地点で、方形周溝墓（S T0301・S T0101）が検出されている。このS T0101の主体部には、木棺5基と土器棺2基が用いられている。今回検出した土器棺墓も方形周溝墓に伴うものである可能性があり、西側のS D302が周溝になるのかもしれない。

註 鑑定については、大阪市立大学医学部解剖学教室 嶋田武男先生にお願いした。

参考文献

⑥大阪文化財センター 「龜井」1982

* 「龜井(その2)」1986

第5章 出土遺物観察表

土器

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量 (cm)	口径 器高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態の特徴	備考 残存率
1 4	弥生 底部	1区 [漆器]	15.0 底径 8.1	淡褐色 灰	密・0.1~1.0 mmの砂粒含む	良好		外面縦方向のヘラミガキ。内面斜め方向のハケの チヌア。底部に中凹部がある。外面風痕あり。土器鉢。	底部完存
2 4	弥生 底部	1区 [漆器]	35.0 底径 36.1 7.1	黄茶 淡褐色	密・0.1~1.0 mmの砂粒含む	良好		外面上位後方部のハケのちナデ。下位底方向のヘ ラミガキ。内面斜め方向のハケナデ。口縁部を打ち 欠く外風痕あり。上器部分。	口縁欠損
3 4	弥生 壺	1区 SD301	最大径27.0 底径 9.1	浅黄褐色 淡褐色	密・0.2~2.0 mmの砂粒多く 含む	良好		外面上位後一列め方向、下位横方向のヘラミガキ。 内面上位ナデ。下位横方向のヘラミガキナデ。 底部は中央凸状。	口縁欠損
4 4	弥生 壺	1区 SD301	4.6 底径 9.8	淡褐色 淡褐色	密・0.1~2.0 mmの砂粒含む	良好		外面横方向のヘラミガキ。内面ナデ。底部外面未 調整。	反転 底部 1/4
5 4	弥生 壺	1区 SD301	13.7 底径 8.1	黄茶 淡褐色	密・0.1~1.0 mmの砂粒多く 含む	良好		内外面ナデ。	一部反転
6 4	弥生 鉢	1区 包含層	23.4 7.1	茶褐色 淡褐色	密・0.1~2.0 mmの砂粒多く 含む	良好		内外面ナデ。 外面5段以上の漆器底羅文(8本)	反転 上縁 1/8
7 7	弥生 壺	1区 包含層	5.1 底径 6.8	淡褐色 黄茶	密・0.2~2.0 mmの砂粒多く 含む	良好		外表面ナデ。	反転 底部 1/3
10 4	弥生 壺	4区 包含層	15.7 10.8	淡褐色 淡褐色	密・0.2~2 mmの砂粒多く 含む	良好		外面縦方向のヘラミガキ。内面ナデ。	反転
11 5	弥生 壺	4区 包含層	20.4 5.6	淡褐色 淡褐色	密・0.2~2.0 mmの砂粒多く 含む	良好		口縁部外面堅穴のハケ後ヨコナデ。 底部に2条以上の沈線を有する。	上縁 2/3
12 5	弥生 壺	4区 包含層	5.5	淡褐色 暗灰	密・0.2~1.0 mmの砂粒含む	良好		口縁部中位に穿孔(径4mm)あり。 底部に4条以上の沈線を有する。	上縁 1/5
13 5	弥生 壺	4区 包含層	4.7	淡褐色 暗灰	密・0.2~2.0 mmの砂粒多く 含む	良好	調整不明。	極小	
14 5	弥生 壺	4区 包含層	4.8	黄褐色 淡褐色	密・0.2~2.0 mmの砂粒含む	良好		口縁部ヨコナデ。体部外面斜め方向のハケ、内面 ナデ。口縁部にヘラによる削み目。	極小
15 5	弥生 壺	4区 包含層	3.9	黄褐色 淡褐色	密・0.2~2.0 mmの砂粒含む	良好		口縁部ヨコナデ。 口縁端部にヘラによる削み目。	極小
16 7	弥生 壺	4区 包含層	4.5 底径 9.0	淡褐色 暗灰	密・0.2~2.0 mmの砂粒多く 含む	良好	調整不明。	反転 底部 1/3	
17 8	弥生 底部	4区 包含層	3.9 底径 6.7	淡褐色 暗灰	密・0.2~2.0 mmの砂粒多く 含む	良好		内外面ナデ。	反転 底部 2/3
18 8	弥生 壺	4区 包含層	3.8 底径 8.8	淡褐色 淡褐色	密・0.2~2.0 mmの砂粒多く 含む	良好		外面縦方向のハケのちナデ。	一部反転 底部 4/5
19 4	弥生 壺	4区 包含層	3.0 底径 8.4	黄褐色 淡褐色	密・0.2~2.0 mmの砂粒多く 含む	良好	調整不明。		底部 3/5
20 4	弥生 壺	2区 包含層	7.8 底径 9.0	淡褐色 淡褐色	密・0.2~2.0 mmの砂粒含む	良好	内外面ナデ。	一部反転	
									底部 3/5

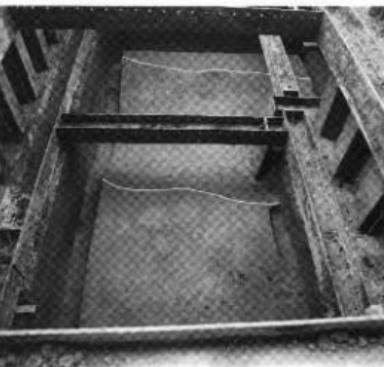
石器

遺物 番号	図版 番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)	長辺 対辺 厚さ
8 5	5	1区 SD301	石鏃	サメカイト	28.5	16.0 3.0
9 5	5	1区 SD302	石鏃	サメカイト	33.5	29.0 4.5
21 5	5	4区 包含層	削器	サメカイト	90.5	51.5 14.0

図 版



1区 第1次面全景(東から)



1区 第2次面全景(東から)



1区 第3次面全景(東から)



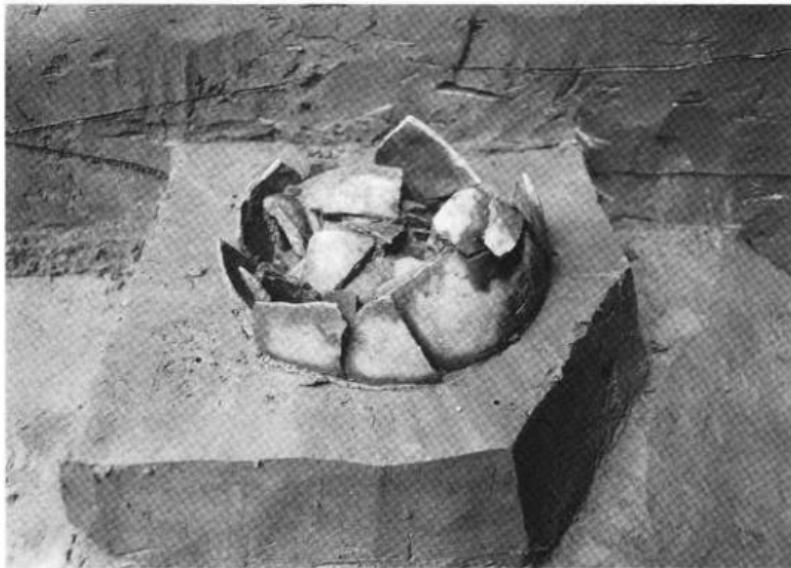
1区 第3次面全景(北から)



1区 第3次面SD301(南西から)



1区 第3次面全景(東から)



1区 第3次面土器棺墓1(南から)



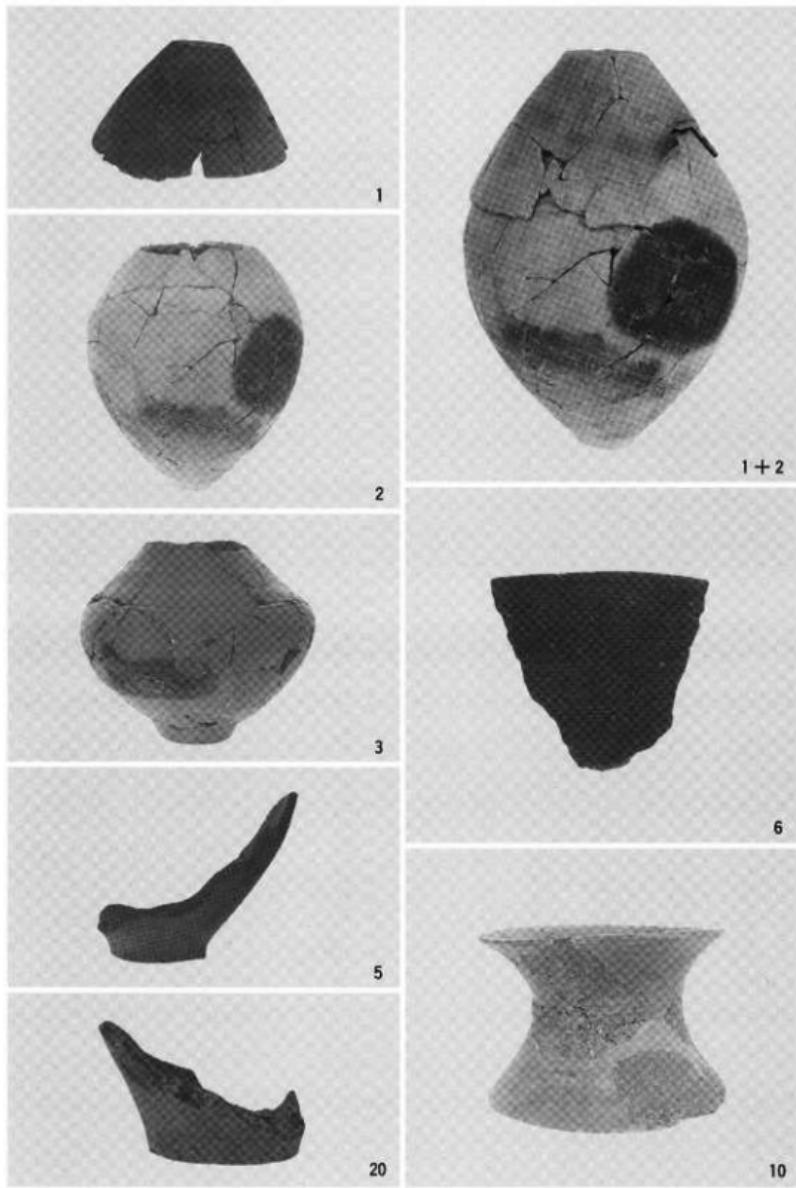
1区 第3次面土器棺墓1(上が東)



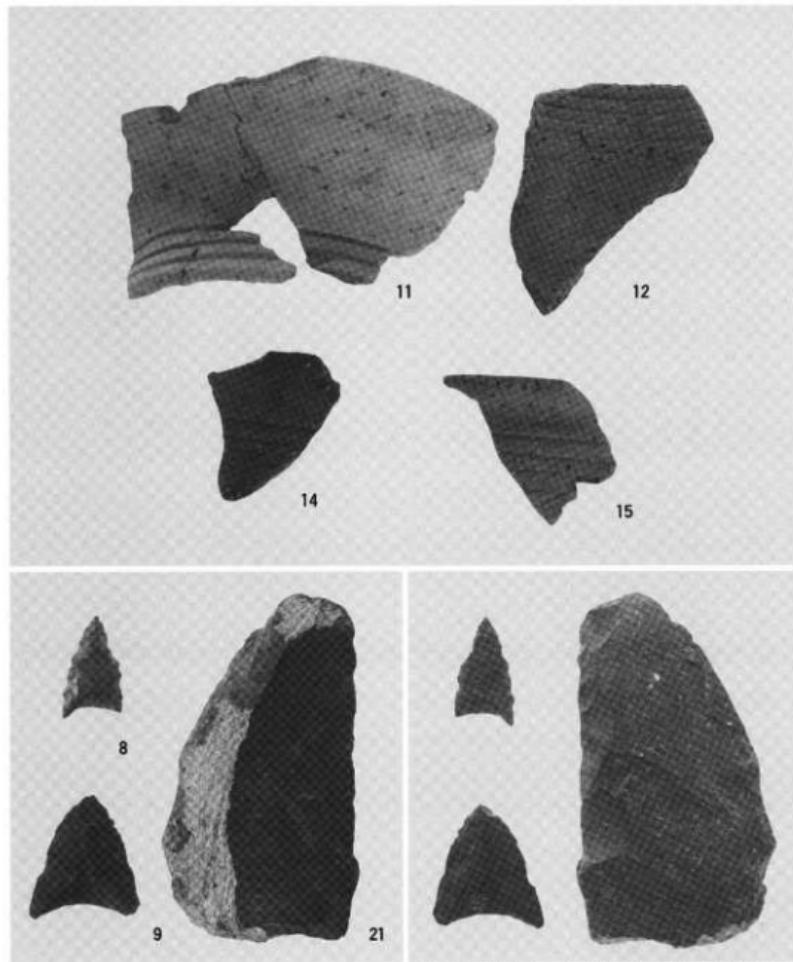
1区 第3次面土器棺墓1(西から)



1区 第3次面SD301内遺物出土状況(北から)



1區 土器棺塞1(1·2)·SD301(3·5)·包含層(6)、3區 包含層(20)、4區 包含層(10)



1区 SD301(8)、SD302(9)、4区 包含層(11~21)



